

野殿深作東遺跡

平成 8 年 3 月

茨城県

下館市教育委員会

野殿深作東遺跡

平成 8 年 3 月

茨城県

下館市教育委員会



(第5号住居跡出土の高杯)

序

野殿台地は、東方遙か筑波の紫峰から足尾・加波山へと連なる雄大な山並みが眺望できる景勝の地であります。そして眼下には、小貝川をはじめ勤行川や大谷川などの流域に形成される低地帯に肥沃な美田が限りなく広がっております。とくに、収穫の秋を迎えると、これらの水田は黄金色に輝き、そして、みごとに実る稻穂を見るにつけ、自然の偉大な素晴らしさを実感できるのであります。

野殿深作東遺跡からは、19軒の古代住居跡に伴って多くの土器類や炭化米が出土しております。この米も他の地区から運ばれたものとは思われません。おそらく、眼下に造成された水田から収穫されたものであります。最近の発見例として、野殿台地の周辺域に所在する鎌田遺跡や明野町の吉田金井遺跡などの低地帯に営まれた集落跡に居住していた人々は、生活を潤す身近な耕作田として丹精込めて維持管理に努めたことでありましょうし、またその反面、たびたびの氾濫・洪水などで、想像以上の難渋を余儀なくしたことでもあります。ともあれ今回の調査は、これまであまり考えてもみなかった古代の人々の生活の有様を、いろいろ偲ぶ機会を与えてくれたと言っても過言ではありません。

このたび、野殿深作東遺跡の発掘調査報告書が上梓の運びとなりました。遺跡は5世紀前半の頃に営まれた集落跡でしたが、その存続期間が短かったとしましても、検出された住居跡や豊富な遺物などの整理・研究によりまして、下館地方の古代文化の多くの謎を解く手がかりを与えてくれた、注目すべき遺跡として評価されております。

発掘調査は、日々例年ない酷暑の連続でした。調査に従事していただいた多くの市民の方々や、ご協力をいただいた関係機関・関係各位に心からお礼を申し上げるとともに、発掘調査の全般から報告書の執筆・編集に至るまで、ご尽力を賜りました西宮一男先生に、あらためて深甚な感謝の意を表したいと存じます。

この報告書によって文化財に対する关心が一層深まり、文化財の保護や新しい文化の創造に寄与することができれば大変ありがたいと思います。

平成8年3月

下館市教育委員会教育長 大山 蘭

例　　言

- 1 本報告は、茨城県下館市野殿字深作1,318番地外に所在する野殿深作東遺跡の発掘調査報告書である。
遺跡名を「野殿深作東遺跡」としたのは、平成5年夏、当該地の西側に隣接して建設された茨城県立県生涯学習センター敷地内の埋蔵文化財の発掘調査を、茨城県教育財團調査課が実施しており、その東に当遺跡が所在するために付した名称である。
- 2 本調査は、下館市において市の教育文化施設を当該地に建設する計画があり、その記録保存を目的にして実施した事前の発掘調査である。
- 3 本調査は、下館市開発公社の要請で下館市教育委員会が主体となって実施された。
- 4 調査期間と実施面積は次の通りである。
調査期間 平成6年5月24日～7月16日（整理期間 7月18日～10月31日）
面 積 3,000m²
- 5 本調査は、下館市教育委員会の依頼により西宮一男が総括調査員として指導に当たり、藤田 実氏には調査補助員として協力を得た。
- 6 実測図の整理並びに出土遺物の復元作業と図面の作成などは、西宮と藤田が主体となり、五十嵐 隆、糸井昭子、山口美知子の各氏に協力を得てまとめた。
- 7 本書の執筆と編集は西宮が担当した。
- 8 調査に当たり、下館市教育委員会をはじめ、下記の関係諸機関の協力を得た。
下館市開発公社、下館市嘉田生崎公民館、茨城県教育庁文化課、茨城県教育庁生涯学習課、東鉄工業株式会社水戸支店。
- 9 調査事務局は、下館市教育委員会生涯学習課文化係におき、整理会場として嘉田生崎公民館を使用させていただくとともに、下記の諸氏のご協力を得ることにより、円滑な調査と整理作業を実施することができた。記して感謝申し上げたい。
開 発 公 社 清野英教、杉山守男、鈴木徳一、野村隆子、秋山 実
生 涯 学 習 課 小里 治、岩崎良一、小林 均、北條洋子、小山法子
嘉 田 生 崎 公 民 館 生井 一、安達次男、仁平智子
東 鉄 工 业 株 式 会 社 鶴岡信之
県 西 教 育 事 務 所 青木武文
- 10 発掘調査期間中は、例年にない記録的な猛暑に加え、予想をはるかに超える集中豪雨にも数回見舞われるなど、苦渋の日々を体験した。ここに、発掘作業にご協力くださった方々の氏名を記して感謝の意を表したい。
阿部美代子、飯泉和子、飯泉みよ子、稻葉 恵、色川昌訓、上野よね子、大吉 実、押坂なお、小畠且子、川田次雄、坂入二三男、鳴原昭二、杉山淳一、杉山ハナ、杉山ミキ、瀬畠しな、外池早苗、羽田スミ、広瀬もと、永盛竹三郎、村上トミ子、山崎クニ、吉崎睦子
- 11 調査に関わる遺物・図面・写真等資料のすべては下館市教育委員会で保管している。

目 次

序

下館市教育委員会教育長 大山 跡

例 言

1 下館市の位置と沿革	1
2 遺跡の分布	2
3 検出された遺構と遺物	6
(1) 第1号住居跡	7
(2) 第2号住居跡	10
(3) 第3号住居跡	12
(4) 第4号住居跡	15
(5) 第5号住居跡	18
(6) 第6号住居跡	20
(7) 第7号住居跡	24
(8) 第8号住居跡	27
(9) 第9号住居跡	30
(10) 第10号住居跡	32
(11) 第11号住居跡	37
(12) 第12号住居跡	40
(13) 第13号住居跡	41
(14) 第14号住居跡	43
(15) 第15号住居跡	47
(16) 第16号住居跡	48
(17) 第17号住居跡	52
(18) 第18号住居跡	53
(19) 第19号住居跡	54
(20) 第1号土 坑	56
(21) 第2号土 坑	57
(22) 第3号土 坑	58
(23) 第4号土 坑	59
(24) 第5号土 坑	60
(25) 第6号土 坑	60
(26) 第7号土 坑	61
(27) 第8号土 坑	62
(28) そ の 他	63
4 お わ り に	65

挿図・図版目次

挿図

第1図	遺跡周辺地形図	5
第2図	野殿深作東遺跡遺構配図	6
第3図	第1号住居跡実測図	8
第4図	第1号住居跡出土遺物実測図	10
第5図	第2号住居跡実測図	11
第6図	第2号住居跡出土遺物実測図	12
第7図	第3号住居跡実測図	14
第8図	第3号住居跡出土遺物実測図	14
第9図	第4号住居跡実測図	16
第10図	第4号住居跡出土遺物実測図	17
第11図	第5号住居跡実測図	19
第12図	第5号住居跡出土遺物実測図	20
第13図	第6号住居跡実測図	22
第14図	第6号住居跡出土遺物実測図	23
第15図	第7号住居跡実測図	25
第16図	第7号住居跡出土遺物実測図	26
第17図	第8号住居跡実測図	28
第18図	第8号住居跡出土遺物実測図	29
第19図	第9号住居跡実測図	31
第20図	第9号住居跡出土遺物実測図	32
第21図	第10号住居跡実測図	33
第22図	第10号住居跡出土遺物実測図	37
第23図	第11号住居跡実測図	38
第24図	第11号住居跡出土遺物実測図	39
第25図	第12号住居跡実測図	40
第26図	第13号住居跡実測図	42
第27図	第13号住居跡出土遺物実測図	43
第28図	第14号住居跡実測図	44
第29図	第14号住居跡出土遺物実測図	47
第30図	第15号住居跡実測図	48
第31図	第15号住居跡出土遺物実測図	48
第32図	第16号住居跡実測図	49
第33図	第16号住居跡出土遺物実測図	51
第34図	第17号住居跡実測図	52
第35図	第17号住居跡出土遺物実測図	53
第36図	第18号住居跡実測図	54
第37図	第19号住居跡実測図	55
第38図	第19号住居跡出土遺物実測図	55
第39図	第1号土坑実測図	56
第40図	第2号土坑実測図	57
第41図	第3号土坑実測図	58
第42図	第3号土坑出土遺物実測図	59
第43図	第4号土坑実測図	59
第44図	第5号土坑実測図	60
第45図	第6号土坑実測図	60
第46図	第7号土坑実測図	61
第47図	第7号土坑出土遺物実測図	61
第48図	第8号土坑実測図	62
第49図	表探及び土捨場から得た遺物実測図	64

図 版

- 図版1 遺跡から筑波・足尾・加波の山並みを望む。遺跡全景。現場テントの下で団壁のひととき。
- 図版2 第1号住居跡・第2号住居跡・第3号住居跡
- 図版3 第4号住居跡・第5号住居跡・第6号住居跡
- 図版4 第7号住居跡・第8号住居跡・第9号住居跡
- 図版5 第10号住居跡・第11号住居跡・第12号住居跡
- 図版6 第13号住居跡・第14号住居跡・第15号住居跡
- 図版7 第16号住居跡・第17号住居跡・第18号住居跡
- 図版8 第19号住居跡・第1号土坑・第2号土坑
- 図版9 第3号土坑・第8号土坑
- 図版10 第3号住・砾石・坏出土状況。第4号住・小型壺・有孔円板出土状況
- 図版11 第5号住・高坏出土状況。第7号住・土器出土状況
- 図版12 第7号住・鍬先出土状況。第8号住・砾石出土状況。第9号住・土器出土状況
- 図版13 第10号住・須恵器・土器・小型壺出土状況
- 図版14 第10号住・白玉・坏出土状況。第12号住・床面状況
- 図版15 第13号住・管玉出土状況。第15号住・鍬先出土状況。第16号住・坏出土状況
- 図版16 第16号住・勾玉出土状況。第1号住居跡出土遺物
- 図版17 第2・3・4号住居跡出土遺物
- 図版18 第5号住居跡出土遺物
- 図版19 第6・7(1)号住居跡出土遺物
- 図版20 第7号住居跡出土遺物(2)
- 図版21 第7(3)・8(1)号住居跡出土遺物
- 図版22 第8号住居跡出土遺物(2)
- 図版23 第9・10(1)号住居跡出土遺物
- 図版24 第10号住居跡出土遺物(2)
- 図版25 第10(3)・11・13号住居跡出土遺物
- 図版26 第14・15・16(1)号住居跡出土遺物
- 図版27 第16号住居跡出土遺物(2)
- 図版28 第3号土坑出土遺物

抄 錄

1 洪水は下館市の文化施設建設計画に伴い、記録保存のため、事前に実施した発掘調査である。調査面積は約3,000m²。現場作業は平成6年5月24日～7月16日に亘り実施し、7月18日～10月31日まで整理作業を行った。

2 野殿深作東遺跡は、大谷川右岸台地上の東端に位置し、下館市大字野殿字深作1318番地外に所在する。当該地は、小貝川流域に展開する広大な冲積地を視野におき、東方遥か筑波の峰から足尾・加波の山塊が望める風光明媚な環境に立地する。調査により古墳時代中期前葉の和泉期に比定される集落跡を検出する。

遺跡名	実施面積	時代	遺構種別	遺構数	重 物
野殿深作東	3,000m ²	古墳	住居跡 土 坑	19 8	土師器 壺・壺・塊・坏・高坏・瓶・鉢・深鉢 須恵器 破片数点 土製品 土玉 滑石製模造品 勾玉・管玉・有孔円板・劍形品・白玉 円板 石製品 砥石・すり石 鉄製品 鍬先・鍬先・刀子 その他 鉄滓

1 下館市の位置と沿革

下館市は、東京から約70kmの首都圏の周辺にあり、関東平野の北部にあたる茨城県の西部に位置し、東経139度58分、北緯36度18分。地質は洪積層と沖積層からなっており、東は紫にけぶる筑波・加波の山塊が連なり、北には遠く日光・那須の連山が見え、南に富士の雲峰を望まれるなど、極めて良好な自然環境のもとで市域は形成されている。

市域の東西を小貝川と鬼怒川が南流し、北は栃木県二宮町に、東は真壁郡協和町、南は同明野町及び関城町、西は鬼怒川を隔てて結城市に接している。市街地のほぼ中央を南方に舌状台地が延び、その南寄りに市街地が形成されている。台地の東を動行川、西を大谷川が南流し、市の南部で小貝川に流入する。市街地の中央を東西に国道50号が貫き、国道とほば並行してJR水戸線が走る。また、市域を南北に国道294号が縦断し、国道に沿って下館駅を起点とする真岡鉄道・関東鉄道常磐線が通る。

下館市の総面積は86.25km²。周囲約61kmで、東西約13km、南北16kmを測り、標高は最高で56m、最低で20mとなっている。また、平成8年3月1日現在の人口は、65,997人（男33,067人、女32,930人）である。

下館地方は、河川の流域に展開する沖積地帯と台地の交錯する地域で、古くから開け、常陸國（茨城県）と下野國（栃木県）を結ぶ要衝の地であるとともに、政治、経済、教育、文化の中心地でもあった。

鬼怒川の左岸台地をはじめ、小貝・動行・大谷の各河川沿いの台地からは、繩文・弥生・古墳各時代の遺跡をはじめ、数多くの遺物が出土している。とくに、女方（おざかた）地区から出土した「人面土器」や「白塗のある人物埴輪」などは全国的に有名であり、古代の新治地方を支配した比奈良珠命の墳墓と伝える徳持古墳（茶間山古墳）や、下館の繁榮を招來した由緒ある久下田城跡などの周知の遺跡が存在する。

「しもだて」の名称が歴史上に登場してくるのは中世になってからである。

弘治2年（1556）、結城氏新法度に「山川・下たて・下妻、惣別北方成敗」とあり、永禄10年（1567）鑄造の定林寺鐘銘にも「常州伊佐群奥崎郷下館村玉見山定林禅寺之櫓鐘也」とある。因に、下館の地名の由来は、勇武の誉れ高い藤原秀郷が天慶の乱（935-941）にあたり、平将門を討つため、当地に下館・中館・上館の3館を築いたことによるともいわれるが異説もある。

下館市域に属する「和名抄」記載の郷は、常陸国新治郡の竹島・沼田・伊譲・博多の各郷とされる。新治郡は平安末期までに東郡・中郡・西郡・小栗御厨に四分されたが、市域はそのうちの西郡・小栗御厨が該当する。西郡はさらに南条・北条に分け、南条は関郡、北条は伊佐郡と称した。なお、「永享記」の嘉吉元年（1441）4月16日に伊佐庄の名が見えるが、この地が庄園として機能を有したかは明らかでない。

南北朝動乱期には、奥州伊達氏の祖とされる伊佐氏が南朝方に呼応し、中館・伊佐城に拠って北朝勢と激しい戦闘を繰りひろげたが、興国4年（1343）に伊佐城は陥落している。

伊佐氏の滅亡後、文明10年（1478）、結城氏広の家臣水谷勝氏が下館に館を築き、天文・永禄期の頃（1532-1569）、豪勇の将として武名をとどろかせた水谷正村（雄竜齋）が下野国境の要地、樋口に久下田城を築い



て宇都宮氏に従えるとともに、結城氏の支援を得て下野国内まで勢力を伸ばしている。

水谷氏8代の勝隆は、大阪夏・冬の陣で武功をたて、寛永16年（1639）備中・成羽（岡山呉成羽町）に移封。その後へ水戸徳川氏初代頼房の嫡男松平頼重が5万石をもって入城しているが、同19年に讃岐・高松に転封となり、下館藩は一時廃藩となり城番が置かれている。

その後、寛文3年（1663）に増山氏、元禄16年（1703）に黒田氏を経て享保17年（1732）、石川氏2万石の支配となり、明治維新に及んでいる。

下館が商業都市として機能し、繁栄の礎を築いたのは、寛永16年に入封した松平頼重による町並み整備に努めたことに始まる。その後、財政維持に苦難の時期があったとしても、流通機能をはじめ商都として著しい発展を遂げている。その背景には、恵まれた地理的条件と相俟って、有力商人層を中心にしての目覚しい商業活動が展開でき得たからであり、それを支えてきたのが石川氏の藩政運営であったことは言うまでもない。

『下館市史』によると、下館藩領と城下町の人口・職業構成を次のように記している。

寛保元年（1741）の領内の武士を除いた人口は12,933（男7,303・女5,630）で、戸数2,918。城下町の人口は、石川氏が入封した享保17年（1732）に1,600、安永7年（1778）に1,634。城下町の職業構成（軒数）は、寛永10年（1633）には、綿屋9、木綿屋4、穀屋9、油屋2、酒造屋4、八百屋4、菴種屋2、古着屋1、酒小売屋6、質屋2、小間物屋5、鍋屋1、紺屋1、荒物屋2となっている。

明治4年（1871）7月の廢藩置県（全国を3府302県）の施行で下館藩は下館県となり、同年11月茨城県に統合。同15年に田中・西郷谷両村が合併して下館町が誕生し、同22年（1889）の町村制施行に伴い、市域に真壁郡下館町、中村（桶口・口戸・柴山・折木・林・筑瀬・谷部・石塔・泉・中館の各村が合併）、河間村（奥田・下高田・落合・八田・羽方・西田・国府田・大闇・上中山・野の各村が合併）、竹島村（川澄・高島・小林・横鳥・直井・金丸・稲野辺・市野辺の各村が合併）、養蚕村（成田・茂田・塚原・島・深見・下中山・蘇・惣持・大塚・上川中子・川連の各村が合併）、嘉生田崎村（下岡崎・東復生・西復生・野田・西石田・飯田・嘉家佐和の各村が合併）、大田村（二木成・玉戸・西芳町・西方・野殿・下野殿・布川の各村が合併）、伊讚村（谷中・飯島・栗島・石原田・西大島・下平塚・西谷貝・岡岸・菅谷・外塚・神分・笠塚・小川・伊佐山・九藏新田・下川島・女方の各村が合併）、五所村（子思儀・森添島・西山田・下江連・五所宮・大谷・小塙・灰塚・棹ヶ島・上平塚・山崎の各村が合併）が成立。昭和26年（1951）伊讚村が下館町と合併、同29年に竹島・養蚕両村が下館町と合併、同年3月に五所・中・河間・大田・嘉生田崎の五村が下館町と合併して、新たに下館市が発足した。

2 遺跡の分布

下館市は、前述したように鬼怒・小貝・勤行・大谷の4本の河川によって浸食された台地上に立地しており、遺跡もまた、それらの河川や樹枝状に入り組む谷を望む台地上に数多く分布し、縄文時代の早期の頃に遡って人々の営みを知ることができる。

縄文時代では、これまでに周知されている遺跡としては、まず、鬼怒川左岸台地上の女房本田前遺跡があげられる。この遺跡は複合遺跡であるとしても、早期に比定される土器を伴っていることから、市域で最古の遺跡のひとつにあげられている。次いで、十二犬遺跡・下川島弁天遺跡・玉戸新田遺跡などが前期の遺跡と確認されているが、弁天並びに玉戸新田の両遺跡は中期から晩期の遺物が伴出しており、複合遺跡の様相を示して

いる。この他、左岸台地上には前原遺跡・元坪遺跡などが知られているが、いずれも中期から後・晩期に比定される遺跡である。

大谷川右岸台地上には、本遺跡に近接して不動坂遺跡があり、晩期の資料が得られている。また、清水不動遺跡は、後期末葉から晩期初頭の頃の資料が表採できる。昭和56年8月には外塚遺跡で都市計画事業に伴う事前の発掘調査が行われ、縄文時代の生活を復原するうえで貴重な数々の資料が得られている。遺跡は、大谷川東岸から東へ約350m隔てる神明神社跡付近の標高約30mを測る微高地に所在し、前・中・後・晩期と長期間に亘って営まれた遺跡であることが、土器・石器・土製品・動・植物の遺存体等の豊富な出土品により立証されるとともに、東日本における数少ない低地遺跡のひとつとして注目されている（昭和60年3月「外塚遺跡」、そのダイジェスト版が61年3月、ともに下館市教育委員会から刊行されている）。

勤行川左岸台地上では、中期の土器片が散布する大閑遺跡が知られているにすぎない。したがって、計画的な分布調査を行い、実態把握の必要性が望まれている。

小貝川流域に目を転じると、所在の明らかな遺跡のすべてが左岸台地上に位置する。これまでに、宮脇遺跡・南台遺跡・深見新田遺跡・権現山遺跡などが周知されているが、いずれも中期後葉から晩期前葉にかけての資料が得られる遺跡である。

市域における弥生時代の遺跡の数は極めて少ない。本遺跡からも数点の土器片が表採され、問題提起されているように、他にも市域の範囲で、遺跡の存在を立証し得る根拠に乏しく、その判断に苦慮した実例のいくつを地元の研究者から寄せられている。してみると、現在のところ、弥生時代に位置付けできる遺跡は、僅かに女方遺跡が知られているにすぎないということになる。

女方遺跡は、昭和14年（1939）田中國男が3か年に亘り発掘調査を行った「再葬墓」の遺跡である。調査面積約400m²の範囲から41基のピット群が検出され、市民周知の人面土器なども発見されており、祭祀遺跡と考えられている。

古墳時代における古墳の分布は、大谷川右岸台地の縁部一体で、本遺跡に近接して円墳数基からなる野殿古墳群（内1基の主体部は環小口積石棺）が認められるほかは、鬼怒川左岸台地上の女方古墳群（円墳10余基）と弁天古墳群（円墳2基）。小貝川左岸では、その沖積地に立地している徳持古墳（芦間山古墳・全長約90mの前方後円墳）をはじめ、台地上に確認される南台古墳群（円墳2基）・北台古墳群（円墳）・宮脇古墳群（円墳）・北茂田古墳群（円墳3基）などがあり、勤行川右岸台地上に富士東古墳群（円墳3基）が所在する。分布上の特徴については、おおむね市域の東と西に偏在する点があげられる。これらの古墳群の性格などは、昭和27・28年に女方古墳群の円墳3基（主体部は横穴式石室・環小口積石棺など）の学術調査を除いて、ほとんど本格的な調査が行われておらず不明の点も多いが、徳持古墳について専門家は、築造年代を6世紀前葉と比定している。

古墳時代の集落跡の存在を予測可能とする遺物散布地（包蔵地）を概観するとき、市域のそれは縄文時代の遺跡と重複している例が極めて多いことに気がつく。昭和45年度の『茨城県遺跡地名表』に登載される遺跡のうち、鬼怒川左岸台地上に所在する女方本町前遺跡をはじめとして、十二大遺跡・下川島弁天遺跡・玉戸新田遺跡・前原遺跡・鷺の巣遺跡・元坪遺跡などは、いずれも土師器・須恵器を伴っている。

大谷川右岸台地上に在る本遺跡を加えて、不動坂遺跡・清水不動遺跡にも土師器・須恵器の散布が認められ、勤行川左岸の大閑遺跡にしても同様である。

小貝川左岸台地上に所在する宮脇遺跡・南台遺跡・深見新田遺跡・権現山遺跡に加えて北大久保遺跡でも、それぞれ土師器・須恵器の散布が観察されている。

このように、古墳時代の所産と想定される土器を伴っている遺跡を、地名表に挿って列挙してみたが、これらのすべては地表観察の結果でまとめられたものだけに、現時点においては、遺跡の性格などを求めるることはほとんど不可能に近い。遺跡のなかには、或いは、歴史時代の範疇に含まれる遺跡が存在する可能性があるかも知ないので、このことに十分留意しながら検討していく必要があろう。

下館市域において、これまでに実施された古墳時代の集落遺構の調査は、平成5年度の野殿遺跡に次いで本遺跡が2例目となるが、ここで、開発行為に伴って発見された「鎌田遺跡」の概略について触れておきたい。

鎌田遺跡は、勤行川と大谷川に挟まれた標高約28mとを測る沖積地に立地し、これまでまったく知られていない遺跡だったが、昭和55年2月、鎌田地区で実施された圃場整備事業に伴って、多量の土器が出土したことによって発見された。位置は下館市立南中学校の東約200mの平坦地で、現在は水田となっている。その時点で速やかな対応がなかったために、正確な出土地点や遺構・遺物など出土状況の詳細については明らかでない。しかし、幸いなことに、工事関係者の好意によって保存が図られた一部の土器片を下館市教育委員会で保管していたが、それを筑波大学歴史・人類学系考古学研究室が主体となって整理・復原を行い、研究成果を平成3年の『古墳測量調査報告書』〈茨城南部古代地域史研究〉に発表されている。

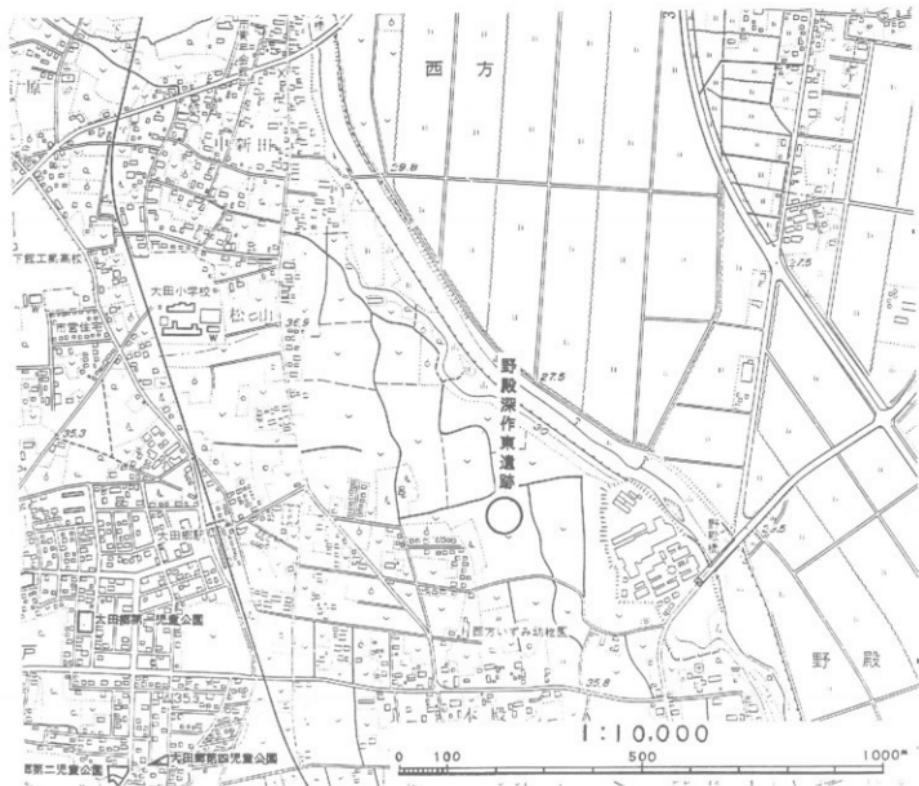
それによると、出土した土器は煮・堆・壺・高坏・器台などの器種が主体で、土器の組合せから集落跡の存在を特定し、年代的な位置付けを4世紀から5世紀前葉の五領期の範疇に入る遺跡としている。そして、S字状口縁台付壺など、いわゆる東海系の土器が流入している点にとくに注目され、その背景には人々が低地への進出になんらかの形で関わっていたと指摘している。

このように、低地に成立を果たした五領期の鎌田遺跡の発見は、これまで当該期の諸様相について不明確の面が多かっただけに、今後の調査研究に少なからず示唆を与えるものと期待されている。

歴史時代に入り、県西地方で学術的に高く評価される遺跡として、まず、協和町の新治郡衙跡・新治庵寺跡と結城市の結城庵寺跡などをあげることができるが、下館市域にはこれまでのところ該期に比定される遺跡は未発見である。

下館地方は、西に下総、北に下野と境する要衝の地を占めていた関係で、律令体制下の施策をすすめるにあたり、行政に関わる施設の構築が不可欠とされた時期があったようにも考えられることをふまえ、やや飛躍するが、もともと下館の地には比較的平坦地が少ないことに加え、河川・沼沢・低地といった不適な空間がありにも広範に及ぶとする地理的な制約が要因となり、施設の構築を見送られた経緯があったのかも知れない。としても、平安後期には、協和町から市域の北部にかけて成立をみた小栗御厨とに関わる遺跡の顕彰も今後の課題といえるし、国府田周辺に常陸国府の神撰田が置かれたとする史実の立証についても、考古学的領域からの検討が求められるかも知れない。

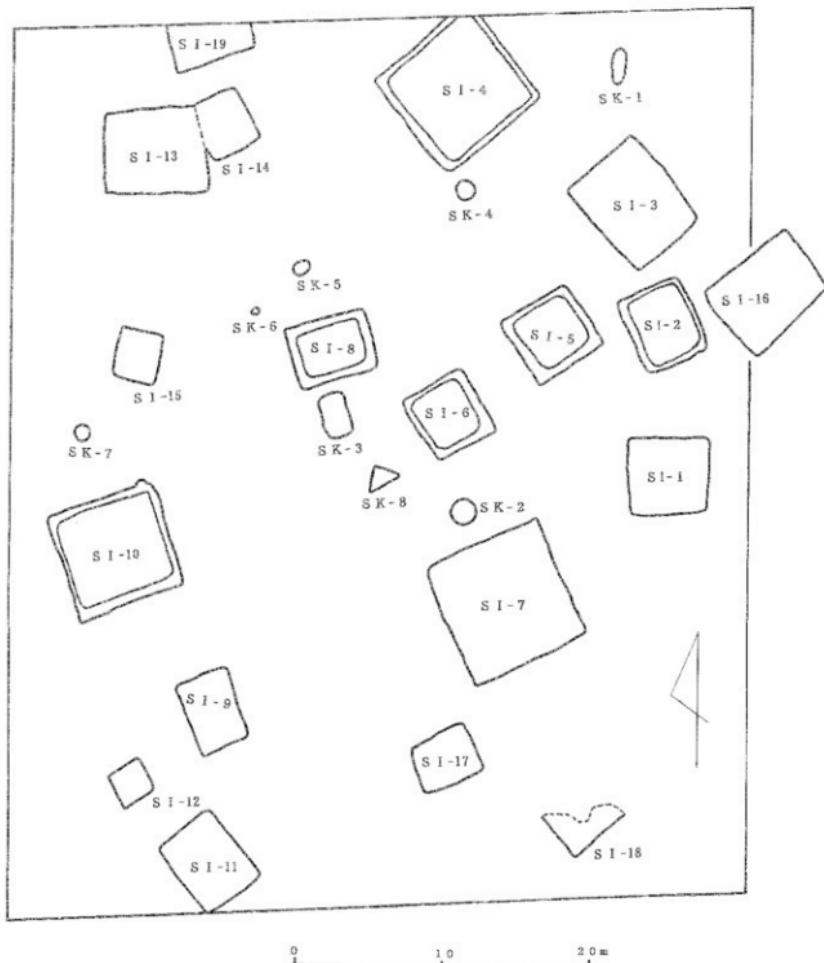
いずれにしても、下館地方には古代の後半から中世にかけて、興味ある幾多の課題を投げかけられているのである。たとえば、名も知られていない在地有力者の中には、館を構え、土塁を築いて防御的な備えに徹した人物もいたであろうし、また、隸属的な立場に置かれていた人々は堅穴式住居などで苦渋な生活を余儀なくしていたことも想像できる。ともあれ、これらの人々の生活の匂いを留める遺構が、どこかに埋存していて然るべきと考えられる。市域において、当該期の遺跡が発見されることを、挙げて、期待するものである。



第1図 遺跡周辺地形図

3 検出された遺構と遺物

東西50m×南北60mの3,000畝において、堅穴住居跡15棟と土坑跡8基が確認されているが、これらの遺構は特定の場所に偏ることなく平均的に分布する。

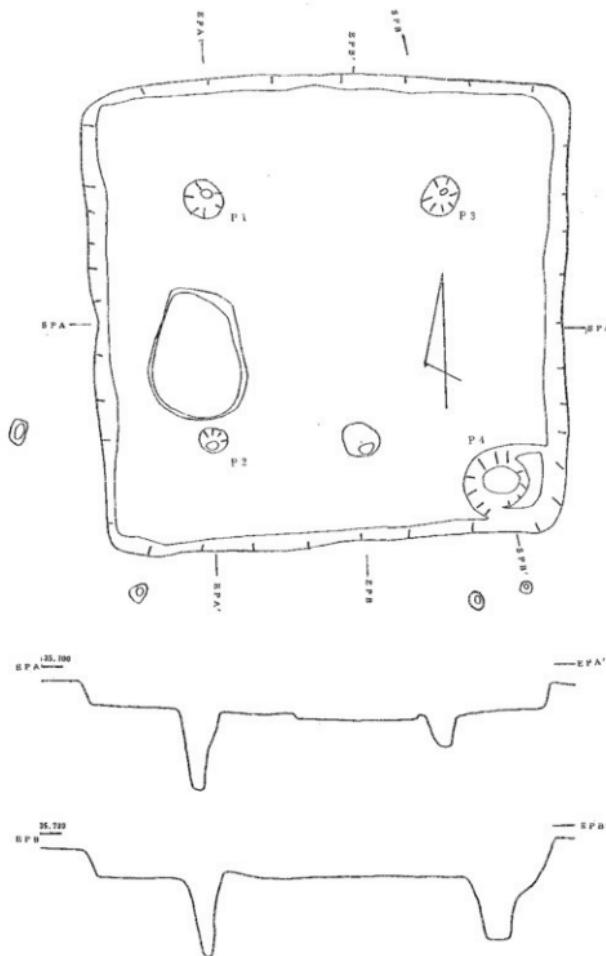


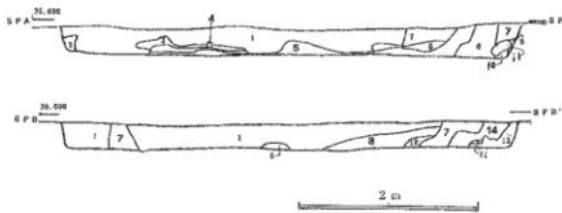
第2図 野殿深作東遺跡遺構配置図

(1) 第1号住居跡 (第3・4回)

形態 方形を呈する。主軸方位 N-4°-W。規模 中輪線上南北5.35m、東西5.15mを測る。

柱穴 P1~4の4本が相当する。P1径0.45m、深さ0.90m、P2径0.30m、深さ0.30m、P3径0.40m、深さ0.90m、P4径0.50m、深さ0.70mを測る。壁溝 遺存部より検出されていない。床面 貼り床で、とくに中央部がしまっている。中央から西壁にかけて焼土充満、炭化材が遺存。貯藏穴 北東部コーナーに掘り込まれている。ほぼ円形を呈し、東西径0.70m、南北径0.75m、深さ0.19mを測る。遺物 土師器 壱・壺・高壺・甕、滑石製品 白玉、石製品 砥石・敲石(すり石)、土製品 土玉などが検出されている。





土層凡例

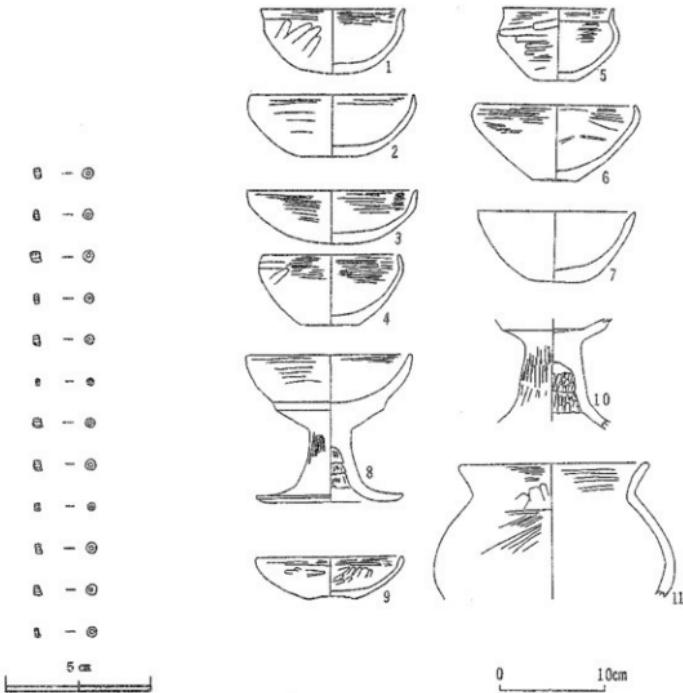
- 1 黒褐色 (ローム小ブロックとローム粒子を少量含む。焼土粒子・炭粒も若干含み、しまりは普通。)
- 2 明褐色 (ローム粒子を多く含む。)
- 3 赤褐色 (燒土粒子を多く含む。しまりはやや柔らかい。)
- 4 黒 色 (ローム粒・焼土粒を若干含む。しまりは非常に良い。)
- 5 黑褐色 (ローム粒子を若干含む。しまりは非常に良い。)
- 6 斜褐色 (ローム小ブロック・ローム粒子を多く含み、しまりは非常に良い。)
- 7 塗褐色 (ローム粒子を多く含み、焼土粒子も若干含む。しまりはやや柔らかい。)
- 8 塗褐色 (ローム粒子を多く含み、炭粒と焼土粒子も若干含む。しまりはやや柔らかい。)
- 9 青褐色 (ロームに似る。しまりは普通。)
- 10 黒褐色 (焼土粒を若干含み、しまりはやや柔らかい。)
- 11 黒 土 (しまりは良い。)
- 12 塗褐色 (ローム粒子を若干含み、しまりは普通。)
- 13 間 色 (ローム粒子を多く含み、焼土粒子も少量含む。しまりは普通。)
- 14 塗褐色 (ローム粒子を多く含み、焼土粒子も少量含む。しまりは普通。)

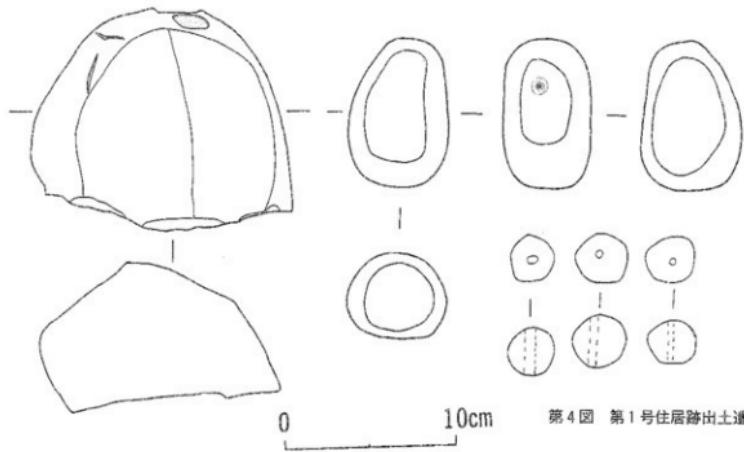
第3図 第1号住居跡実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

番 号	器 種	法 量 (cm)	器 形・成 分 等 の 特 徴	色 調	胎 土	認 成	備 考
1	土 壁 壊	器高 6.0 口径 13.9	九底。体部は内壘して立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部は外傾する。体部内・外面へラ削り。	暗褐色	砂 粒	普 通	体部外面に煤付着 北西部床面
2	土 壁 壊	器高 5.9 口径 16.1	口縁部の一部欠損。丸底気味。休部は内壘して立ち上がり、口縁部はゆるやかに外傾する。口縁部内・外面横ナテ。内・外面ナテ。	暗褐色	砂 粒	普 通	北西部覆土下層
3	土 壁 壊	器高 5.0 口径 16.6	九底。体部は内壘して立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部はゆるやかに外傾する。口縁部内・外面横ナテ。体部内面へラナテ。	黄褐色	砂 粒	普 通	中央部床面
4	土 壁 壊	器高 6.7 口径 13.3 底径 5.4	口縁部の一部欠損。上昇底気味。休部は内壘して立ち上がり、口縁部は内壘する。口縁部外側横ナテ。休部内・外側ナテ。	灰褐色	砂 粒	普 通	南東貯蔵穴内覆土 中層
5	上 壁 壊	器高 6.7 口径 10.8 底径 4.4	平底。休部は内壘気味に立ち上がり、口縁部はゆるく外反する。底部から休部にかけてへラ削り。口縁部内・外側及び休部内面ナテ。	赤褐色	砂 粒	良 好	北壁付近床面
6	土 壁 壊	器高 7.2 口径 15.3 底径 4.3	上昇底気味。休部は内壘して立ち上がり、口縁部はやや内側する。底部から休部にかけてへラ削り。休部外側へラ削りナテ。休部内・外側ナテ。	赤褐色	砂 粒	良 好	北壁付近覆土下層
7	土 壁 壊	器高 8.7 口径 15.4	九底気味。休部は内壘して立ち上がる。休部内面と口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部内・外面横ナテ。休部内・外側へラ削り。	褐 色	砂 粒	粗 糙	南東コーナー付近 床面
8	土 壁 高 壊	器高 13.9 口径 16.1 底径 14.3	脚部は円筒状で、素部で大きく開く。环部は外側下方に稜を持つ。内壘気味に立ち上がる。环部内・外側へラ削り。脚部内・外側へラ削り。	黄褐色	砂 粒	普 通	東壁付近床面
9	土 壁 高 壊	口径 14.0	脚部欠損。環部は内壘氣味に開き、内・外側ともへラ削り。	黄褐色	砂 粒	良 好	中央部床面
10	土 壁 高 壊		脚部のみの破片。脚部は円筒状で、素部で大きく開く。脚部内・外側面方向へラ削り。	暗褐色	砂 粒	普 通	北西コーナー付近 覆土下層
11	土 壁 裏	底径 17.8	脚部上位から口縁部にかけての破片。脚部はくびれ、口縁部は外反する。口縁部を外上方にわずかにつまみ上げる。口縁部内・外側横ナテ。顧部内・外側へラ削り。	暗褐色	砂 粒	普 通	北西コーナー付近 床面

番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
12	臼 玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	南壁付近覆土下層	滑石
13	臼 玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
14	臼 玉	0.6	0.5	0.5	2.0	0.1	100	"	"
15	臼 玉	0.5	0.5	0.2	1.5	0.1	100	"	"
16	臼 玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
17	臼 玉	0.3	0.3	0.2	1.5	0.1	100	"	"
18	臼 玉	0.5	0.5	0.4	2.0	0.1	100	南壁付近覆土	"
19	臼 玉	0.5	0.5	0.4	2.0	0.1	100	"	"
20	臼 玉	0.3	0.4	0.2	1.5	0.1	100	"	"
21	臼 玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
22	臼 玉	0.5	0.5	0.4	2.0	0.1	100	"	"
23	臼 玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
24	敲石(すり石)	8.7	5.9	5.0	---	393.0	100	中央部床著	
25	砥石	12.8	15.2	8.0	---	2250.0	100	西壁付近覆土下層	2面使用
26	土 玉	3.1	3.1	---	5.0	14.1	100	南壁際覆土下層	
27	土 玉	2.8	2.7	---	8.0	13.8	100	東壁際覆土中層	
28	土 玉	2.8	2.9	---	2.0	13.6	100	中央部床著	

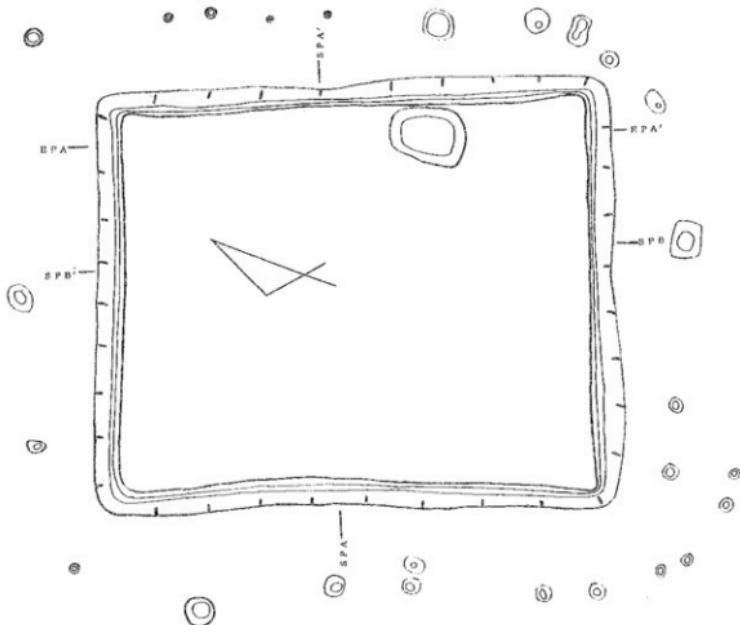


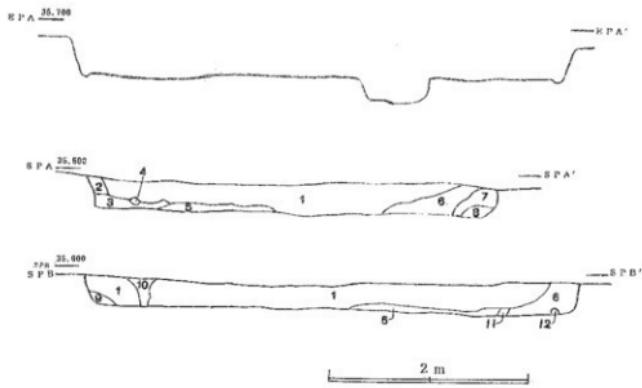


第4図 第1号住居跡出土遺物実測図

(2) 第2号住居跡 (第5・6図)

形態 やや長方形を呈する。主軸方位 N-23°-W。規模 中軸線上南北5.25m、東西4.35mを測る。柱穴無し。壁溝 全壁に巡り、幅0.10~0.15m、深さ0.05mを測る。床面 貼り床で堅くしまり、とくに西側が顯著。貯蔵穴 東壁に添って東南部コーナー寄りに掘り込まれている。梢円形を呈し、長軸0.75m、短軸0.55m、深さ0.28mを測る。遺物 上師器 墓・壺・小型甌、石製品 磨石(すり石)などが検出されている。





土器凡例

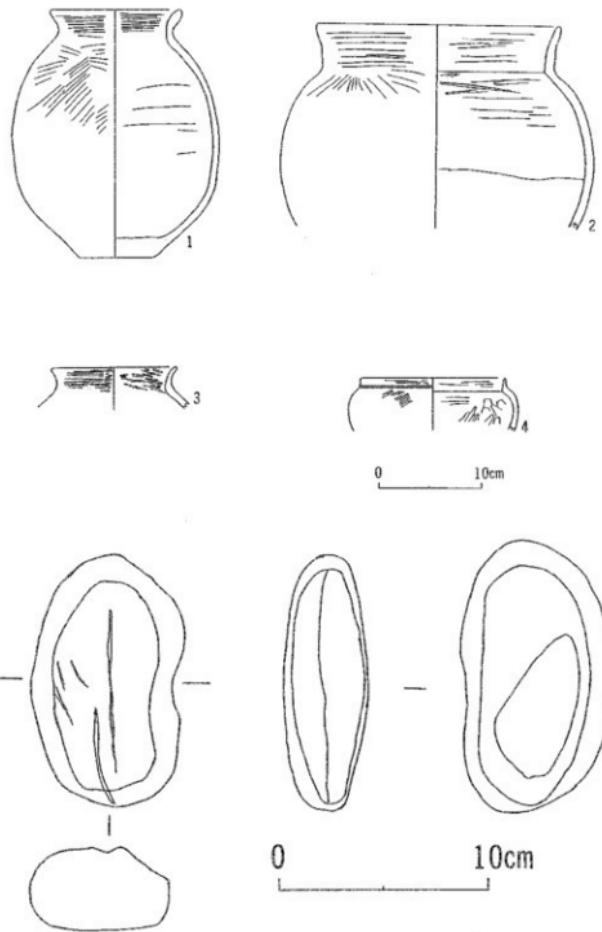
- 1 塗褐色 (ローム粒子・黒色鉱・炭粒を若干含む。しまりは普通。)
- 2 黒褐色 (ローム粒子を若干含み、しまりはやや柔らかい。)
- 3 塗褐色 (ローム小ブロック・ローム粒子を若干含み、しまりは普通。)
- 4 黄褐色 (ローム大ブロック。しまりは非常に良い。)
- 5 喷褐色 (ローム粒子を少々含み。しまりは普通。)
- 6 明褐色 (ローム粒・ローム粒子を多く含む。)
- 7 明褐色 (ローム粒子を多く含む。しまりは普通。)
- 8 黑 色 (ローム粒子を若干含む。しまりは普通。)
- 9 黑 色 (ローム小ブロックを若干含む。)
- 10 黑 色 (ローム粒子を若干含み、しまりはやや柔らかい。)
- 11 暗 色 (ローム粒子を少々含み、しまりは非常に良い。)
- 12 黄褐色 (ローム粒子のみ。しまりは柔らかい。)

第5図 第2号住居跡実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

番 号	器種	法量 (cm)	器形・成形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土 鍋 甕	甕高 24.5 口徑 12.8 底径 7.0	平底。体部中位に最大径を持つ。口縁部ハケ目調査の後上半部斜径の磨き。口縁部内・外面横ナメ。	赤褐色	砂 粒	普 通	体部に復け唇 (一次焼成) 北東部窯上中央
2	土 鍋 甕	口径 底径 (35.6)	体下半部欠損。体部中位に最大径を持つ。口縁部内・外 面横ナメ。体内の器壁面のあねが著しい。	灰褐色	砂 粒	粗 糙	北西部床面
3	上 鍋 小型甕	口徑 (12.0)	口縁部破片。頸部は「く」の字状にくびれ、口縁部は外 反する。口縁部内・外面横ハケ目調査。	黄褐色	砂 粒	普 通	煤付着 窯上
4	上 鍋 甕	口徑 (14.2)	口縁部破片。体部は内側気味に立ち上がり、口縁部との 境に弱い縫を持つ。体部へラブリ。	赤褐色	砂 粒	普 通	窯上

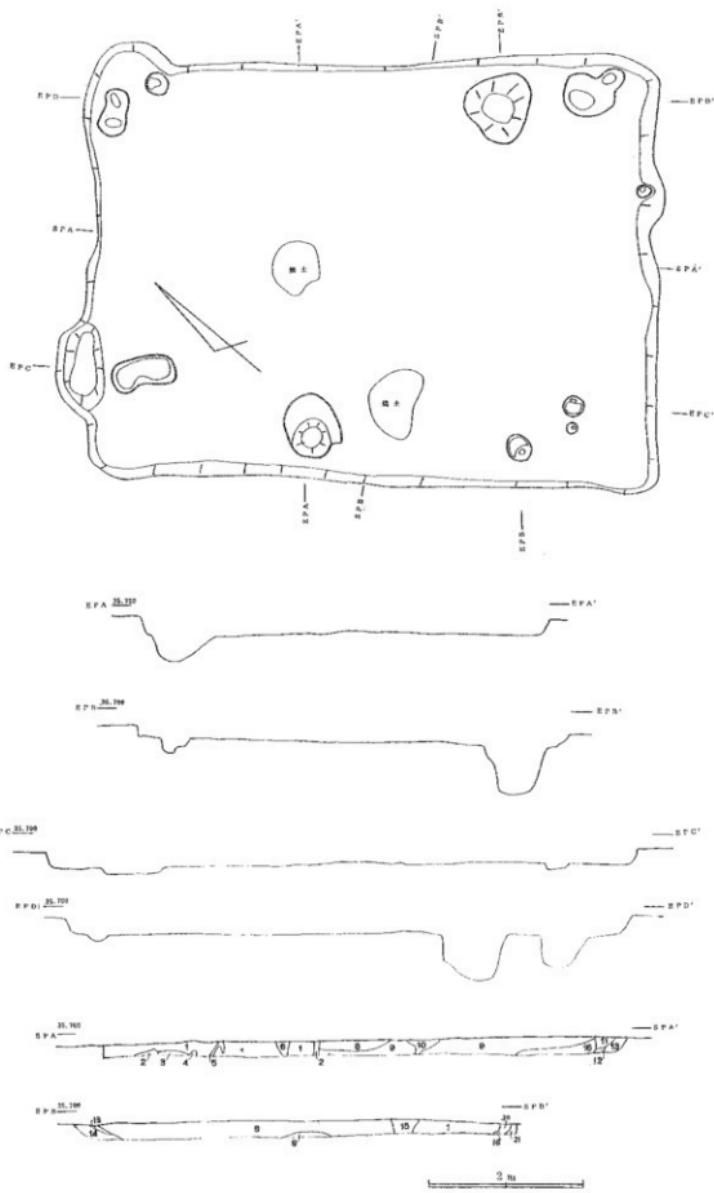
番 号	器種	法量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
5	砾石 (すり石)	12.3	6.8	4.1	...	385.0	100	南東部床着	



第6図 第2号住居跡出土遺物実測図

(3) 第3号住居跡 (第7・8図)

形態 やや長方形を呈する。主軸方位 N-43°-W。規模 中軸線上南北7.30m、東西5.45mを測る。柱穴 不明瞭。壁溝 全周しており、幅0.08m~0.13m、深さ0.06m程度を計測。床面 全体的にしっかりした貼り床である。西壁の中央寄りに焼土の堆積が認められ、その東側に接して床面に円形状の窪みがあり、よく焼けていることから炉跡とみられる。貯藏穴 東南部コーナーに近く位置し、南北径0.85m、深さ0.55mを計測し、隅丸三角形状をなしている。遺物 土師器 壺・甕・壺、土製品 土玉、石製品 砥石、滑石製品 有孔凹板などが検出されている。



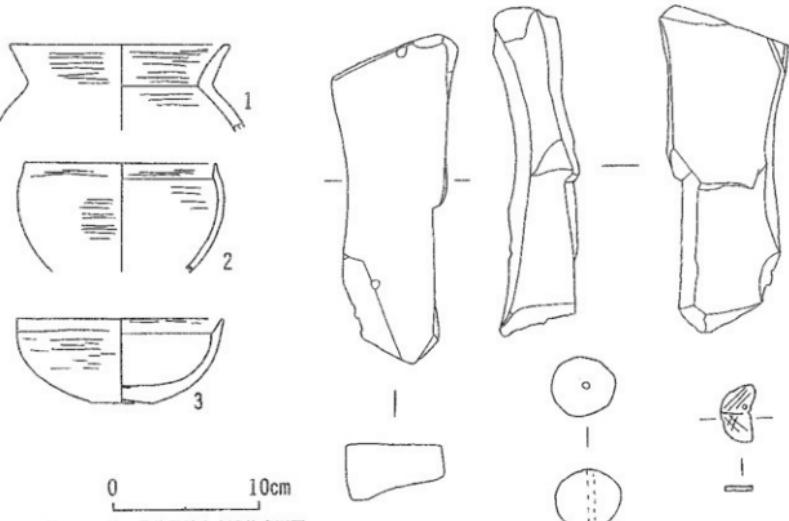
土器凡例

- 1 黒褐色 (ローム粒子を少量含み、焼土粒子も若干含む。しまりは普通。)
- 2 黒褐色 (ローム粒子を若干含み、しまりは普通。)
- 3 増褐色 (ローム小ブロックを若干含み、ローム粒子も少含む。しまりは普通。)
- 4 黄褐色 (ローム大ブロックのみ。しまりは非常に良い。)
- 5 貝褐色 (ローム粒を若干含み、ローム粒子も多く含む。しまりは普通。)
- 6 増褐色 (ローム粒を少含み、焼土粒も若干含む。しまりはやや柔らかい。)
- 7 黑褐色 (ローム粒子を若干含み、しまりは普通。)
- 8 黑褐色 (ローム粒子を少含み、しまりは普通。)
- 9 増褐色 (ローム粒子を多く含み、しまりは普通。)
- 10 黑褐色 (ローム粒子を若干含み、炭粒も多く含む。しまりは普通。)
- 11 黄褐色 (ローム粒子の中に黒色粒子を若干含む。しまりは非常に良い。)
- 12 増褐色 (ローム粒子を多く含み、しまりは普通。)
- 13 黄褐色 (ローム粒子を非常に多く含み、炭粒子も若干含む。しまりは普通。)
- 14 暗褐色 (黒色粒子を若干含み、しまりは普通。)
- 15 黑色 (ローム粒子を若干含み、しまりは普通。)
- 16 黑色 (黒色粒子を少含み、しまりは普通。)
- 17 増褐色 (ローム粒、ローム粒子を若干含む。しまりは普通。)
- 18 黑色 (黒色粒、黒色粒子を多く含む。しまりは普通。)

第7図 第3号住居跡実測図

第3号住居跡出土遺物観察表

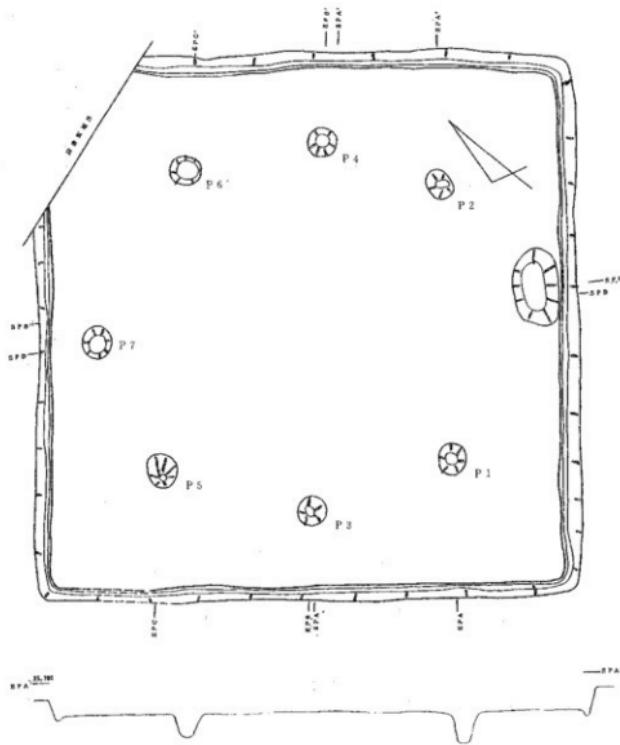
番号	品種	法量 (cm)	器形・成形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考	
1	土師甕	口径 (15.0)	体下半部欠損。断面は「く」の字状に外反する。口縁部内・外面部斜面。	明褐色	砂粒	普通	南西部覆土下層	
2	土師甕	口径 (13.2)	口縁部稍薄。底部は内壁気味に立ち上がり、口縁部と頂部に弱い稜を持つ。口縁部内・外面部斜面。	黄褐色	砂粒	普通	南西部床面	
3	土師壺	品高 6.3 口径 14.0 底径 4.1	平底。体部は内壁気味に立ち上がる。体部内・外面部横ナデ。底部の摩耗が著しい。	赤褐色	砂粒	普通	(二次焼成) 北東壁際覆土下層	
番号	器種	法量 (cm)	孔 径 最大長 最大幅 最大厚 (mm)		重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
4	有孔円板	2.6 (1.4)	0.2	2.0	2.0	50	南西部床着	滑石
5	砥石	22.2	8.2	5.2	...	995.0	100	北東壁際覆土上層
6	土玉	2.8	3.1	...	4.0	0.2	100	南西部床着

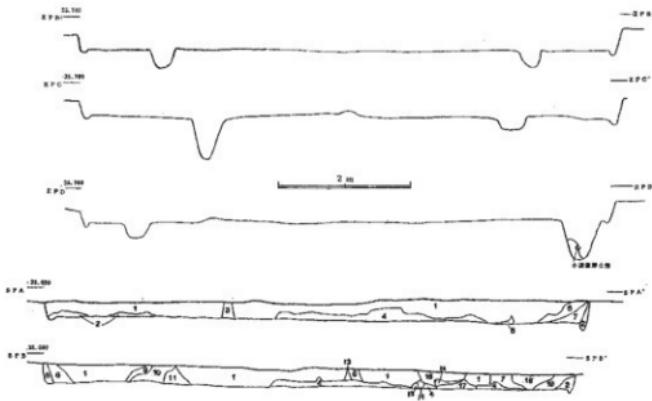


第8図 第3号住居跡出土遺物実測図

(4) 第4号住居跡（第9・10図）

形態 正方形に近い形状を呈する。主軸方位 N-39°-W。規 模 中軸線上東西8.20m、南北8.35mを測る。柱 穴 7か所を確認。P 1とP 6、P 2とP 5は対角線上に位置し、P 3とP 4は、その位置関係から棟持柱と推定される。P 7は、P 5とP 6を結ぶ線上中央の北側で確認。P 1東西径0.48m、南北径0.44m、深さ0.35m、P 2東西径0.37m、南北径0.45m、深さ0.46m、P 3東西径0.44m、南北0.43m、深さ0.30m、P 4東西径0.44m、南北径0.44m、深さ0.26m、P 5東西径0.46m、南北径0.47m、深さ0.62m、P 6東西径0.46m、南北径0.46m、深さ0.17m、P 7東西径0.48m、南北径0.46m、深さ0.22m程度を計測。壁 溝 全周しており、幅0.08m、深さ0.08mを測る。床 面 全体的に堅くしまる貼り床。中央部からやや北寄りに薄い焼土の堆積を認める。貯藏穴 南壁に沿ってほぼ中央に橢円形に掘り込まれ、底部に置かれた白色粘土塊の下に小型壺（ミニチュア）を埋め込む。大きさは長軸1.46m、短軸0.69m、深さ0.60mを測る。遺 物 土器類 小型壺、坏、高坏、鉢、須恵器 破片数点、滑石製品 有孔円板、円板、劍形品、白玉、石製品 すり石、砥石、土製品 土玉などが検出されている。その他 北東部コーナーの直上は公道（農道）が敷設されており、調査区域外に所在するために詳細は不明である。





土層凡例

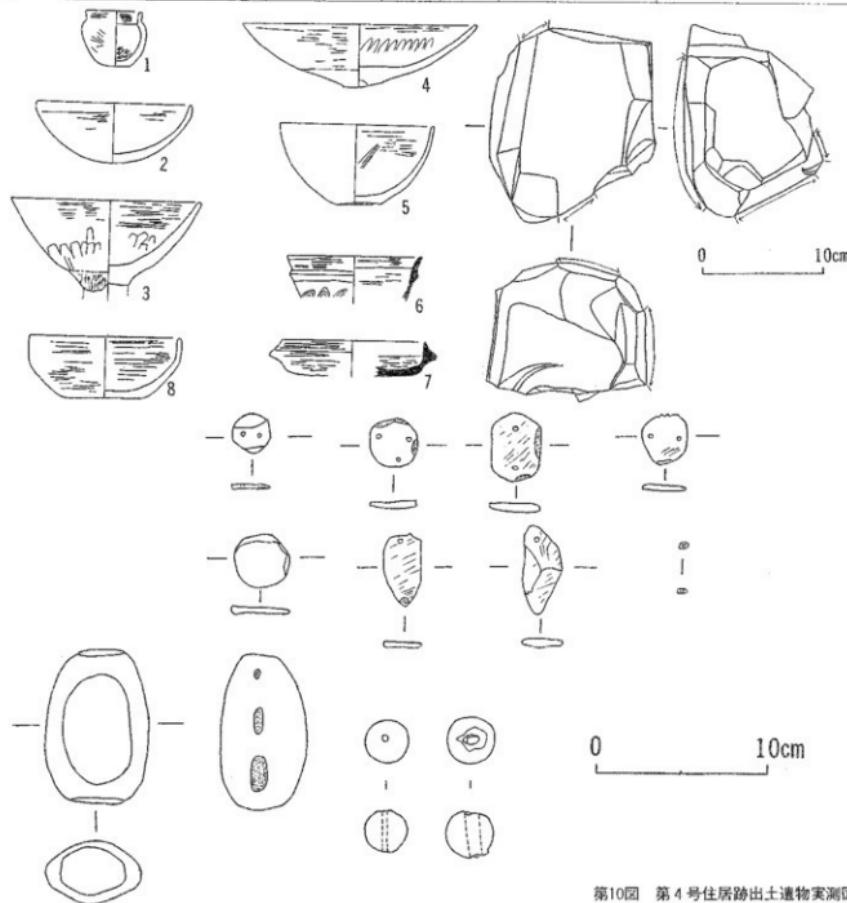
- 1 黒褐色 (ローム粒子を少量含み、しまりは普通。)
 2 端褐色 (ローム粒子を少量含み、しまりは普通。)
 3 暗褐色 (ローム粒子を少量含み、しまりは良い。)
 4 暗褐色 (ローム粒・燒土粒子を若干含み、しまりは普通。)
 5 明褐色 (ローム粒子を多く含み、しまりは普通。)
 6 黑褐色 (焼土粒子を少量含み、しまりは普通。)
 7 黑褐色 (ローム小ブロック・ローム粒を若干含み、しまりは普通。)
 8 暗褐色 (ローム粒・黒色粒子を若干含み、しまりは普通。)
 9 暗褐色 (ローム粒子を若干含み、黒色粒子も少量含む。しまりは普通。)
 10 暗褐色 (ローム粒・黒色粒子・魔沼土小粒を少量含む。しまりはやや柔らかい。)
 11 黑褐色 (ローム粒子を若干含み、しまりは普通。)
 12 明褐色 (ローム粒子を多く含み、しまりは普通。)
 13 黃褐色 (ローム粒の中に黒色粒子を若干含む。しまりは普通。)
 14 黑褐色 (ローム粒子を若干含み、しまりは普通。)
 15 黑褐色 (ローム粒子を若干含み、しまりはやや柔らかい。)
 16 暗褐色 (ローム粒を少含み、しまりはやや柔らかい。)
 17 明褐色 (ローム粒を多く含み、黒色粒を少量含む。しまりは普通。)
 18 黑褐色 (ローム小ブロックを若干含み、ローム粒も少含む。しまりは普通。)
 19 黑褐色 (ローム粒子を若干含み、しまりは普通。)

第9図 第4号住居跡実測図

第4号 住居出土品目録

番号	品種 法量 (cm)	器形・成形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考	
1	土 小 型 量	器高 (4.6) 口径 (4.7) 底径 (2.0)	丸底。体部は内側として立ち上がり、口縁部は外傾して開く。体内部・外面へラ削り。	暗褐色	砂 粒	普通	ミニチ ア 南東竪穴内 覆土中層
2	土 环	器高 (4.9) 口径 (12.9)	丸底。体部は内側気味に立ち上がる。体内部・外面へラ削り。	褐色	砂 粒	普通	覆土
3	土 高 輪 环	口径 (15.9)	环部破片。环部は内側気味に立ち上がる。环部内・外面へラ削り。	暗褐色	砂 粒	普通	北コナー付近 床面
4	土 高 环	口径 (19.5)	环部破片。环部はゆるやかに開く。环部内・外面へラ削り。	赤褐色	砂 粒	良好	北東壁付近 床面
5	土 脚 鉢	器高 (6.6) 口径 (12.8) 底径 (3.7)	平底。体部は内側気味に立ち上がる。体部外面へラ削り。	赤褐色	砂 粒	普通	北コナー付近 覆土下層
6	須 口 辺 部	口径 (11.2)	口辺部片。口辺部は外傾して立ち上がり、中位に破片を持つ。口辺部内・外面削りなし。	灰色	砂 粒	良好	覆土
7	須 脚 鉢	器高 (2.9) 口径 (11.7)	底部から口縁部にかけての破片。底部は内側して立ち上がり、表面は水平に伸びて端部は尖る。底部外面へラ削り、内面ナナフ。	灰白色	砂 粒	普通	覆土
8	土 脚 鉢	器高 (5.6) 口径 (12.5) 底径 (5.6)	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内・外面ハケ。体部内・外面へラ削り。	淡褐色	砂 粒	普通	体部内側の底部 一帯にベニガラ 付着中央部床面

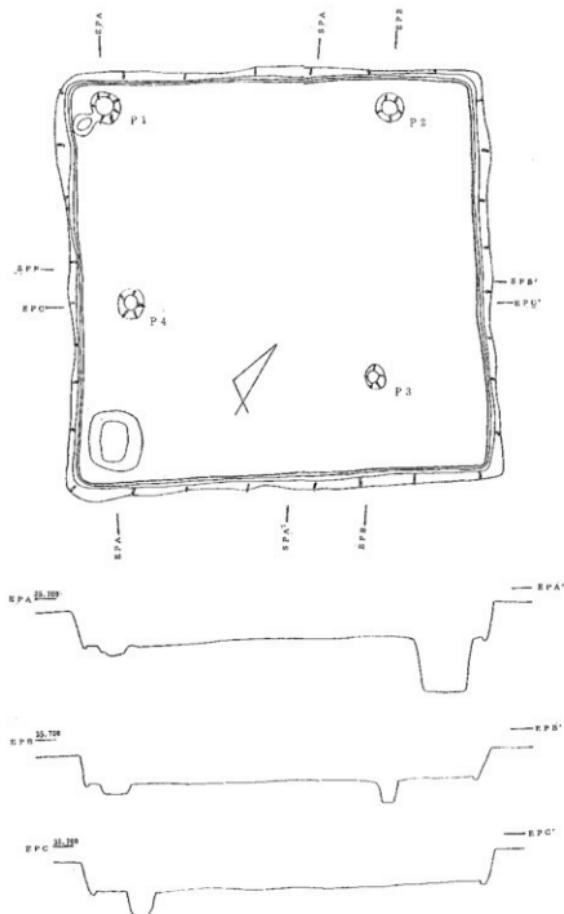
番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
9	有孔円板	2.9	2.3	0.3	3.0	3.0	100	西口付近覆土中層	滑石
10	有孔円板	2.8	2.8	0.4	2.0	6.0	100	南西部覆土下層	"
11	有孔円板	3.9	2.9	0.5	2.0	12.0	100	中央部覆土下層	"
12	有孔円板	2.9	2.6	0.4	1.5	4.0	100	覆土	"
13	円板	3.1	3.4	0.4	---	7.0	100	南西部床着	"
14	劍形品	4.3	2.3	0.3	2.0	6.0	100	北東部覆土下層	"
15	劍形品	5.1	2.3	0.5	2.5	9.0	100	南東部覆土下層	"
16	臼玉	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	中央部床着	"
17	すり石	9.0	5.8	3.8	---	406.0	100	南東壁際床着	
18	砥石	16.1	13.9	11.5	---	3000.0	100	南東貯藏穴内覆土中層	砂岩 3面使用
19	土玉	2.4	2.5	---	0.4	13.8	100	中央部覆土下層	
20	土玉	2.7	2.8	---	0.8	14.0	100	中央部床着	

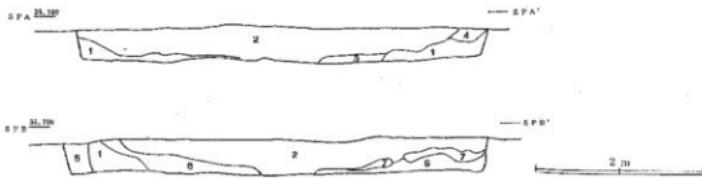


第10図 第4号住居跡出土遺物実測図

(5) 第5号住居跡 (第11・12図)

形態 ほぼ正方形を呈する。主軸方位 N-34°-W。規模 中軸線上東西5.00m。南北5.00mを測る。柱穴 P1～4の4本が相当するが、P4はかなりP1に寄っており、変則な配列である。P1 東西径0.37m、南北径0.36m、深さ0.12m、P2 東西径0.36m、南北径0.42m、深さ0.12m、P3 東西径0.28m、南北径0.26m、深さ0.25m、P4 東西径0.33m、南北径0.38m、深さ0.65mを計測。壁溝 全周しておらず、幅0.08m、深さ0.06m程度を測る。床面 全体的にしっかりと貼り床であるが、貯藏穴の北側がとくに堅い。貯藏穴 東南部コーナーに位置し、東西径0.75m、南北0.75m、深さ0.65mを計測し、隅丸形状をなしている。遺物 土器類 小型壺・壇・壺・高环・甕、滑石製品 有孔円板・劍形品などが検出されている。





土層凡例

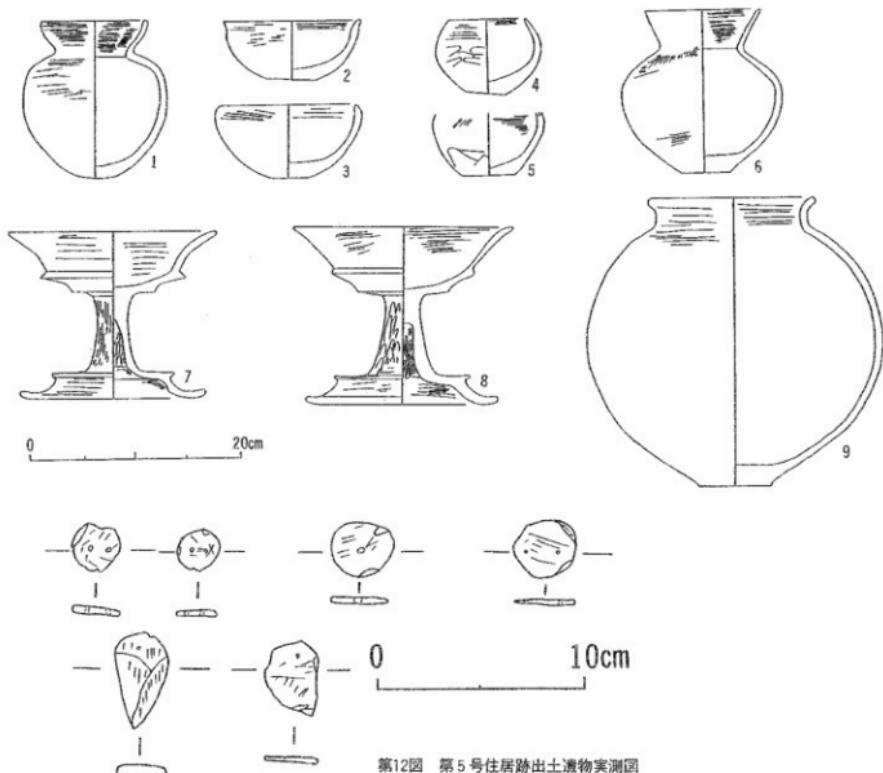
- 1暗褐色(黒色小ブロック・ローム粒を若干含み、ローム粒子も多く含む。しまりは普通。)
 2黒褐色(ローム小ブロック・ローム粒・ローム粒子を若干含む。しまりは普通。)
 3暗褐色(ローム粒・ローム粒子を若干含む。しまりは普通。)
 4明褐色(ローム粒を若干含み、ローム粒子を少量含む。しまりは普通。)
 5暗褐色(ローム小ブロック・黒色小ブロックを若干含み、ローム粒子も少量含む。しまりは普通。)
 6黒褐色(ローム粒を少量含み、しまりは普通。)
 7黄褐色(ローム小ブロックを非常に多く含み、黒色小ブロックも少部分含む。しまりは良い。)
 8暗褐色(ローム粒・焼土粒・黒色粒を若干含み、黒色粒子を多く含む。しまりは普通。)

第11図 第5号住居跡実測図

第5号住居跡出土遺物観察表

番号	品種	法量 (cm)	器形・成形等の特徴	色調	胎土	燒成	備考
1	土器	口径 10.0	底部及び口縁部の一部欠損。底部は内側して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。脚部の最大径は肩部にある。口縁部内・外面横ナデ。脚部外面ヘラ削り	赤褐色	砂粒	良好	(二次燒成) 北西壁裏床面
2	土器	器高 7.0 口径 13.0 底径 2.5	口縁部の一部欠損。平底。底部は内側して立ち上がり、上位でややくびれる。口縁部上の場所に縫合を示す。口縁部は外側に外傾する。口縁部内・外面横ナデ。底部外面ヘラ削り	灰褐色	砂質	普通	南コーナー付近
3	土器	器高 7.0 口径 13.1 底径 3.7	平底。底部は内側して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。口縁部内・外面横ナデ。体部内・外側ヘラ削り。	赤褐色	砂粒	普通	北コーナー付近 壁下層
4	土器	器高 6.9 口径 7.4 底径 3.6	平底。底部は内側して立ち上がり、口縁部に至る。体部内・外側ヘラ削り。	黄褐色	砂質	良好	北コーナー付近 壁下層
5	土器	底径 4.9	口縫部欠損。平底。底部はゆるく内側して立ち上がる。底部内面ヘラ削り・外側ヘラ削り。	暗褐色	砂粒	普通	北西部表土下層
6	小型壺	器高 15.0 口径 11.0 底径 4.7	体部は内側して立ち上がり、脚部は「く」の字状に屈曲する。口縫部はわざかに外皮する。口縫部内・外面横ナデ。脚部外面ヘラ削り。	明褐色	砂粒	良好	(二次燒成) 南東部表土
7	土器	器高 15.8 口径 20.0 底径 17.8	脚部はやや斜めに下がり、つけ根で段を整える。その下部が腹部となりて開き、口縫部は内側しながら立ち上がり、口縫部は外側へと張り出している。全体的にヘラ削りである。	褐色	砂粒	良好	西コーナー付近 床面
8	土器	器高 16.8 口径 21.1 底径 18.4	环部口縫部の一部欠損。脚部はやや斜めに下がり、つけ根で段を整える。脚部が腹部となつて開く。環部は内側しながら立ち上がり、口縫部は内側へと張り出している。全体的にヘラ削り。	赤褐色	砂粒	良好	西コーナー付近 床面
9	土器	器高 26.9 口径 16.5 底径 7.1	平底。脚部は球形状を呈し、内側して立ち上がり、口縫部ははばほけて口縫部を外皮する。頂部最も尖る辺は中位にあらざる。口縫部内・外側横ナデ。脚部外面ヘラ削り。	暗褐色	砂質	普通	(二次燒成) 南東部裏床面に僅存着

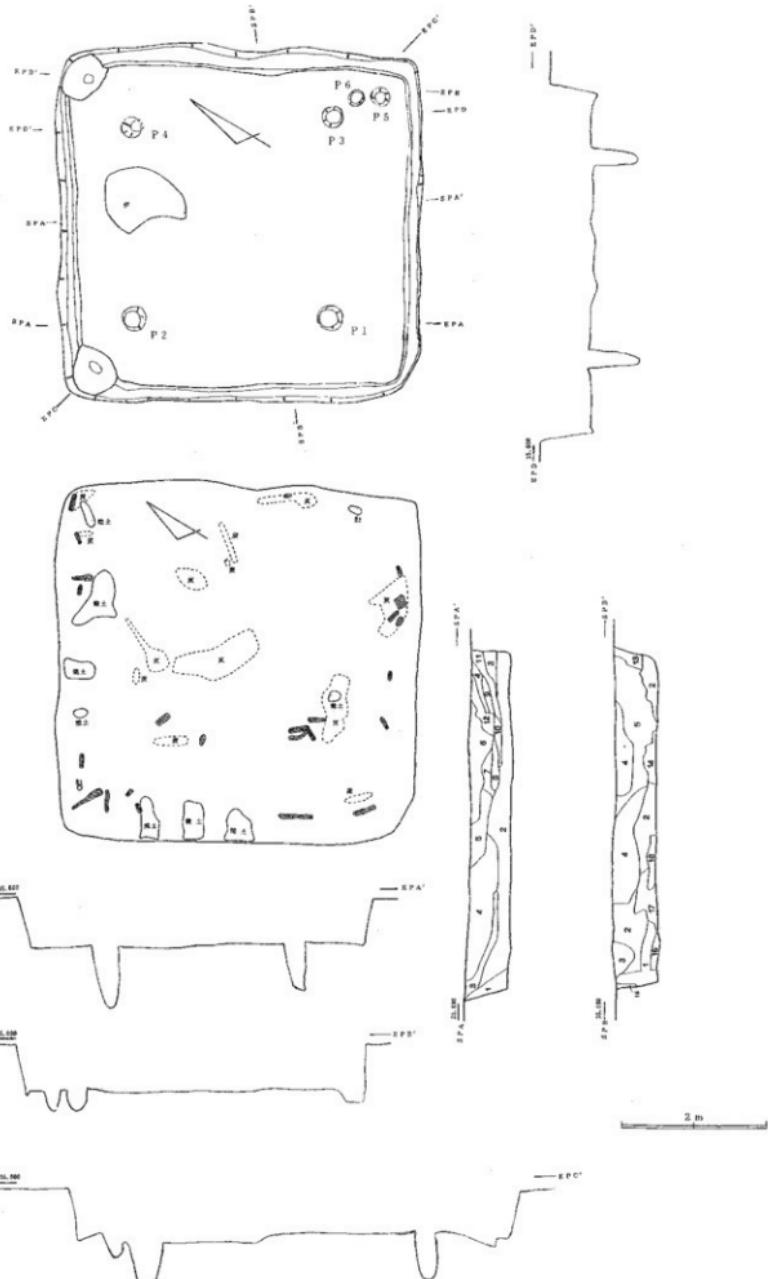
番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
10	有孔円板	2.3	2.4	0.4	2.0	2.0	100	南2-付近覆土下層	滑石
11	有孔円板	1.9	2.1	0.3	2.0	1.5	100	南西部覆土	"
12	有孔円板	2.7	2.8	0.4	2.0	5.5	100	北東部覆土下層	"
13	有孔円板	3.0	2.9	0.3	1.5	2.5	100	北西部覆土下層	"
14	劍形品	4.2	2.1	0.6	2.5	8.0	100	南西部覆土	"
15	劍形品	3.6	2.5	0.3	2.5	4.0	100	中央部覆土	"



第12図 第5号住居跡出土遺物実測図

(6) 第6号住居跡 (第13・14図)

形態 ほは正方形を呈する。主軸方位 N-33°-W。規模 中軸線上東西4.90m、南北4.95m。柱穴 対角線上の4本(P1~4)が主柱で、他に南東部コーナーに近く2本の柱穴(P5~6)が掘られているが、主柱よりも小規模である。P1東西径0.34m、南北径0.36m、深さ0.80m、P2東西径0.34m、南北径0.35m、深さ0.62m、P3東西径0.32m、南北径0.32m、深さ0.70m、P4東西径0.29m、南北径0.27m、深さ0.65m、P5東西径0.25m、南北径0.27m、深さ0.24m、P6東西径0.25m、南北径0.23m、深さ0.26mを測る。壁溝 全周しており、幅0.10m、深さ0.05m程度で比較的浅い。床面 全体的に堅くしまる貼り床。中央部から北壁に寄って梢円形状に焼土の堆積が観察され、床のほば全面に炭及び灰化材が認められる。貯蔵穴 無し。遺物 土師器 壺・壺・壇・小型鉢・滑石製品 有孔円板・剣形品、石製品 砕石、土製品 土玉、鉄製品 刀子などが検出されている。その他 今回調査した住居跡のうち、床面までの掘り込み平均値が0.70mと最も深い遺構である。



土器凡例

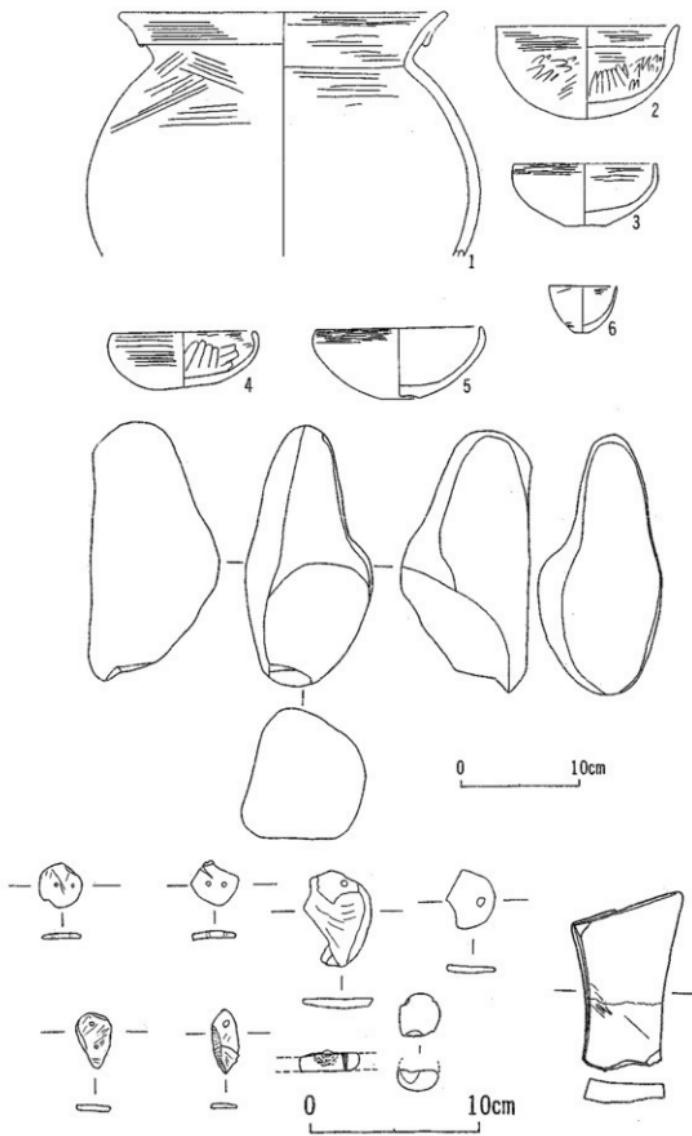
- 1 黒褐色 (ローム粒・焼土粒を若干含み、炭粒・ローム粒・焼土粒子も少量含む。しまりはやや柔らかい。)
 2 暗褐色 (ローム粒・炭粒を少量、ローム粒子を多く含み、焼土粒子も若干含む。しまりは普通。)
 3 黒褐色 (ローム粒をやや多く含み、しまりは普通。)
 4 明褐色 (ローム小ブロックを少量、ローム粒・ローム粒子を多く含み、炭小ブロック・炭粒・焼土粒も若干含む。しまりは普通。)
 5 黒褐色 (ローム中ブロック・焼土粒・炭小ブロックを若干、ローム粒・ローム粒子を少量含む。しまりは良い。)
 6 黄褐色 (ローム中ブロックを多く、ローム粒とローム粒子を少許含み、炭粒子を若干含む。しまりは良い。)
 7 褐褐色 (ローム小ブロック・炭粒を若干、ローム粒・ローム粒子を少量含む。しまりは普通。)
 8 暗褐色 (ローム粒・焼土粒・炭粒を少量含む。しまりは普通。)
 9 黑褐色 (ローム粒・ローム粒子を若干含む。しまりは普通。)
 10 黑褐色 (ローム粒・ローム粒子を若干含み、ローム粒子を少量含む。しまりは普通。)
 11 黑褐色 (ローム粒・ローム粒子を少量含む。しまりは普通。)
 12 暗褐色 (ローム小ブロック・焼土粒・炭粒を若干、ローム粒子を少量含む。しまりは良い。)
 13 暗褐色 (ローム粒子を若干、ローム粒を少量含む。しまりは普通。)
 14 暗褐色 (黒色中ブロック・ローム粒を若干、ローム粒子を多く含む。しまりは良い。)
 15 黑褐色 (ローム粒子を多く、黒色粒を少量含む。しまりは良い。)
 16 暗褐色 (ローム小ブロック・ローム粒子を少量含む。しまりは普通。)
 17 黑褐色 (ローム粒子を若干含み、炭中小ブロックを多く含む。しまりは普通。)
 18 黑褐色 (ローム粒子を少量含み、しまりは普通。)

第13図 第6号住居跡実測図

第6号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形・成形形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土瓶	口径 27.0	複合口縁で脚部下平欠損。口縁部は外反し、内・外面横ナデ。腹部内面はヘラナデ。唇形はおむね球形を呈する。	黒褐色 灰青	砂粒 云母	普通	脚部中央の外面に焼付着、北ヨーナー付近床面
2	土鍋	器高 7.5 口径 15.2	丸底。体部は内縫気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。口縁部内・外面は横ナデ。体部内・外面は植字ナデ。内・外面とも赤茶。	赤褐色	砂粒	良好	覆土
3	土鍋	器高 5.0 口径 (12.0) 底径	上げ底。底部から口縁部にかけての破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。口縁部内・外面横ナデ。体部外表面及び底部ヘラナデ。	褐色	砂粒	普通	中央部覆土下冠
4	土瓶	器高 4.5 口径 11.9	平底。脚部及び口縁部の一添欠損。体部は内側して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。内・外面とも横ナデ。赤茶。	赤褐色	砂粒	普通	覆土
5	土瓶	器高 5.8 口径 14.0 底径 3.2	上げ底。体部は内側して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。口縁部内・外面横ナデ。底部ヘラ削り。	暗褐色 黄色	砂粒	普通	北ヨーナー付近床面
6	土瓶 小型鉢	器高 3.8 口径 (4.7) 底径 1.2	平底。脚部から口縁部にかけて 1 分の 3 次欠損。体部は内側して立ち上がり、内・外面とも難なナデ。	灰褐色	砂粒	普通	覆土

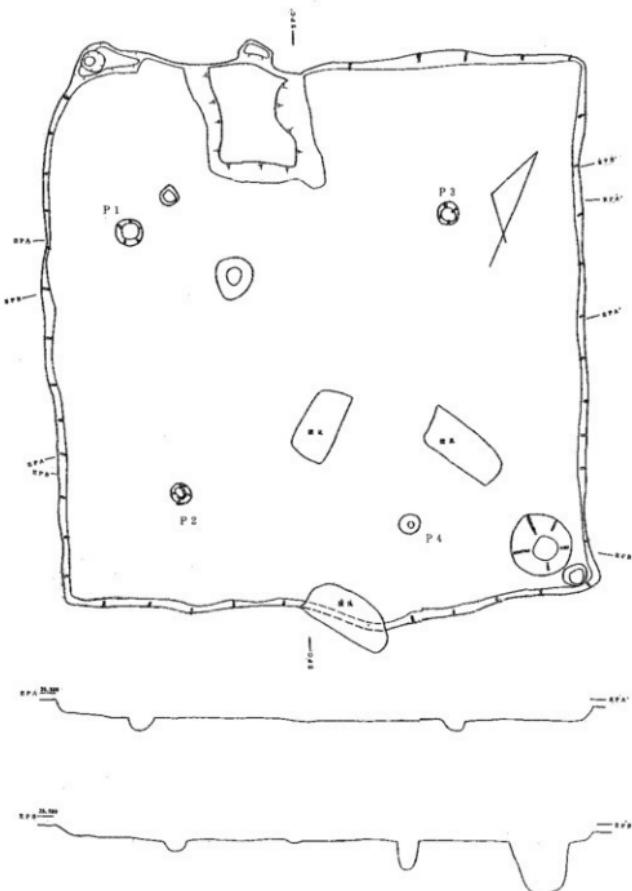
番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
7	有孔円板	2.6	2.4	0.3	2.0	4.0	100	南東部復土上層	滑石
8	有孔円板	2.5	2.3	0.4	2.0	6.0	100	北東部復土上層	〃
9	有孔円板	5.4	4.1	0.6	3.5	15.0	80	北東部復土中層	〃
10	有孔円板	3.5	3.0	0.4	3.5	3.0	60	〃	〃
11	劍形品	3.3	2.1	0.3	2.5	2.5	100	〃	〃
12	劍形品	3.8	1.5	0.4	2.0	1.5	95	南ヨーナー復土中層	〃
13	砾石	10.6	6.3	1.7	---	109.5	---	覆土	4面使用
14	砾石	21.8	10.6	10.8	---	2650.0	100	北西部復土上層	5面使用
15	土玉	2.5	2.5	---	---	3.5	40	南西部復土中層	〃
16	刀子	3.5	1.1	0.3	---	2.0	---	南東部復土中層	〃

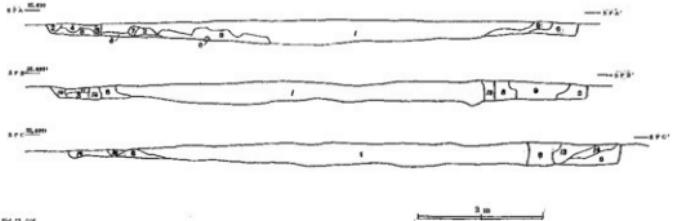


第14図 第6号住居跡出土遺物実測図

(7) 第7号住居跡 (第15・16図)

形態 ほぼ正方形を呈する。主軸方位 N-26°-W。規模 中軸線上東西8.36m、南北8.77mを測る。柱穴 対角線上に4本掘り込まれている。P1 東西径0.45m、南北径0.44m、深さ0.22m、P2 東西径0.34m、南北径0.38m、深さ0.16m、P3 東西径0.32m、南北径0.33m、深さ0.14m、P4 東西径0.32m、南北径0.33m、深さ0.49mを計測。壁溝 無し。床面 貼り床であるが、凹凸が著しく、概して柔らかい。北壁中央からやや西寄りで壁頂から床面にかけて傾斜状の幅1.75m、長さ2.00m程の堅い盛土が遺存する。おそらく出入口として機能した屋内施設と推定される。貯藏穴 東南部コーナーに位置し、ほぼ円形を呈する。東西径0.97m、南北径0.98m、深さ0.84mを測る。遺物 土師器 壊・高壺・壺・甕、滑石製品 有孔円板・白玉、石製品 すり石、土製品 土玉、鉄製品 鋏先などが検出されている。その他 今回調査した住居跡のなかで、平面積が最大規模 (73.92m²) の遺構である。





土層凡例

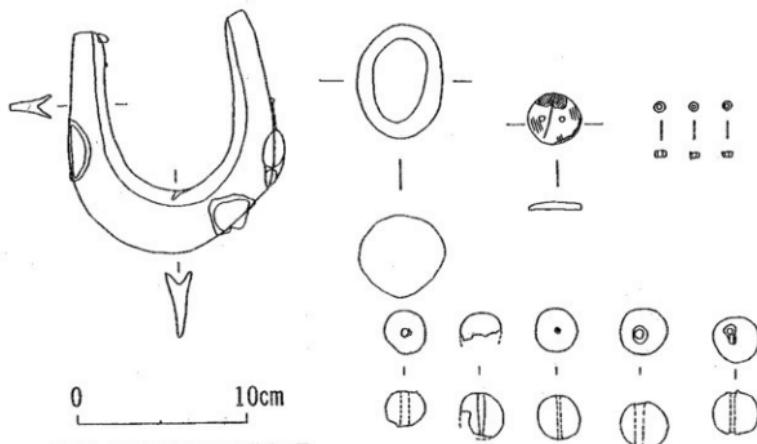
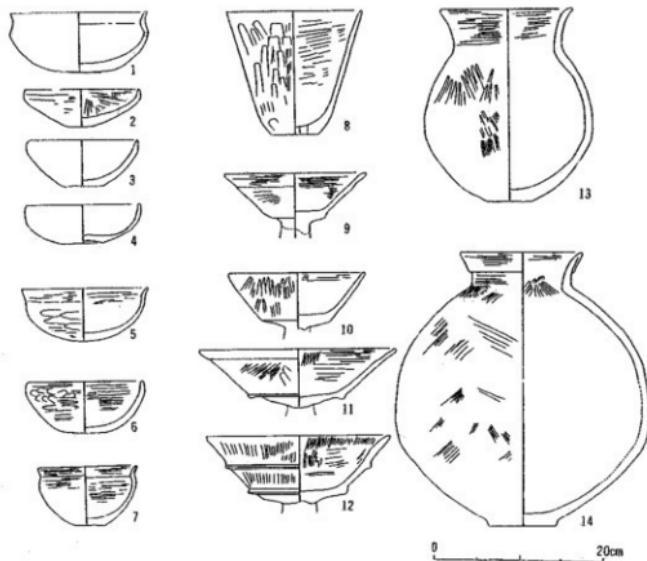
- 1 黒 色 (ローム粒子・ローム粒子・土粒・炭粒を若干含む。しまりは普通。)
- 2 黒褐色 (ローム粒子を若干含む。しまりは普通。)
- 3 明褐色 (ローム中ブロックを若干、ローム粒・黒色粒を少量含む。しまりは普通。)
- 4 暗褐色 (ローム粒・炭粒を少量含む。しまりは普通。)
- 5 黑 色 (ローム粒を若干含み、しまりは普通。)
- 6 明褐色 (ローム粒が多く、黒色粒を少量含む。しまりは良い。)
- 7 黄褐色 (黒色粒子・炭粒を若干含む。しまりはやや柔らかい。)
- 8 喷褐色 (燒土粒を若干、ローム粒・ローム粒子を少々含む。しまりは普通。)
- 9 暗 色 (黒色粒・ローム粒を多く含む。しまりはやや柔らかい。)
- 10 暗褐色 (焼土粒子を若干、ローム粒とローム粒子を少々含む。しまりは普通。)
- 11 黑褐色 (ローム粒子を少々含み、しまりは普通。)
- 12 黑褐色 (ローム粒を少量含み、しまりは普通。)
- 13 明褐色 (焼土粒・炭粒を若干、ローム粒を少々含む。しまりは普通。)
- 14 暗褐色 (ローム小ブロック・ローム粒子を少々含む。しまりは普通。)
- 15 暗褐色 (ローム粒・ローム粒子を少々含む。しまりは普通。)
- 16 暗褐色 (黒色粒・焼土粒を若干、ローム粒子を少々含む。しまりは普通。)

第15図 第7号住居跡実測図

第7号住居跡出土遺物観察表

器 号	器 種	法 量 (cm)	器 形・成 形 等 の 特 徴	色 調	胎 土	燒 成	備 考
1	土 席 盆	器高 口径 底径 7.0 11.5 16.0	丸底。休部から口縁部にかけての破片。体部は内壁して立ち上がり口縁部は外反する。口縁部内・外側面ナデ。	赤褐色	砂粒	普通	内・外面にぶぶ。休部上位に燒成前の穿孔あり。覆土
2	土 席 环	器高 口径 底径 4.4 (13.5) (2.5)	平底。口縁部の一部欠損。体部は内壁して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内・外側面ナデ。	黄褐色	砂粒	普通	東コーナー付近 壁際床面
3	土 席 环	器高 口径 底径 5.4 12.0 4.4	平底。口縁部の一部欠損。体部は内壁して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内・外側面ナデ。休部内面ナデ、外面へラ削り後、ナデ。	赤褐色	砂粒	普通	東コーナー付近 床面
4	土 席 环	器高 口径 底径 4.4 13.4 4.7	上げ底。休部は内壁して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。口縁部内・外側面ナデ。休部内面及び底部へラ削り。今本的に鉢雜な仕上げ。	黑褐色	砂粒	普通	東コーナー貯藏 穴内底部
5	土 席 环	器高 口径 底径 5.3 14.9 14.7	丸底。休部から口縁部にかけて一欠損部。休部は内壁して立ち上がり、口縁部は内ソギ状でやや内傾する。口縁部内・外側面ナデ。休部及び底部内・外側面へラ削き。	明褐色	砂粒	良好	覆土
6	上 頭 环	器高 口径 5.9 13.8	九底気味。休部は内壁気味に立ち上がり、口縁部はゆるやかに内傾する。休部及び底部へラ削り、口縁部内・外側面ナデ。	灰褐色	砂粒	普通	南東部床面
7	上 頭 環	器高 口径 底径 6.8 11.6 3.5	休部は内壁気味に立ち上がり、口縁部との境に凹部を持ち、内側には弱い棱を持つ。休部へラ削き。口縁部内・外側面ナデ。	黄褐色	砂粒	普通	南東部床面
8	土 頭 環	器高 口径 (14.5) (16.1)	胴部中央から口縁部の一部欠損。半底の底部に単孔を穿て複数枚を立てて立ち上がる。胴部外側面方向にナデ内面はへラ削り。	赤褐色	砂粒	普通	南東部床面
9	土 頭 環	口径 16.6	坏部破片。坏部外下面に棱を持ち、外傾して立ち上がる。坏部内・外側面へラ削き。	暗褐色	砂粒	普通	東コーナー付近 壁際床面
10	上 頭 环	口径 16.1	坏部破片。坏部外下面に棱を持ち、外傾して立ち上がる。坏部内・外側面へラ削き。	赤褐色	砂粒	普通	北西部床面
11	土 頭 环	口径 23.1	坏部破片。坏部外側に棱を持ち、外傾して開く。坏部内・外側面へラ削き。	黄褐色	砂粒	普通	東コーナー付近 床面
12	土 頭 环	口径 21.5	坏部破片。坏部外側の中段と下段にそれぞれ棱を持つ。坏部内・外側面へラ削き。ていねいなつくりである。	黄褐色	砂粒	良好	東コーナー付近 床面

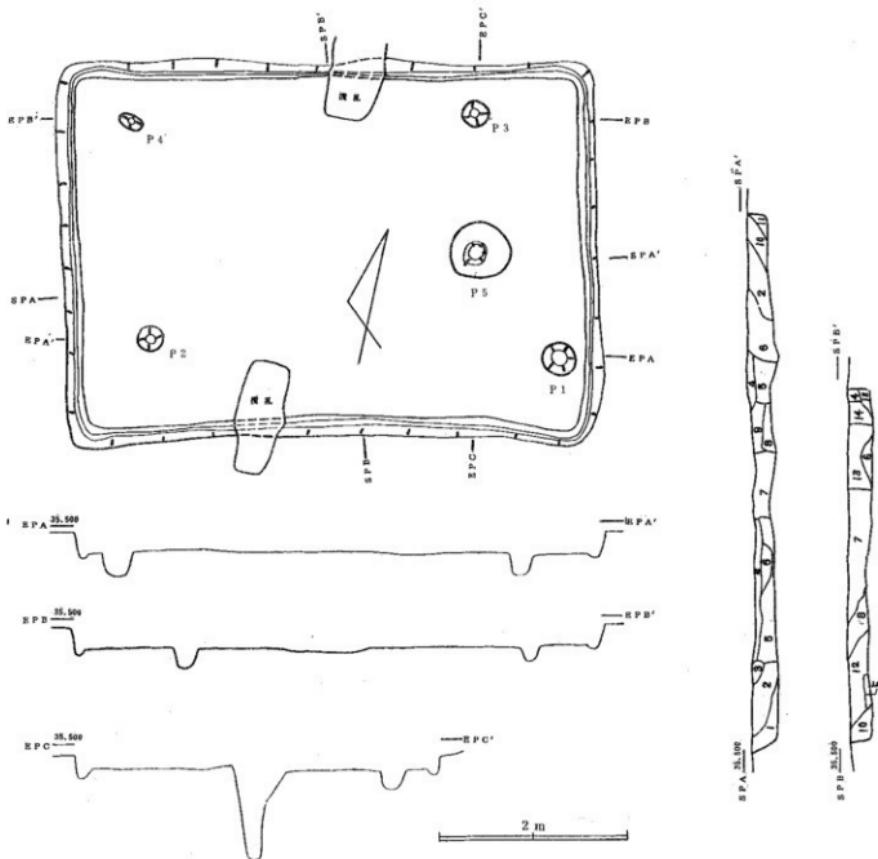
番号	器種	法量 (cm)	器形・成整形等の特徴	色調	釉土	焼成	備考	
13	土瓶	器高 口径 底径	22.6 15.6 5.0	平底。体部中位に最大径を持ち、頸部はゆるく外反する。 口縁部内・外面ハケ目調整。体部内・外面ヘラナデ。	暗褐色	砂粒	普通	体部外面に煤付着。 東コーナー壁際床面
14	土瓶	器高 口径 底径	32.0 14.4 8.0	平底。体部最大径を下位に持ち、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部内・外面ハケ目調整。体部内・外面ヘラナデ。	灰褐色	砂粒	良好	体部中位下に煤付着。 東コーナー壁際床面



第16図 第7号住居跡出土遺物実測図

(8) 第8号住居跡 (第17・18図)

形態 隣丸長方形状を呈する。主軸方位 N-106° -W (N-74° -E)。規模 中軸線上東西 5.55m、南北3.94mを測る。柱穴 対角線上に4本 (P1~4)と、P1の北西側にP5を確認している。P1 東西径0.37m、南北径0.32m、深さ0.25m、P2 東西径0.27m、南北径0.26m、深さ0.24m、P3 東西径0.29m、南北径0.24m、深さ0.22m、P4 東西径0.25m、南北径0.16m、深さ0.16m、P5 東西径0.55m、南北径0.60m、深さ1.00mを計測する。壁溝 全周しており、幅0.08m、深さ0.11程を測る。床面 全体的に堅くしまる貼り床。貯藏穴 無し。遺物 土師器 壺・塊・壺・甌・壺・堆・滑石製品 有孔円板・勾玉、石製品 砥石などが検出されている。



土層凡例

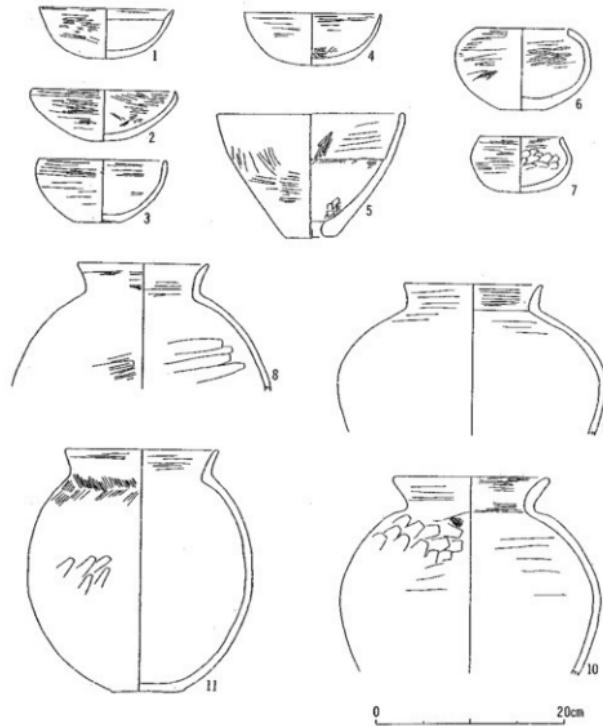
- 1 黄褐色 (ローム小ブロック・黒色小ブロックを少量含み、ローム粒とローム粒子を多く含む。しまりは普通。)
- 2 黒褐色 (黒色大中ブロックを若干、ローム小ブロック・黒色小ブロック・ローム粒子を少量含む。しまりは普通。)
- 3 暗褐色 (ローム粒・ローム粒子を少量含む。しまりは良い。)
- 4 明褐色 (焼土粒を若干、ローム粒・ローム粒子を少量含む。しまりは普通。)
- 5 明褐色 (ローム中ブロック・黒色小ブロックを若干、ローム小ブロック・ローム粒・ローム粒子を少量含む。しまりは普通。)
- 6 暗褐色 (ローム小ブロック・ローム粒を若干含む。しまりは普通。)
- 7 黑褐色 (ローム中ブロックを若干、ローム粒・ローム粒子を少々含む。しまりは普通。)
- 8 黄褐色 (ローム中ブロック・ローム粒を多く、ローム粒子を少量、黒色小ブロックを若干含む。しまりは良い。)
- 9 明褐色 (ローム小ブロック・焼土粒を若干、ローム粒・ローム粒子を少量含む。しまりは良い。)
- 10 黑 色 (ローム中大ブロックを若干含む。しまりは普通。)
- 11 暗褐色 (ローム粒とローム粒子を少量含む。しまりは普通。)
- 12 密褐色 (焼土粒を若干、ローム粒・ローム粒子を少量含む。しまりは普通。)
- 13 黄褐色 (焼土粒を若干、ローム中小ブロック・ローム粒を多く含む。しまりは普通。)
- 14 明褐色 (焼土粒を若干、ローム中大ブロック・ローム粒を少量含む。しまりは普通。)
- 15 密褐色 (焼土粒を若干、ローム粒を少量含む。しまりは普通。)

第17図 第8号住居跡実測図

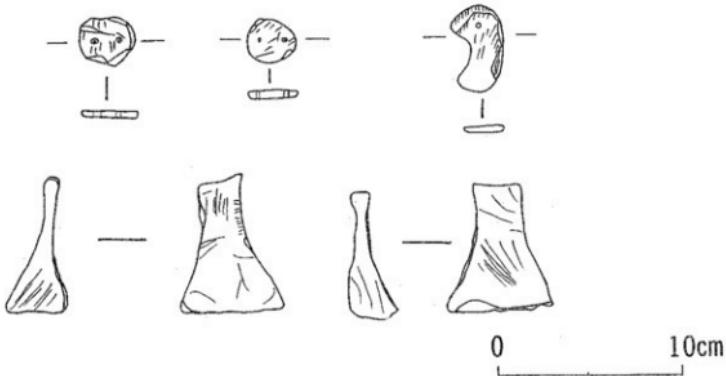
第8号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形・成形形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考	
							砂粒	良
1	土師壺	器高 5.5 口径 14.5	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は内ソギ状で外側する。口縁部内・外面及び体部内・外側とも横テナ。	黄褐色	砂粒	良	好	北西コーナー付近床面
2	土師壺	器高 5.4 口径 15.1 底径 3.2	上げ底気味。体部は内側して立ち上がり、口縁部は外ソギ状ではほぼ直立する。内・外面及び体部内・外側とも横テナ。	赤褐色	砂粒 雲母	良	好	北部床面
3	土師壺	器高 7.0 口径 13.8	上げ底。器体の2分の1程欠裂。体部は内側して立ち上がり、口縁部にいたる。口縁部内・外面横テナ。体部外側面へラナ。底部はヘラ削り。	暗褐色	砂粒	普通		
4	土師壺	器高 5.9 口径 14.9	丸底。口縁部一部欠損。体部は内側して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口縁部内・外面横テナ。体部外側面へラナ。	暗褐色	砂粒	普通		南西コーナー付近屢下層
5	土師壺	器高 13.7 口径 20.2 底径 5.3	平底。底部中央に单孔を穿つ。器形は深盤状に開き端面にいたる。内・外側ともヘラ削り。茹じてつくりは粗雑である。	黄褐色	砂粒	普通		北部床面
6	土師壺	器高 4.9	口縁部欠損。上げ底気味。体部は内側して立ち上がる。内・外側ともナデ。	黄褐色	砂粒	普通		体部外側煤付若北端床面
7	土師壺	器高 6.1 口径 9.0	丸底。口縁部外側。体部は内側して立ち上がる。体部内・外面ヘラ削り後、ナデ。	赤褐色	砂粒	普通		中央部床面
8	土師壺	口径 14.3	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内側して立ち上がり、口縁部はある。口縁部にゆがみがあり、内・外側ハケ目。胴部内・外面ナデ。	黄褐色	砂粒 雲母	普通		(二次焼成) 西部床面
9	土師壺	口径 14.9	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内側して立ち上がり、口縁部はある。口縁部にゆがみがあり、内・外側ハケ目。胴部内・外面ナデ。	暗褐色	砂粒 雲母	普通		北部床面
10	土師壺	口径 16.4	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内側して立ち上がり、口縁部はある。口縁部にゆがみがあり、内・外側ハケ目。胴部内・外面ナデ。	黄褐色	砂粒	普通		北面コーナー付近床面
11	土師壺	器高 26.3 口径 16.4 底径 7.9	平底。胴部の脛みはやや弱く、口縁部は外反する。体部及び底部、口縁部内・外面はハケ目調整。体部外側面下部はナデ。	暗褐色	砂粒 雲母	普通		体部外側煤付若北端床面

番号	品種	法量 (cm)	孔 徑 (mm)			重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
			最大長	最大幅	最大厚				
12	有孔円板	3.1	2.6	0.4	3.0	6.0	100	南部置下層	磨石
13	有孔円板	2.4	2.7	0.5	1.5	6.5	100	中央部置土中層	×
14	勾玉	4.7	2.8	0.4	2.0	8.0	100	南部置土中層	×
15	砥石	7.1	6.1	3.4	---	106.0	---	西部床岩	4面使用



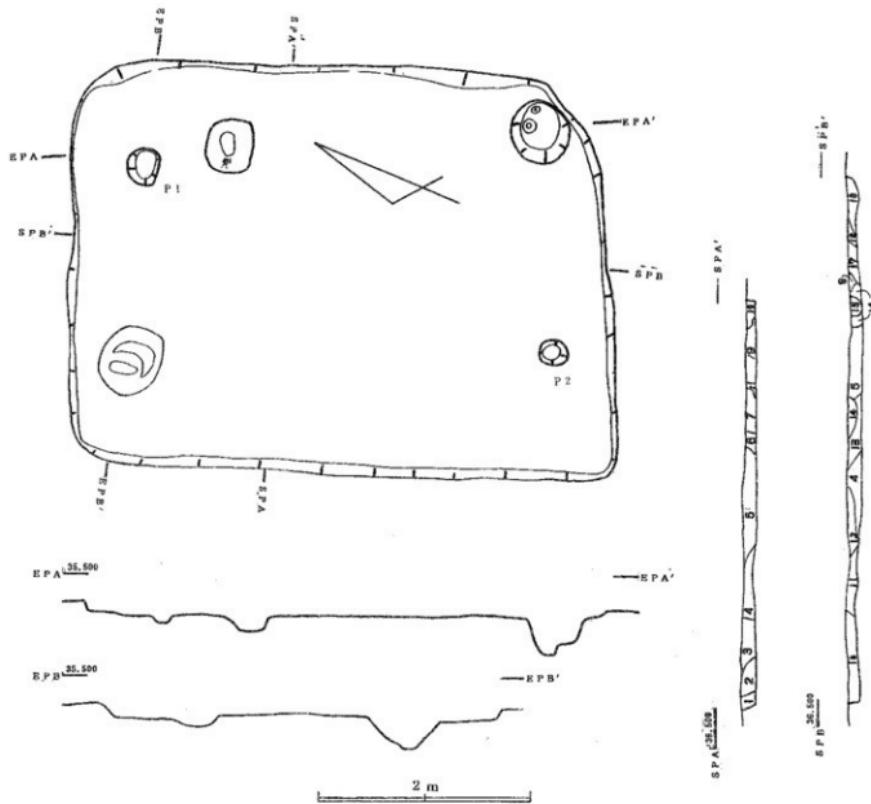
0 20cm



第18図 第8号住居跡出土遺物実測図

(9) 第9号住居跡 (第19・20図)

形態 やや隅丸長方形形状を呈している。主軸方位 N-23°-W。規模 中軸線上東西3.96m、南北5.22mを測る。柱穴 P1とP2の2本を確認しているが、P2については、輪郭を捉えていても深さが不明瞭である。P1東西径0.30m、南北径0.35m、深さ0.07m、P2東西径0.27m、南北径0.29mを測る。壁溝無し。床面 しっかりした貼り床であるが、凹凸が著しい。中央部の東北側に東西径0.52m、南北径0.39m、深さ0.17mを測る炉跡が確認されており、その周辺は堅く焼けている。貯蔵穴2か所に所在する。東南部コーナーに位置する貯蔵穴は楕円形状を呈し、長軸0.60m、短軸0.45m、深さ0.36mを測り、西南部コーナーの東側に位置するのはほぼ円形を呈し、東西径0.57m、南北0.55m、深さ0.10mを測る。遺物 土器器 壊・高壺・壺・小型壺・甕などが検出されている。



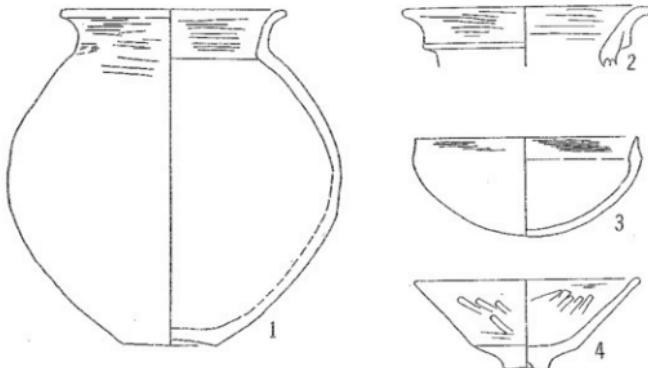
土器凡例

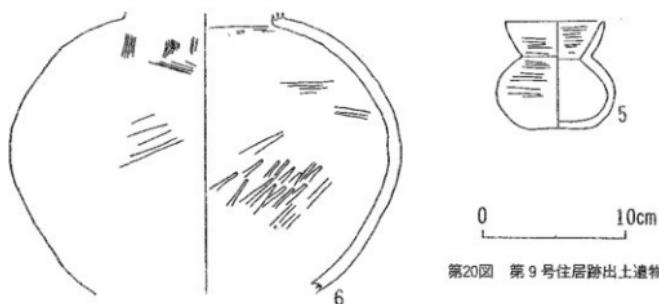
- 1 晴褐色 (ローム粒子をやや多く含む。しまりは普通。)
- 2 墓褐色 (黒色粒を若干、ローム粒とローム粒子を少量含む。しまりは普通。)
- 3 黒褐色 (ローム小ブロック・ローム粒・炭粒を若干含み、ローム粒子を少量含む。しまりは普通。)
- 4 蜜褐色 (ローム粒・炭小ブロックを若干含み、ローム粒子を少量含む。しまりは普通。)
- 5 黑褐色 (ローム小ブロック・燒土粒を若干、ローム粒とローム粒子を少々含む。炭粒も多少含む。しまりは普通。)
- 6 黑褐色 (炭小ブロック・焼土粒・ローム粒・燒土粒子を若干含む。しまりは普通。)
- 7 黑褐色 (炭粒・ローム粒子・燒土粒子を若干含む。しまりは普通。)
- 8 黑褐色 (燒土小ブロック・ローム粒子・燒土粒子を若干含む。しまりはやや良い。)
- 9 黑褐色 (ローム中ブロックを若干含み、ローム粒子も少々含む。しまりは普通。)
- 10 明褐色 (ローム中ブロックを多く含み、黒色粒も若干含む。しまりは普通。)
- 11 晴褐色 (ローム粒・燒土粒・黑色粒を若干含み、ローム粒子も少々含む。しまりは普通。)
- 12 墓褐色 (炭粒を若干含み、ローム粒・ローム粒子も少々含む。しまりは普通。)
- 13 明褐色 (ローム粒を若干、ローム粒子を少々含む。しまりは普通。)
- 14 明褐色 (ローム粒・ローム粒子を多く含む。しまりは普通。)
- 15 墓褐色 (ローム粒子を若干、焼土粒を少々含む。しまりは普通。)
- 16 明褐色 (ローム粒子を多く含み、燒土中ブロック・燒土粒子も若干含む。しまりは普通。)
- 17 黑褐色 (炭小ブロック・炭粒を若干、ローム粒子・燒土粒子も少々含む。しまりは普通。)
- 18 黄褐色 (ローム粒・ローム粒子を少々含む。しまりは良い。)
- 19 黄褐色 (ローム粒子の中に燒土粒・黑褐色が若干含む。しまりは普通。)

第19図 第9号住居跡実測図

第9号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法寸 (cm)	器形・成形形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	上部 甕	高さ 23.4 口径 16.0 底径 6.5	平底。器形は球形状を呈し、体部中位に最大幅を持つ。 体部外側から口縁部の内面にかけてハケ目調節。体部内面はヘラナデ。	灰褐色	砂 粒	普 通	北西コーナー貯 藏穴内覆土中層
2	土 甕	口径 17.0	複合口縁で、口縁下部の体部は欠損。42縫は外反し、下位に突起状の縫を持つ。全体的に無難なつくりである。	暗褐色	砂 粒 云母	粗 粒	口縫部外而全体 に粗付着 中央部底面
3	下部 甕	高さ 6.9 口径 15.0	丸底。体部は内壁気味に立ち上がり、口縁部は外上方に開く。体部はヘラ削り。口縫部内・外面研削ナデ。	暗褐色	砂 粒	普 通	中央部覆土下層
4	上部 甕	口径 15.8	脚部欠損。断部はゆるやかに開き、内・外面はヘラ磨き。	黄褐色	砂 粒	普 通	炉内底部
5	上部 小形甕	高さ 7.6 口径 7.0	平底。器形は球形に近く、口縁部は外側して立ち上がる。 体部及び口縁部の内・外面は、ともに磨きに近いでいる。 ないナデ。	赤褐色	砂 粒	良 好	体部中位に煤付 着。中央部底面
6	下部 甕	脚部大径 (27.9)	脚部の破片。底部はかなり丸みを持つことから、器形は 球形に近い形態が考えられる。内・外面とも横ナデ。	暗褐色	砂 粒	普 通	南東コーナー付 近底面

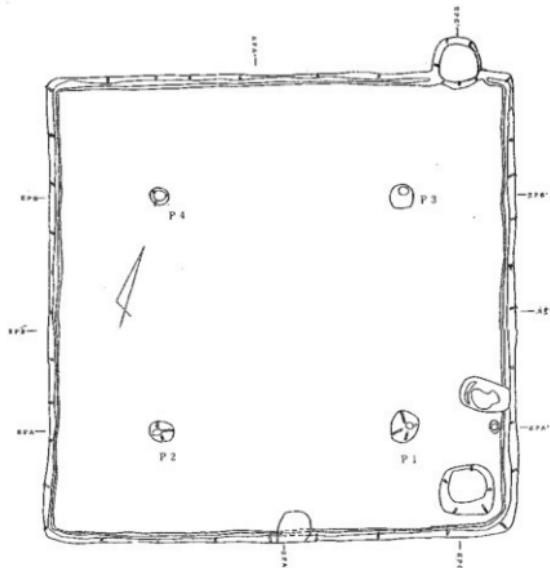


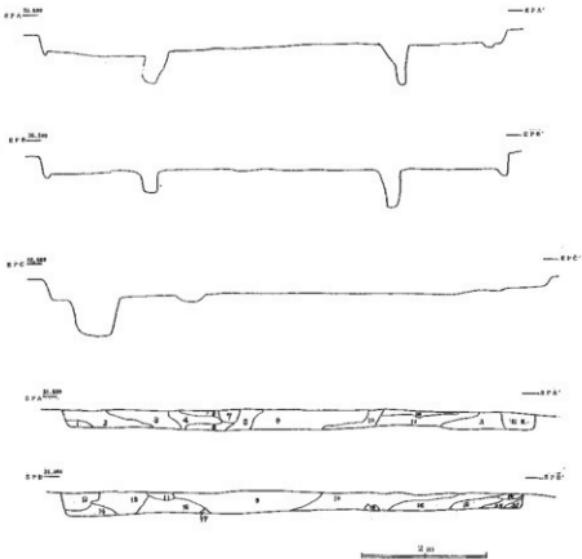


第20図 第9号住居跡出土遺物実測図

(10) 第10号住居跡 (第21・22図)

形 築 ほぼ正方形をなしている。主軸方位 N-20° - W。規 模 中輪線上東西7.55m、南北7.52mを測る。柱 穴 対角線上の4本(P1～4)は、主柱として適正な配置といえる。P1東西径0.43m、南北径0.53m、深さ0.50m、P2東西径0.38m、南北径0.34m、深さ0.66m、P3東西径0.40m、南北径0.38m、深さ0.36m、P4東西径0.30m、南北径0.26mを測る。壁 溝 全周してあり、幅0.15m、深さ0.07m程度を測る。床 面 全体的にしっかりした貼り床である。貯蔵穴北側に長軸0.80m、短い軸0.52m、深さ0.52m程の切り込み状の遺構が位置するが、性格などは不明。貯蔵穴 東南部コーナーに位置し、東西径0.91m、南北径0.85m、深さ0.63mを計測する。遺 物 土師器 壌・高壠・壺、須恵器 破片、滑石製品 白玉(35点)、有孔円板・剣形品、石製品 低石、鉄製品 刀子などが検出されている。





土壤凡例

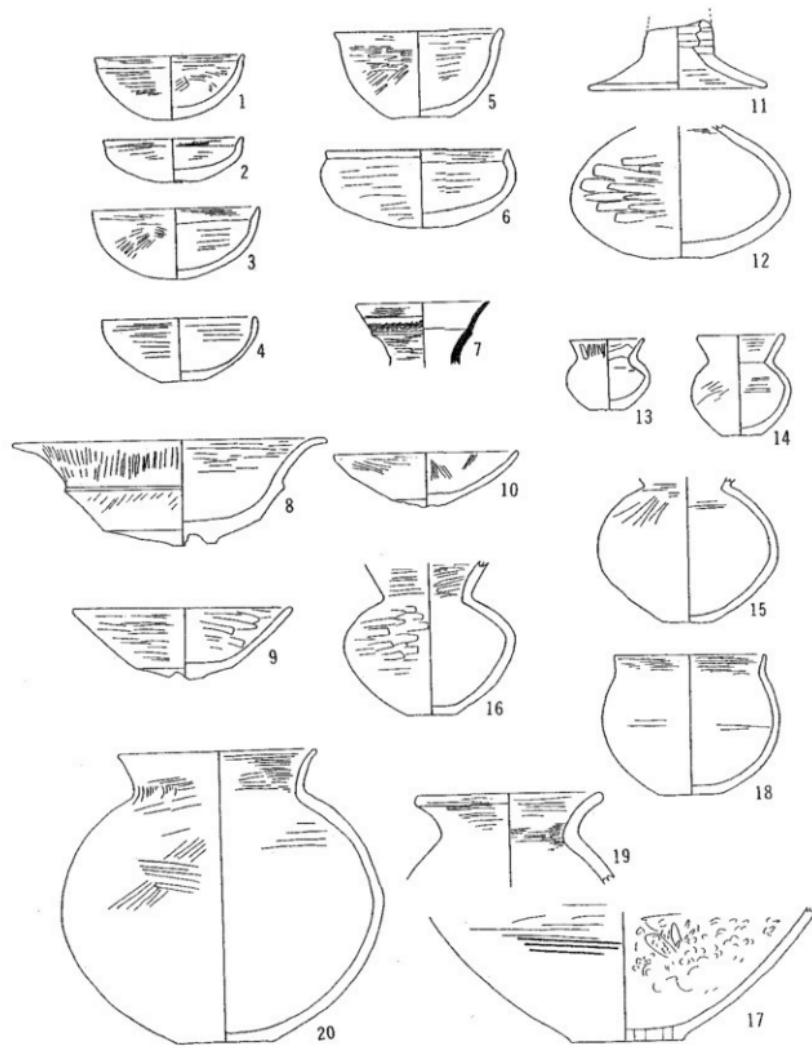
- 1暗褐色（ローム粒子を若干含み、しまりは普通。）
- 2暗褐色（ローム粒とローム粒子を多く含み、焼土粒子も若干含む。しまりは普通。）
- 3暗褐色（ローム粒とローム粒子を少々含み、焼土粒子も若干含む。しまりは良い。）
- 4暗褐色（ローム小ブロックとローム粒子を少々含み、炭小ブロックや焼土粒を若干含む。しまりは普通。）
- 5黒褐色（ローム粒子を若干含み、しまりは普通。）
- 6黒褐色（ローム粒と焼土粒子を若干含み、しまりは普通。）
- 7暗褐色（ローム粒とローム粒子を多く含み、炭粒も若干含む。しまりは良い。）
- 8暗褐色（ローム小ブロック・ローム粒・ローム粒子を少々含み、炭粒も若干含む。しまりは良い。）
- 9暗褐色（ローム小ブロックとローム粒子を少々含み、炭粒子も若干含む。しまりは普通。）
- 10暗褐色（ローム粒とローム粒子を少々含み、焼土粒子も若干含む。しまりは良い。）
- 11暗褐色（ローム粒子を少々含み、炭粒と焼土粒子も若干含む。しまりは普通。）
- 12明褐色（ローム粒とローム粒子を多く含み、炭粒も若干含む。しまりは普通。）
- 13黒褐色（ローム粒とローム粒子を少々含み、しまりは普通。）
- 14暗褐色（ローム粒子を多く含み、しまりは普通。）
- 15暗褐色（ローム粒とローム粒子を少々含み、炭粒子と焼土粒子も若干含む。しまりは普通。）
- 16黒褐色（ローム粒・ローム粒子・焼土粒子を若干含む。しまりは普通。）
- 17黄褐色（ローム粒とローム粒子を多く含む。しまりはやや柔らかい。）
- 18暗褐色（ローム粒子を若干含み、しまりは良い。）
- 19黒色（ローム粒を若干含み、しまりは普通。）
- 20黒褐色（ローム・ローム粒子・炭粒子を若干含み、しまりは普通。）
- 21暗褐色（ローム粒子を若干含み、しまりは普通。）

第21図 第10号住居跡実測図

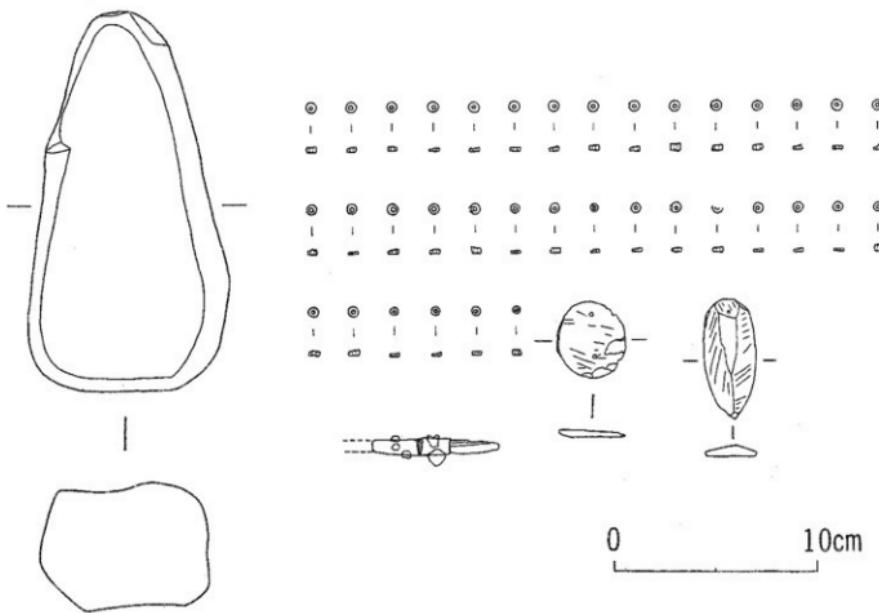
第10号 住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法身 (cm)	器形・成形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師壺	器高 5.3 口径 12.2	丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に弱い棱を持つ。口縁部はゆるく外傾し、内・外面はヘラ磨き。	褐色	砂粒 雲母	良好	北コーナー壁際床面
2	土師壺	器高 3.9 口径 11.3 底径 3.3	上げ底気味。口縁部は内側して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。外側はヘラ削り後、ナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横模ナデ。	暗褐色	砂粒 雲母	普通	北西壁際床面
3	土師壺	器高 5.0 口径 13.7	丸底気味。口縁部の一部欠損。体部は内側して立ち上がり、内面の口縁部との境に棱を持つ。体部下位へラ磨き上位はヘラ削り。口縁部内・外面ナデ。	淡褐色	砂粒 雲母	良好	体部上位から口縁部にかけて保付着 北西壁際床面
4	土師壺	器高 5.5 口径 13.6 底径 3.3	平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部でゆるく内側へラ磨き、外側部内面へラ磨き、外側はナデ。口縁部内・外面横模ナデ。	褐色	砂粒	良好	北西壁際床面
5	土師壺	器高 6.0 口径 13.5 底径 4.0	平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部でゆるく外反する。外側部内面へラ磨き、外側へラ削り。口縁部内・外面横模ナデ。	淡褐色	砂粒	普通	北西壁際床面
6	土師壺	器高 6.7 口径 14.0	丸底気味。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に弱い棱を持ち、口縁部はほぼ直立する。体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横模ナデ。	暗褐色	砂粒	普通	内・外間に保付着 中央部覆土上層
7	須口邊漆	口径 10.7	口辺部破片。口辺部は外側して立ち上がり、中位で強い棱を持つきり、内側は外方に開く。後の上位には柔軟な堆積波状文を付す。内・外面横模ナデ。	灰色	長石 小礫	良好	南コーナー付近 覆土下層
8	土師壺	口径 (25.8)	大型高窓の口部破片。窓部外面の上及び下位に棱を持つ。口辺部は大きく述べて円窓。窓部内面は横ナデ、外側へラ削り。	暗褐色	砂粒	普通	南コーナー付近 覆土下層
9	土師壺	口径 18.0	窓部破片。窓部外側下位に弱い棱を持ち、内側気味に立ち上がる。内・外側へラ磨き。	暗褐色	砂粒	良好	(一次焼成) 体部外側に保付着 北西壁際床面
10	土高	口径 15.1	窓部破片。窓部外側下位に弱い棱を持ち、内・外側に立上がり。	暗褐色	砂粒	普通	覆土上
11	土師壺	口径 (14.5)	脚部破片。脚部はラッパ状に開き、外側弱いへラ磨き、内面ナデ。	暗褐色	砂粒	普通	中央部覆土上層
12	土師壺	底径 5.1	平底。口縁部欠損。体部は内側して立ち上がり、中位に最大棱を持つ。内・外側へラ磨き。絶えていていねいなつくりである。	黄褐色	砂粒	良好	中央部覆土中層
13	土師壺 小型壺	器高 6.0 口径 6.2 底径 2.9	平底。口縁部欠損。体部は内側して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部内面横模ナデ、外側ナデ。体部外側へラ削りナデ。	暗褐色	砂粒	普通	ミニチュア 西コーナー付近 床面
14	土師壺 小型壺	器高 7.5 口径 6.8 底径 2.3	平底。体部から口縁部の一部欠損。体部は内側して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部内・外側ハケ目。体部外側ナデ。	褐色	砂粒	普通	ミニチュア 覆土上
15	土師壺	底径 4.0	平底。口縁部欠損。体部は内側して立ち上がり、中位に最大棱を持つ。体部外側へラ磨き、下位横ナデ。	暗褐色	砂粒	普通	中央部覆土中層
16	土師壺	底径 3.9	平底。口縁部の一部欠損。体部は内側して立ち上がり、口縁部を増して口縁部にいたる。口縁部は外反する。口縁部内・外側横模ナデ。体部外側及び底部へラナデ。	赤褐色	砂粒 雲母	普通	北西壁付近床面
17	土師壺	底径 9.2	平底。底部から体部下位にかけての破片。底盤に2か所の穿孔を残す。体部内面の剥離の荒れが著しい。外側へラ削りの後、ナデ。	暗褐色	砂粒	普通	南北壁付近床面
18	土師壺	器高 11.5 口径 12.4 底径 4.8	平底。大部と口縁部の一端欠損。大部は内側しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。体部内・外側横模ナデ。口縁部内・外側ハケ目。	暗褐色	砂粒	普通	体部外側下位に 保付着。北京壁付近覆土下層
19	土師壺	底径 15.0	口縁部後方。口縁部は「く」の字状に外反する。蓋内は厚い。体部内・外側横模ナデ。	赤褐色	砂粒	普通	北東壁付近覆土下層
20	土師壺	器高 23.8 口径 16.0 底径 8.0	平底。体部中位に最大径を持ち、口縁部は直立して外側に屈曲する。体部外側へラ削り。口縁部内・外側横模ナデ。	暗褐色	砂粒	普通	体部外側に保付着。中央部床面

番号	品種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
21	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	北西壁際床着	滑石
22	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
23	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
24	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
25	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
26	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
27	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
28	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
29	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
30	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
31	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
32	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
33	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
34	臼玉	0.6	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
35	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
36	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
37	臼玉	0.5	0.5	0.1	2.0	0.1	100	"	"
38	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
39	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
40	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
41	臼玉	0.4	0.4	0.1	2.0	0.1	100	南東部床着	"
42	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
43	臼玉	0.4	0.4	0.1	1.5	0.1	100	"	"
44	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
45	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
46	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
47	臼玉	0.5	0.5	0.1	2.0	0.1	100	"	"
48	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
49	臼玉	0.5	0.5	0.1	2.0	0.1	100	"	"
50	臼玉	0.5	0.5	0.4	2.0	0.2	100	"	"
51	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	北西壁際床着	"
52	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	覆土	"
53	臼玉	0.4	0.4	0.2	1.5	0.1	100	"	"
54	臼玉	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	"	"
55	臼玉	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	"	"
56	臼玉	0.4	0.4	0.3	1.5	0.1	100	覆土	番45
57	有孔凹板	3.7	3.4	0.4	2.0	7.0	100	北西部覆土下層	"
58	舞形品	5.9	2.5	0.4	1.5	12.0	100	南西部床着	"
59	砥石	18.8	9.8	6.7	---	1591.0	100	東コーナー壁際上下層	2面使用
60	月子	6.1	0.9	0.3	---	2.0	---	北西壁付近覆土中層	



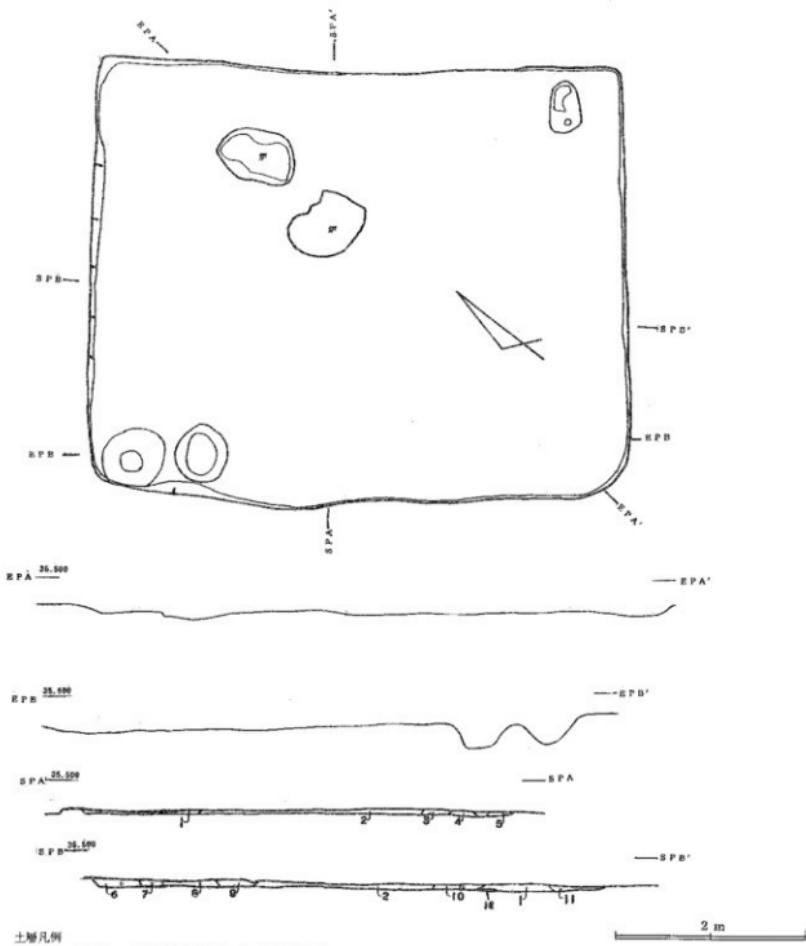
0 20cm



第22図 第10号住居跡出土遺物実測図

(11) 第11号住居跡 (第23・24図)

形態 隅丸長方形状を呈する。主軸方位 N-37°-W。規模 中軸線上東西5.56m、南北4.57mを測る。柱穴 無し。壁溝 壁は全体的に低く、溝は認められない。床面 柔らかな貼り床で、凹凸が目立つ。東壁の中央から南壁の中央にかけては、壁高の観測が不可能であり、床面は地山と同一レベルとなる。中央部に炉跡が位置し、その周辺から多量の炭化材を検出する。貯藏穴 北西部コーナー(1)と、その南側(2)とに接続の状態で掘り込められた2個の貯藏穴が遺存する。大きさはほぼ同一で、形状は円形を呈する。1東西径0.57m、南北径0.56m深さ0.34m、2東西径0.57m、南北径0.64m、深さ0.30mを測る。遺物 土師器 壺・高壺・瓶、滑石製品 白玉(11点)などが検出されている。



土壤剖面 (炭灰とローム粒子を少量含み、しまりは良い。)

2 黒褐色 (炭中ブロックとローム小ブロックを少量含み、焼土粒も若干含む。しまりは普通。)

3 暗褐色 (ローム粒子を若干含み、焼土粒も若干含む。しまりは普通。)

4 黑褐色 (ローム粒を若干含み、ローム粒子を少含む。しまりは普通。)

5 暗褐色 (ローム粒子を多く含み、しまりは良い。)

6 暗褐色 (ローム粒子を少含み、しまりは良い。)

7 明褐色 (ローム中ブロックを若干含み、ローム粒子を多く含む。しまりは良い。)

8 黑褐色 (ローム粒とローム粒子を若干含み、しまりは普通。)

9 暗褐色 (ローム小ブロック・炭粒・焼土粒子を若干含み、ローム粒子も少含む。しまりは普通。)

10 暗褐色 (ローム小ブロックとローム粒子を少量含み、炭粒も若干含む。しまりは良い。)

11 暗褐色 (ローム粒とローム粒子を少含み、しまりは良い。)

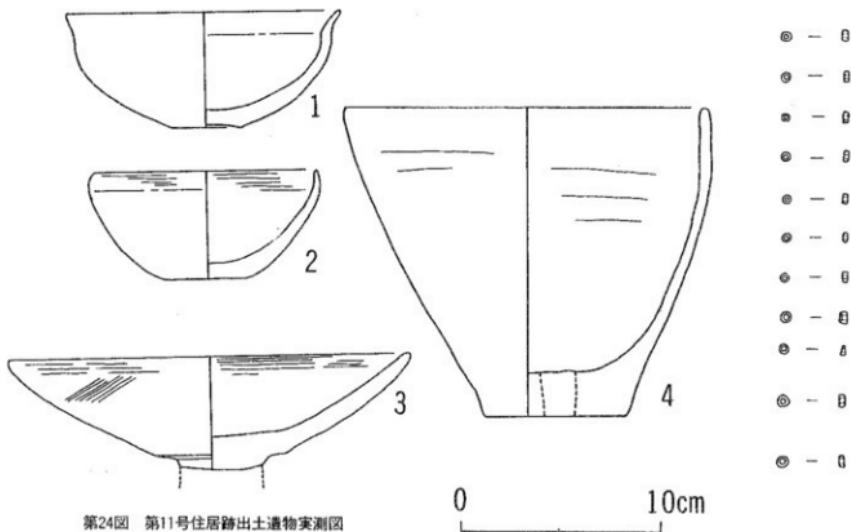
12 黄褐色 (ローム粒子のみ。しまりは普通。)

第23図 第11号住居跡実測図

第11号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形・成整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土環	器高 5.9 口径 13.6 底径 3.6	平底。体部は内側に立ち上がり、体部内面で口縁部と の間に弱い棱を持つ。体部外側へラ削り。口縁部内・外 面削ナダ。内・外面赤彩。	赤褐色	砂粒	良好	北西壁覆土下 層
2	土環	器高 5.4 口径 11.2 底径 3.9	平底。体部は内側丸味に立ち上がる。底部から体部にかけ てへラ削り。口縁部内・外面及び体部内面ナダ。	黄褐色	砂質	良好	体部外側煤付 有。西3-7-貯藏穴 1内底部
3	土環	口径 19.9	环部破片。环部は外面に稜を持ち外傾して開く。环部内 ・外面ハラ自彫造。	暗褐色	砂粒	良好	西3-1-貯藏穴 1, 2 内底部
4	土瓶	器高 15.4 口径 18.0 底径 6.1	平底。底部中央に孔を穿つ。深鉢状を呈して立ち上がり、 体部内・外面は粗雑なハラ磨き。	暗褐色	砂粒	普通	南3-7-貯藏穴 1内床面

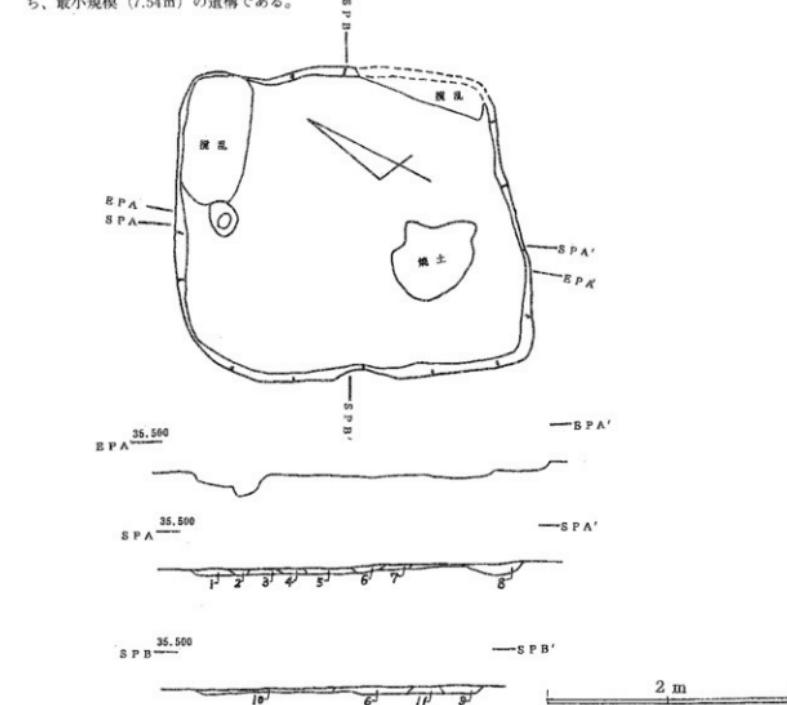
番号	器種	法量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現 在 率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
5	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	西コナ-貯藏穴2内底部	滑石
6	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	西コナ-貯藏穴2内覆土	"
7	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
8	臼玉	0.5	0.5	0.4	2.0	0.2	100	"	"
9	臼玉	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	"	"
10	臼玉	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	"	"
11	臼玉	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	"	"
12	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
13	臼玉	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	"	"
14	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
15	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"



第24図 第11号住居跡出土遺物実測図

(12) 第12号住居跡 (第25図)

形態 暗丸長方形をなしている。主軸方位 N-31°-W。規模 中軸線上東西2.54m、南北2.85mを測る。柱穴 北東部コーナーを巡るようにして東西方向に長軸1.05m、短軸0.52m、深さ0.09mを測る擾乱坑がある。その西端に所在する柱穴状の掘り込みの状態からは、擾乱坑の延長区の可能性が多分に考えられる。したがって、柱穴は構築当初から設けられていなかったと判断することに妥当性がある。壁溝 無し。床面 全体的に柔軟な貼り床である。南東部コーナー付近にも擾乱があり、中央部から南西寄りに焼土が薄く堆積する。貯藏穴 無し。遺物 無し。その他 今回調査した住居跡のうち、最小規模 (7.54m^2) の遺構である。



土層凡例

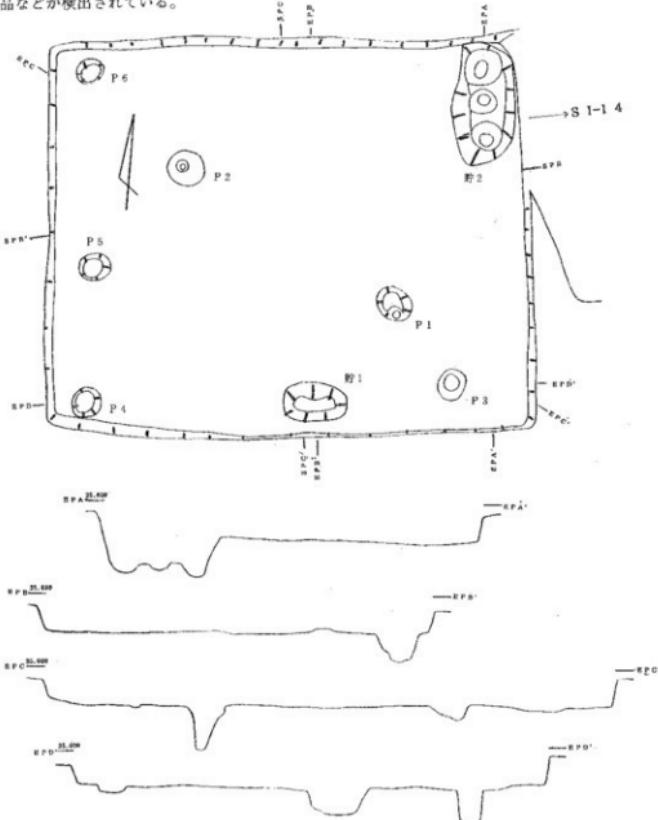
- 1 黄褐色 (ローム粒子と黒色粒子を少暈含み、しまりは良い。)
- 2 明褐色 (ローム粒子と焼土粒子を少暈含み、しまりは普通。)
- 3 黒褐色 (焼土粒を少暈含み、しまりは普通。)
- 4 暗褐色 (ローム粒子をやや多く含み、焼土粒を少暈含む。しまりは普通。)
- 5 黑 色 (ローム粒子と焼土粒を若干含み、しまりは普通。)
- 6 黑褐色 (ローム小ブロックとローム粒子を少暈含む。しまりは普通。)
- 7 黑 色 (ローム粒子を若干含み、しまりは普通。)
- 8 黑 色 (ローム小ブロックとローム粒子を少暈含み、しまりは普通。)
- 9 明褐色 (ローム小ブロックとローム粒子を多く含み、しまりは普通。)
- 10 黑 色 (ローム粒子を若干含み、しまりは普通。)
- 11 黑褐色 (ローム中ブロックとローム粒子・焼土粒を若干含む。しまりは普通。)

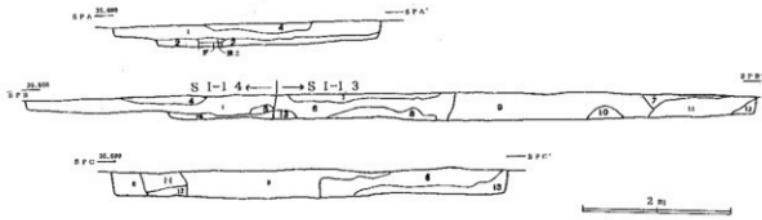
第25図 第12号住居跡実測図

(13) 第13号住居跡 (第26・27図)

形態 溝丸長方形状をなし、東側の14号住居跡と切り合う。主軸方位 N-91° - W(N-89° - E)。

規模 中軸線上東西6.50m、南北5.45mを測る。柱穴 6本 (P 1 ~ 6) が相当するが極めて不規則な配置といえる。P 1 東西径0.46m、南北径0.45m、深さ0.22m、P 2 東西径0.51m、南北径0.50m、深さ0.62m、P 3 東西径0.33m、南北径0.42m、深さ0.42m、P 4 東西径0.40m、南北径0.40m、深さ0.06m、P 5 東西径0.39m、南北径0.30m、深さ0.16m、P 6 東西径0.36m、南北径0.33m、深さ0.11mを計測する。壁溝無し。床面堅くしまる貼り床。北西部コーナーに近い位置と、南壁の中央に沿って小範囲に薄い焼土の堆積が認められる。貯藏穴 2地点で確認する。(1)は東北部コーナーの14号住居跡と切り合う線上西側に位置し、南北方向に不整梢円形状を呈し、長軸1.61m、短軸0.86m、深さ0.53mを測る。(2)は南壁に沿ってほぼ中央で東西方向に掘り込まれている。梢円形をなしており、長軸0.86m、短軸0.55m、深さ0.36mを測る。遺物 土師器 壊、滑石製品 管玉(9点)・白玉・劍形品、石製品 砥石、不明鉄製品などが検出されている。





土層凡例

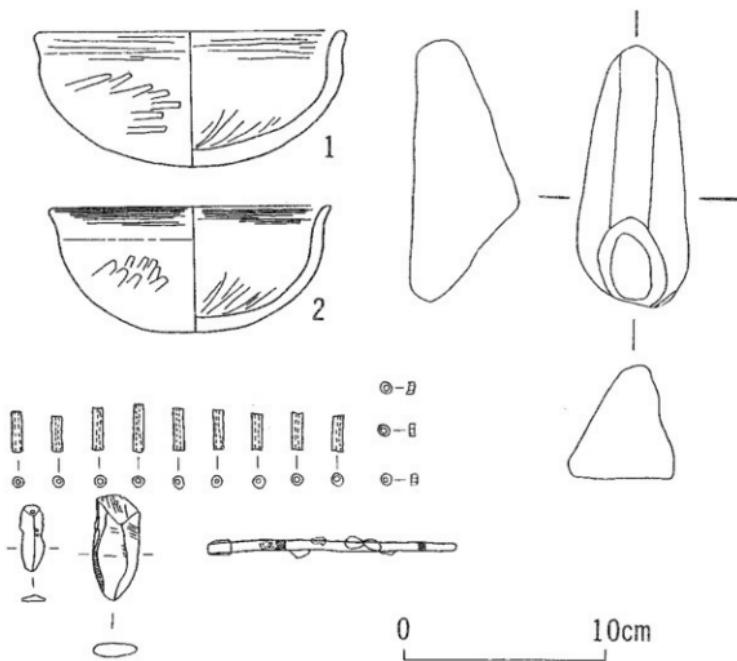
- 1 黒褐色(ローム粒を若干含み。しまりはやや良い。)
- 2 黄褐色(ローム中ブロック・ローム粒・焼土粒がやや多く、しまりは非常に良い。)
- 3 暗褐色(ローム粒・ローム粒子・焼土粒子を若干含み、しまりは良い。)
- 4 暗褐色(ローム粒とローム粒子を少量含み。しまりは普通。)
- 5 黑褐色(黒色土をやや多く含み、ローム粒子も若干含む。しまりは普通。)
- 6 黑褐色(ローム粒子をやや多く含み、焼土粒と焼土粒子も若干含む。しまりは普通。)
- 7 黒 色(焼土粒を若干含み。しまりは普通。)
- 8 暗褐色(ローム粒とローム粒子をやや多く含み、しまりは普通。)
- 9 黑褐色(ローム粒子を少量含み、焼土粒子も若干含む。しまりは普通。)
- 10 暗褐色(ローム粒とローム粒子を少量含み、炭灰・焼土粒も若干含む。しまりは普通。)
- 11 暗褐色(ローム粒とローム粒子を少量含み、炭灰・焼土粒子も若干含む。しまりは普通。)
- 12 黑 色(ローム粒を若干含み。しまりは普通。)
- 13 暗褐色(ローム粒と黒色土を少量含み。しまりは普通。)

第26図 第13号住居跡実測図

第13号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形・成形形の特徴			色調	胎土	焼成	備考
			孔径	深度	外側				
1	土 壁 坏	器高 7.0 口径 15.5	九底。口縁部下位に外棱を持ち、口縁部はゆるく外反し、縫部できらんに外反する。口縁部内・外側ハケ目調整。体 部内・外側ナゲ。			黄褐色	砂 粒	普 通	貯蔵穴内覆土上層
2	土 壁 坏	器高 6.4 口径 13.9	九底。口縁部下位に外棱を持ち、口縁部はゆるく外反し、縫部できらんに外反する。口縁部内・外側ハケ目調整。体 部内・外側ナゲ。			赤褐色	砂 粒	良 好	底部外面に「十」字状の刻みあり、南壁中央付近床面

番号	器種	法量 (cm)				出土地点	備考		
			最大長	最大幅	最大厚				
3	管 玉	2.0	0.5	---	2.0	1.1	100	南東部床着	滑 石
4	管 玉	1.7	0.5	---	2.0	1.0	100	"	"
5	管 玉	2.1	0.5	---	2.0	1.1	100	"	"
6	管 玉	2.4	0.5	---	2.0	1.2	100	"	"
7	管 玉	2.1	0.4	---	2.0	1.1	100	"	"
8	管 玉	2.0	0.4	---	2.0	1.1	100	"	"
9	管 玉	1.9	0.4	---	2.0	1.1	100	"	"
10	管 玉	1.9	0.5	---	2.0	1.1	100	"	"
11	管 玉	1.8	0.4	---	2.0	1.1	100	"	"
12	臼 玉	0.6	0.6	0.4	2.0	0.2	100	"	"
13	臼 玉	0.6	0.6	0.3	2.0	0.1	100	"	"
14	臼 玉	0.5	0.6	0.4	2.0	0.1	100	"	"
15	劍形品	3.3	0.1	0.3	1.5	2.0	100	北東コーナー付近覆土中層	"
16	劍形品	5.4	0.3	0.6	2.0	12.0	100	西壁際覆土下層	"
17	砥 石	13.2	0.4	5.4	---	486.0	100	北東部床着	1面使用
18	不明鉄製品	12.3	0.5	0.4	---	8.5	---	南東部覆土下層	



第27図 第13号住居跡出土遺物実測図

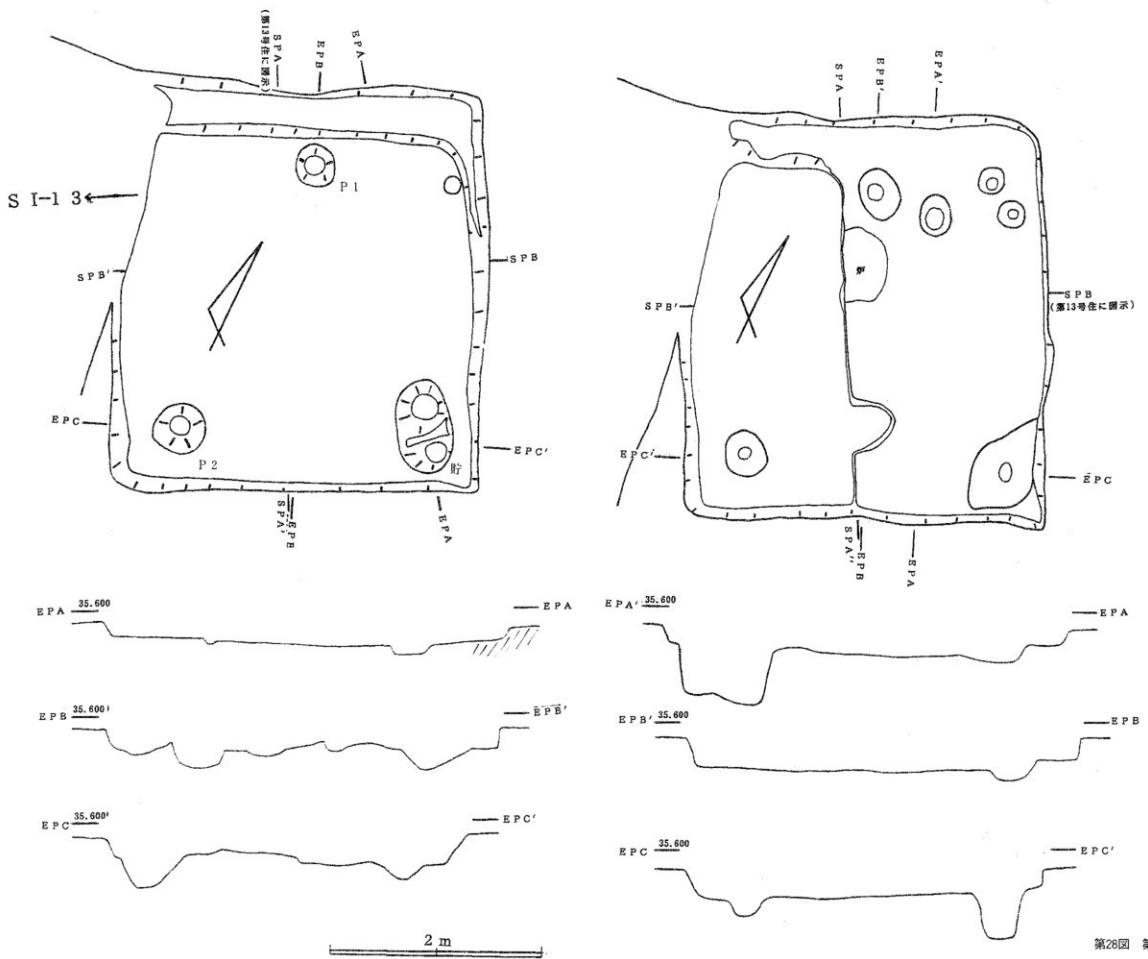
(14) 第14号住居跡（第2次遺構）（第28・29図）

形態 本跡は13号住居跡と切り合う状態でその東側に所在し、形状はほぼ正方形を呈するが、北壁及び床面調査の段階で、同一の位置に本跡に先行する時期の住居跡が構築されていたことを確認。この住居跡を第1次遺構とし、次頁で観察結果をあげておく。主軸方位 N-30°-W。規模 中軸線上東西3.36m、南北3.40mを測る。柱穴 P1とP2が相当する。P1東西径0.40m、南北径0.35m、深さ0.14m、P2東西径0.48m、南北径0.48m、深さ0.17mを測る。壁溝無し。床面柔軟な貼り床で凹凸が目立つ。貯蔵穴 東南部コーナーに南北方向に掘り込まれ、不整椭円形をなしている。長軸0.90m、短い軸0.50m、深さ0.47mを測る。遺物 土師器 壌・壺、石製品 砥石・すり石などが検出されている。

（第1次遺構）

床面は13号住とほぼ同一レベルと思われるが、大きさにおいては南壁が北に0.35m程伸びており、北壁の長さ3.15mを加えた数値1.103m²が第2次遺構よりも広いことになる。第2次遺構は第1次遺構の施設を継承して築いたことが、すでに確認されている東・南・西壁の位置および計測値などから知られるとともに、遺存する柱穴P1と貯蔵穴の施設も再利用されていたことは明らかである。

第1次遺構の遺存する床面の発掘結果では、概して軟弱な貼り床の痕跡が数か所で確認され、その多くが複雑に近い状況で観察されていることは、第2次遺構が構築される時点での作業行為がもたらした結果と理解できよう。遺物は東北部コーナー付近に集中しており、土師器 壌・壺・甕などの破片が多量に出土している。

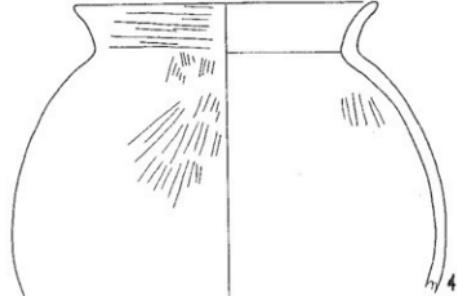
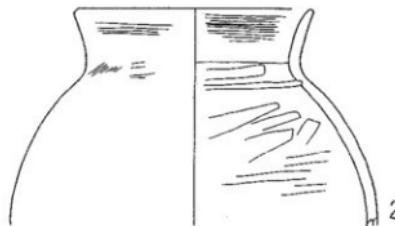
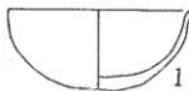


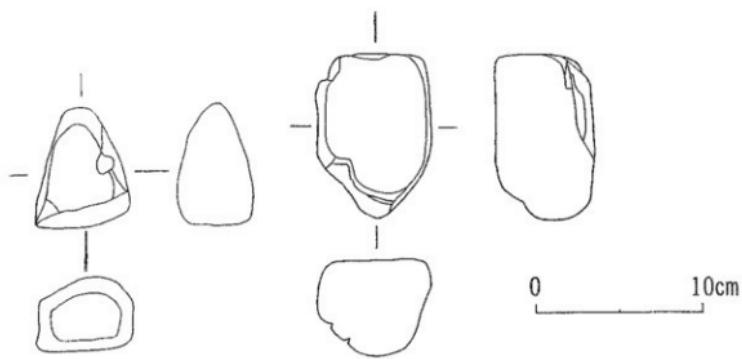
第26図 第14号住居跡実測図

第14号 住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形・成形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土瓶 壺	器高 4.8 口径 11.0 底径 2.6	平底。体部は内彫して立ち上がり、口縁部はやや外傾する。口縁部及び体部内・外面ナデ。	赤褐色	砂粒	普通	(二次焼成) I南東壁際覆土 中層
2	土瓶 壺	口径(14.2)	肩部から口縁部にかけての破片。肩部は内彫して立ち上がり、口縁部はやや外反する。胴部内・外面ヘラナデ。	赤褐色	砂粒	良好	I北西壁際覆土 下層
3	土瓶 壺	口径 18.7	肩部から口縁部にかけての破片。肩部は張りが強く、頸部外反する。胴部内・外面及び口縁部外面機ナデ。口縁部内面ハケ目調整。	暗褐色	砂粒	普通	銅部外面に様付着 I北西部覆土下層
4	土瓶 壺	口径 18.2	肩部から口縁部にかけての破片。肩部は張りがあり、胴部内・外面ナデ。胴部内・外面はヘラ削り。	暗褐色	砂粒	普通	II中央部覆土中層

番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現在率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
5	砥石	9.9	6.9	5.8	...	651.0	100	I南西部覆土下層	2面使用
6	すり石	7.3	5.7	4.4	...	262.0	100	I南東部床着	

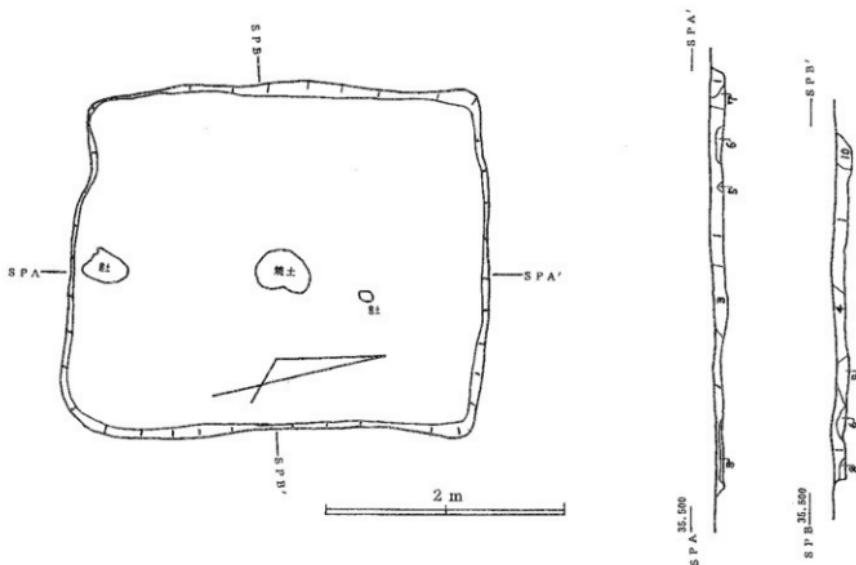




第29図 第14号住居跡出土遺物実測図

(15) 第15号住居跡 (第30・31図)

形 塔 隅丸長方形をなしている。主軸方位 N-12°-E。規 模 中軸線上東西2.85m、南北3.47mを測る。柱 穴 無し。壁 溝 無し。床 面 軟弱な貼り床で、凹凸が著しい。ほぼ中央部の小範囲で焼土の堆積が認められる。おそらく炉跡と思われる。貯蔵穴 無し。遺 物 土器器 壊、鐵製品 錆先などが検出されている。



土層凡例

- 1 黒褐色 (ローム粒とローム粒子を少量含み、しまりは普通。)
- 2 茶灰色 (粘土。しまりは良い。)
- 3 増褐色 (ローム粒とローム粒子を少量含み、炭粒も若干含む。しまりは普通。)
- 4 黑褐色 (ローム粒と燒土粒を若干含み、しまりは普通。)
- 5 黄褐色 (ローム大ブロック。しまりは非常に良い。)
- 6 增褐色 (ローム粒子を多く含み、しまりは普通。)
- 7 黄褐色 (ローム粒とローム粒子の中に黒色粒・黒色粒子を少量含む。しまりは普通。)
- 8 黄褐色 (ローム粒の中に黒色粒を若干風味、しまりはやや柔らかい。)
- 9 明褐色 (ローム粒とローム粒子を多く含み、しまりは普通。)
- 10 増褐色 (黒色粒を若干含み、しまりは普通。)

第30図 第15号住居跡実測図

第15号 住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形・或形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土器 壺	基高 6.4 口径 15.3	丸底。体部から口縁部の一部欠損。体部は内側して立ち上がり、口縁部との境に縦を待つ。口縁部はほぼ直立する。口縁部内・外面横ナブ。体部外面ヘラ削り。	褐色	砂粒	良	中央部覆土下層

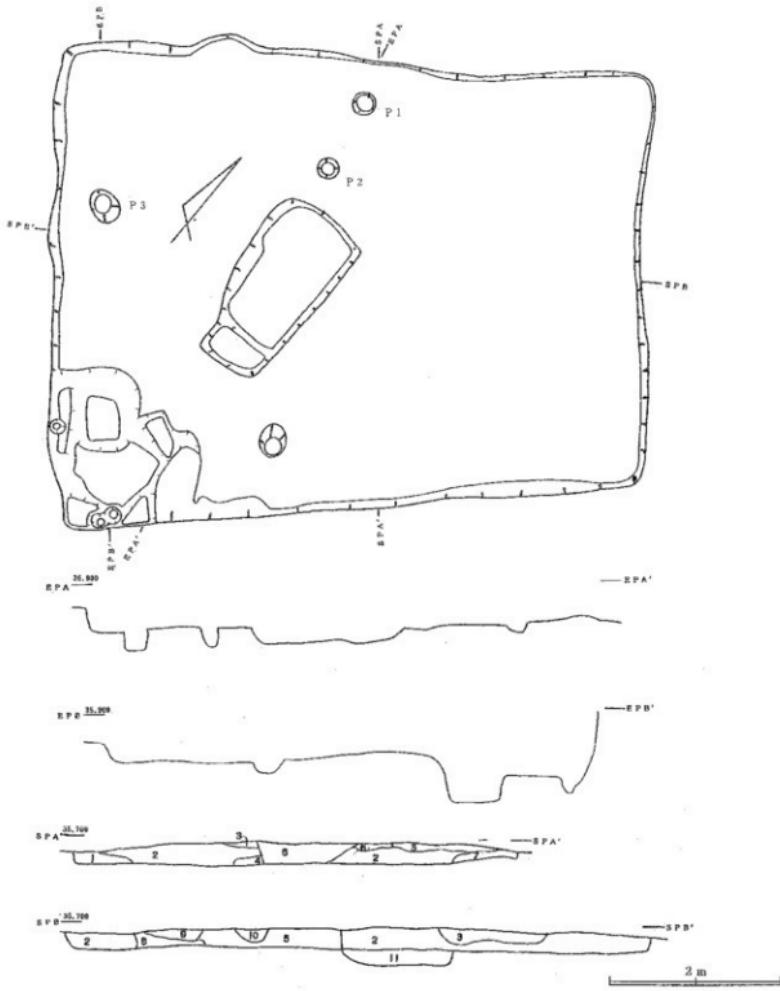
番号	器種	法量 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
2	鍾	11.6	2.3	0.3	---	28.0	98	中央部床着	



第31図 第15号住居跡出土遺物実測図

(16) 第16号住居跡 (第32・33図)

形態 隅丸長方形状をなしている。本跡の70%余は調査区域外に所在していたが、当該部分は既に公有化されていたので完掘することができた。主軸方位 N-130° - W (N-50° - E)。規模 中軸線上東西6.85m、南北5.42mを測る。柱穴配置は極めて不規則であるが、3本 (P 1~3) が相当する。P 1 東西径0.28m、南北径0.28m、深さ0.25m、P 2 東西径0.27m、南北径0.24m、深さ0.22m、P 3 東西径0.40m、南北径0.33m、深さ0.20mを計測する。壁溝無し。床面柔軟な貼り床で凹凸が著しい。中央部のやや西側で南北方向に2.16m×1.10m程の長方形状の掘方が所在するが、本跡との直接的な関係はないようである。焼土の堆積は6か所で確認されており、うち2か所からは焼けたローム塊が検出されていることから、炉跡の可能性もある。なお、東壁沿い中央付近から少量のベンガラも出土している。貯蔵穴 南西部コーナーの北寄りに掘り込まれており、東西径0.80m、南北径0.97m、深さ0.52mを測る。底部からは焼土塊が確認されている。遺物 土師器 壺・高壺・壺、滑石製品 勾玉・白玉(14点)などが検出されている。



土堀例

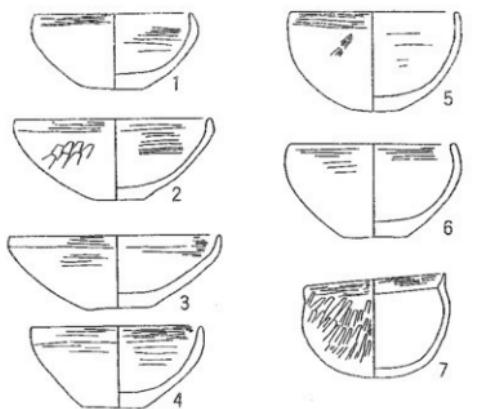
- 1 墓褐色 (ローム粒とローム粒子を少量含み、しまりは普通。)
- 2 黒褐色 (ローム粒・炭粒・焼土粒子を若干含み、しまりは普通。)
- 3 黑褐色 (焼土を若干含み、しまりは普通。)
- 4 黑褐色 (炭粒と焼土粒子を若干含み、しまりは普通。)
- 5 黑褐色 (ローム粒と炭粒子を少量含み、しまりは普通。)
- 6 灰褐色 (ローム粒と炭粒を少々含み、しまりは普通。)
- 7 黑褐色 (ローム小ブロックとローム粒子を若干含み、しまりは普通。)
- 8 黑褐色 (ローム粒を少々と炭粒子を若干含む。しまりややや柔らかい。)
- 9 灰褐色 (ローム粒子を少量と焼土粒子を若干含む。しまりは普通。)
- 10 暗赤褐色 (焼土粒子が多く炭粒を若干含む。しまりは普通。)
- 11 黑褐色 (ローム粒子を若干含み、しまりは普通。)

第32図 第16号住居跡実測図

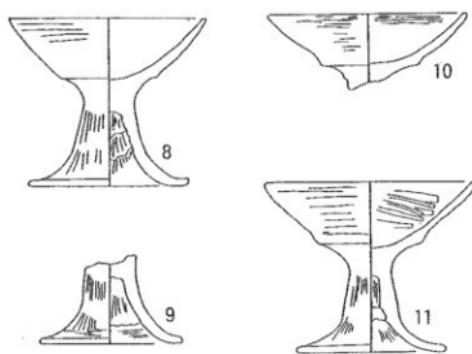
第 16 号 住居跡 出土遺物報告書

番号	器種	法量 (cm)	器形・成形形等の特徴	色 青	胎 土	焼 成	備考
1	土瓶 环	器高 5.7 口径 12.1 底径 3.8	平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は内傾する。体部外面及び底部へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	黄褐色	砂粒	良 好	北コナー壁際床面
2	土瓶 环	器高 6.4 口径 14.8 底径 3.6	平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は弱く内傾する。口縁部内・外面横ナデ。体部へラ磨き。	赤褐色	砂粒	普 通	中央部覆土下層
3	土瓶 环	器高 5.6 口径 15.9 底径 5.0	上げ底気味。体部は内側して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ・外面及び底部へラナデ。	赤褐色	砂粒	普 通	体部外面に運付 着北西床面
4	土瓶 瓶	器高 6.2 口径 13.1 底径 4.8	口縁部の頸部型、平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は斜め内傾する。口縁部内・外側横ナデ。体部へラ磨き。内・外側赤色。	赤褐色	砂粒	普 通	内コナー付近 覆土下層
5	土瓶 瓶	器高 7.5 口径 12.8	丸底気味。体部は内側して立ち上がり、口縁部は弱く内傾する。口縁部内・外側横ナデ。体部外側下段及び底部へラ削り。	暗褐色	砂粒	普 通	南コナー付近 覆土下層
6	土瓶 瓶	器高 7.2 口径 12.7 底径 5.0	平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部内・外側横ナデ。体部内面ナデ・外側へラ削り後、ナデ。	赤褐色	砂粒	良 好	(二次焼成)
7	土瓶 瓶	器高 7.5 口径 10.9	丸底。口縁部の一部欠損。体部は内側して立ち上がり、口縁部は内側を残す、わずかに外反する。底部から体部にかけてへラ削り。口縁部内・外側横ナデ。	暗褐色	砂粒	粗 糙	南コナー付近 覆土下層
8	土高 环	器高 13.9 口径 14.9 底径 12.3	腹部はラッパ状に開き、環部は外側下位に縫を持ち、内側氣味に立ち上がる。縫部外側縫方向にへラ磨き。环部内・外側横方向にへラ磨き。	赤褐色	砂粒	普 通	环部内部に運付 着北西部炉(第1炉)内
9	土高 环	底径 10.9	腹部破片。腹部はラッパ状に開く。縫部外側縫方向にへラ磨き。内側はていねいなナデ。	赤褐色	砂粒	普 通	(二次焼成) 北西部炉(第1炉)内
10	土高 环	口径 15.4	环部破片。环部は外側下位に縫を持ち、内側氣味に立ち上がる。内・外側横方向にへラ磨き。	暗褐色	砂粒	普 通	北西部炉(第1炉)内
11	土高 环	器高 13.1 口径 15.3 底径 11.6	腹部はラッパ状に開き、外側下位に縫を持ち、内側氣味に立ち上がる。縫部外側縫方向にへラ磨き。环部内・外側方向にへラ磨き。	赤褐色	砂粒	普 通	环部内部に運付 着北西部炉(第1炉)内

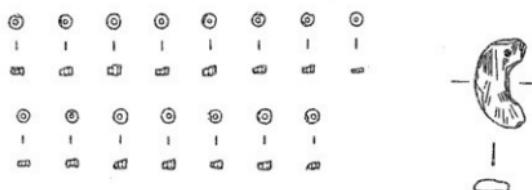
番号	器種	法量 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚 (mm)					
12	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	中央部覆土下層	滑石
13	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	南西部覆土下層	"
14	臼玉	0.6	0.6	0.4	2.0	0.1	100	南東壁際覆土下層	"
15	臼玉	0.6	0.6	0.4	2.0	0.2	100	"	"
16	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
17	臼玉	0.6	0.6	0.3	2.0	0.1	100	"	"
18	臼玉	0.6	0.6	0.3	2.0	0.1	100	"	"
19	臼玉	0.6	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
20	臼玉	0.5	0.6	0.3	2.0	0.1	100	"	"
21	臼玉	0.6	0.6	0.4	2.0	0.1	100	"	"
22	臼玉	0.5	0.6	0.3	2.0	0.1	100	"	"
23	臼玉	0.6	0.6	0.4	2.0	0.1	100	"	"
24	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
25	臼玉	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
26	臼玉	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	南東壁際床下	"
27	勾玉	3.6	1.4	0.5	1.5	6.5	100	北西部覆土下層	"



0 20cm



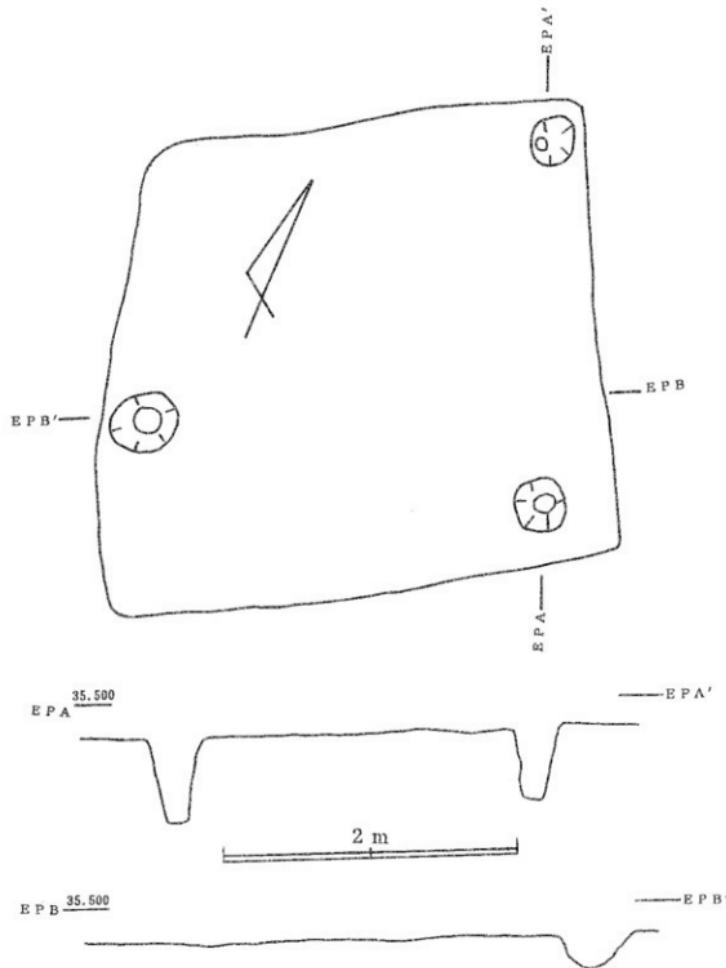
0 10cm



第33図 第16号住居跡出土遺物実測図

(17) 第17号住居跡 (第34・35図)

形態 北西部コーナー周辺が詰まる変則的方形状を呈するといえるが、壁を確認し難く輪郭が判然としない。主軸方位 N-26°-W。規模 東西3.40m、南北 3.17mを測る。柱穴 3本 (P 1-P 3) が相当する。P 1 東西径0.38m、南北径0.37m、深さ0.58m、P 2 東西径0.30m、南北径0.36m、深さ0.54m、P 3 東西径0.43m、南北径0.43m、深さ0.27mを測る。壁溝 無し。床面 軟弱な張り床。貯蔵穴 無し。遺物 土師器 壺、その他 鉄滓が数点検出されている。



第34図 第17号住居跡実測図

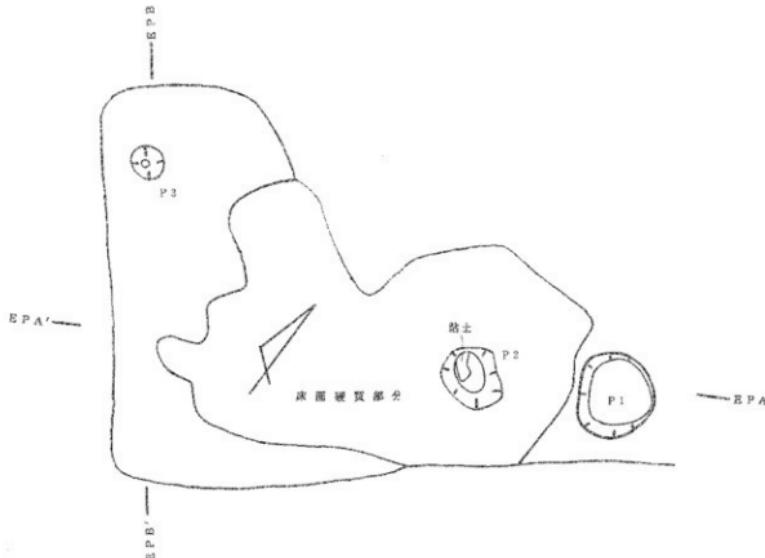
第17号 住居跡出土遺物毎回表							
番号	器種	法量(cm)	器形・成形等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土器	口径 (24.3)	胴部上位から口縁部にかけての痕片。胴部はゆるく内側にして立ち上がり、口縁部は外傾する。口縁部及び胴部の内曲ナデ、外側はヘラ削り。	褐色	砂粒	良好	外面全体に煤付 北部中央床面

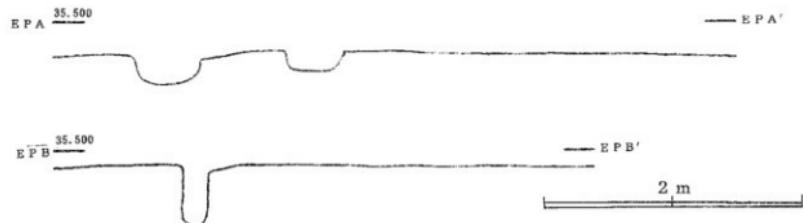


第35図 第17号住居跡出土遺物実測図

(18) 第18号住居跡 (第36回)

形態 開長方形状をなしている。主軸方位 N-129° -W (N-51° -E)。規模 東壁と北壁の大半が欠失している現状から、図面上の復原数値となるが、概ね東西4.30m、南北3.06m程の大きさになる。柱穴 3本が相当する。P1 東西絶0.65m、南北絶0.65m、深さ0.25m、P2 東西絶0.55m、南北絶0.42m、深さ0.18m、P3 東西絶0.27m、南北絶0.22m、深さ0.47mを測る。壁溝 無し。床面堅くしまった貼り床であるが、西側が顯著に遺存する。柱穴P2の底部に白色粘土が充填されていた。貯蔵穴 遺存面からの確認はできなかったが、柱穴P1の位置と規模からは貯蔵穴として機能していた可能性もあり得る。遺物 無し。

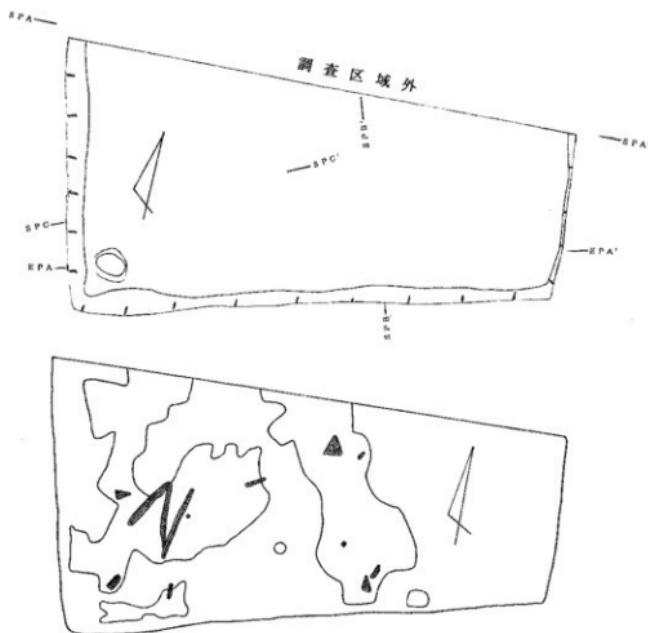


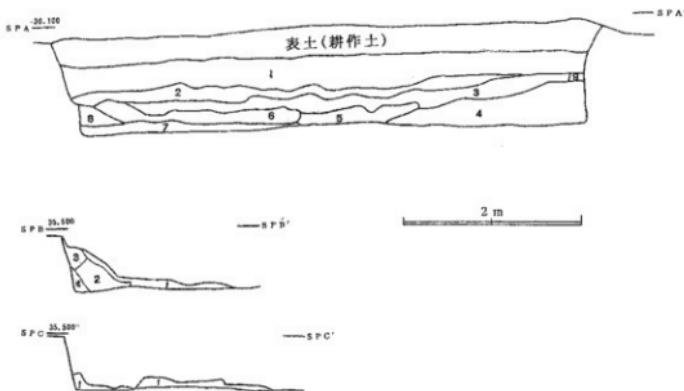


第36図 第18号住居跡実測図

(19) 第19号住居跡（第37・38図）

形 館 本跡の北部直上には公道（農道）が敷設されている関係で調査を断念する。遺存する造構の状況から推測して、正方形若しくは長方形を呈するものと思考する。主軸方位 N-18°-W。規模 南北は不明瞭であるが、東西は5.65mを測る。壁 溝 明確性を欠いており、遺存面で僅かに認められる。床面 遺存面での観察では、鹿沼土を多用する柔軟な貼り床であるが、柱穴の痕跡確認までには至らなかつた。床面のはば全域から多量の焼土が確認されている。貯蔵穴 遺存域からは確認されていない。遺物 滑石製品 有孔円板、土製品 土玉などが出土している。





土壌凡例

- 1 黒 色 (ローム粒とローム粒子を若干含み。しまりは普通。)
- 2 黒褐色 (ローム粒・ローム粒子を少量と炭粒を若干含む。しまりは普通。)
- 3 暗褐色 (炭粒・ローム粒・ローム粒子を少量含み、焼土粒も若干含む。しまりはやや良い。)
- 4 明褐色 (ローム小ブロック・ローム粒・ローム粒子が多く、黒色粒と焼土粒も若干含む。しまりは良い。)
- 5 明褐色 (ローム粒とローム粒子を多く含み、黒色粒も少額含む。しまりは良い。)
- 6 暗褐色 (ローム小ブロック・ローム粒・ローム粒子・黒色粒子を少額含む。しまりは普通。)
- 7 燃褐色 (炭粒と焼土粒を若干含む。しまりは普通。)
- 8 暗褐色 (ローム粒を若干含む。しまりはやや柔らかい。)
- 9 暗褐色 (ローム粒を若干含む。しまりは普通。)

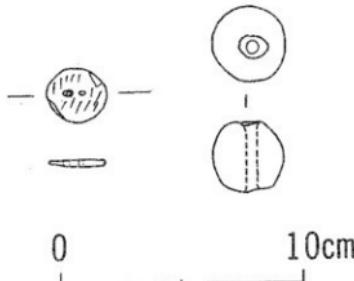
S P B ~ S P B' の ラ イ ン

- 1 赤褐色 (焼土。しまりは良い。)
- 2 暗褐色 (ローム粒・ローム粒子・焼土粒を若干含む。しまりは普通。)
- 3 暗褐色 (ローム粒とローム粒子を少額含む。しまりは普通。)
- 4 黑褐色 (ローム粒子を若干含む。しまりは普通。)

第37図 第19号住居跡実測図

第19号 住居跡 実測図

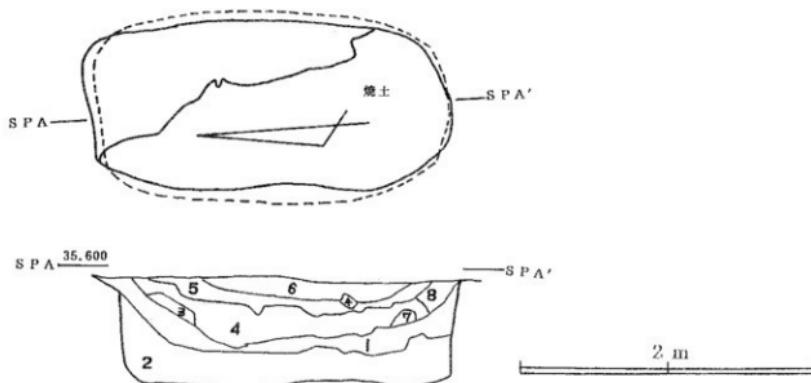
番 号	器 様	法 量 (c m)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
1	有孔円板	2.4	2.5	0.3	1.5	1.5	100	西部蓋土下層	滑 石
2	土 玉	2.9	3.0	...	5.0	21.0	100	蓋 土	



第38図 第19号住居跡出土遺物実測図

(20) 第1号土 坑 (第39図)

4号住東南隅から東に5.20m程離れた位置で、南北方向に向いて所在する。形態は梢円形状を呈し、長軸2.25m、短軸1.30m、深さ0.80mを測る。表土から0.30m程の深さまでは焼土粒と炭粒が混在する堆積層が確認されている。底部は概ね平坦で、遺物は検出されていない。



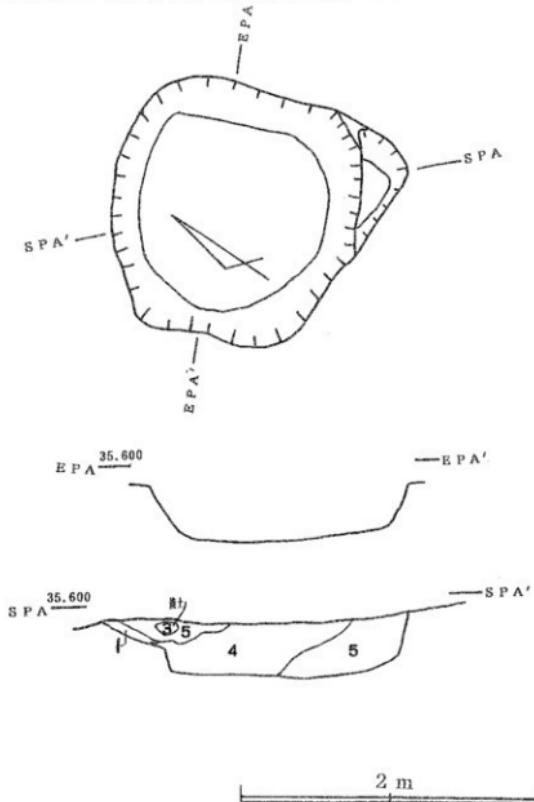
土層凡例

- 1 黒褐色 (ローム粒子を若干含む。しまりは普通。)
- 2 褐褐色 (ローム粒とローム粒子をやや多く含む。しまりは普通。)
- 3 黒 色 (焼土粒子を少量含む。しまりは普通。)
- 4 赤褐色 (焼土粒と焼土粒子の中に黒色粒・炭粒を少量含む。しまりは普通。)
- 5 黑褐色 (炭粒と焼土粒子を少量含む。しまりは普通。)
- 6 黑褐色 (炭粒と焼土粒子を若干含む。しまりは普通。)
- 7 黑褐色 (炭粒を多く含み、焼土粒子を若干含む。しまりは普通。)
- 8 褐褐色 (焼土粒と焼土粒子を少量含み、炭粒も若干含む。しまりは普通。)

第39図 第1号土坑実測図

(21) 第2号土 坑 (第40図)

4号住西南隅から南側に0.10m程の位置に所在する。形態は歪んだ円形を呈し、東西0.95m、南北1.70m、深さ0.36mを測る。上層部に比較的多くの焼上粒や炭粒が混在しているが、混在の度合いに多少の差はありながら底部にまで及んでいる。底部は概ね平坦で、遺物は皆無である。



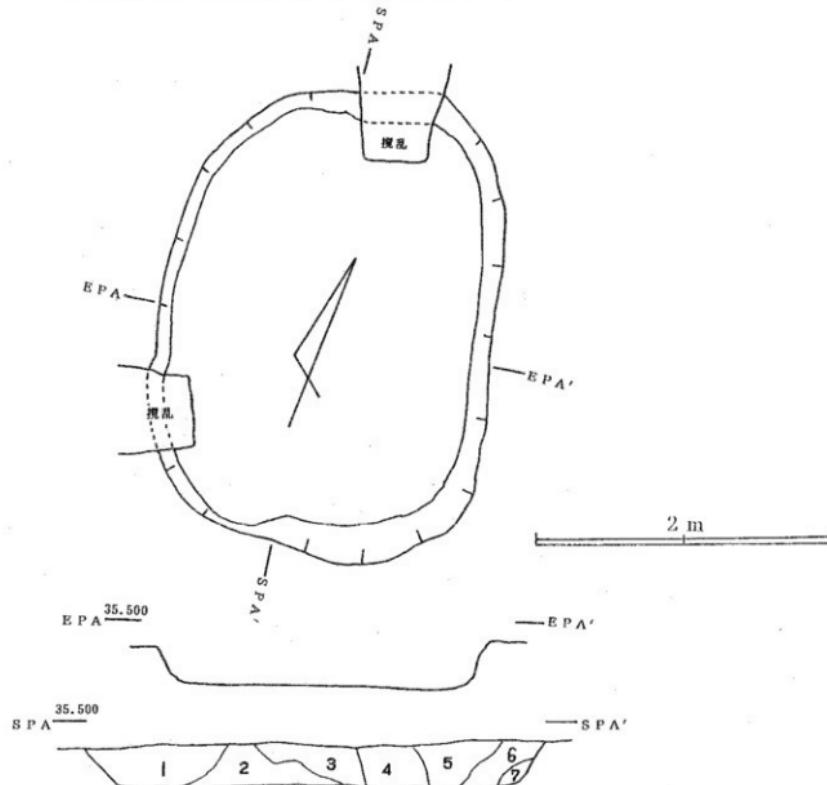
土層見附

- 1 明褐色 (黒色粒、黒色粒子、焼上粒子を含む。しまりは良い。)
- 2 赤褐色 (焼土ブロックと焼土粒子をやや多く、炭粒も若干含む。しまりは普通。)
- 3 赤褐色 (焼土のみ。しまりは非常に良い。)
- 4 暗褐色 (ローム粒と炭粒を少量含む。しまりは普通。)
- 5 黒 色 (ローム粒子を少量含む。しまりは良い。)

第40図 第2号土坑実測図

(22) 第3号土坑 (第41・42図)

8号住南壁の西寄りに接して、ほぼ南北の方向で所在する。形態は梢円形を呈し、長軸3.22m、短軸2.29m、深さ0.26mを測る。堆積土には焼土粒が全体的に含まれている。底部のしまりは普通であり、その中央部付近の直上から有孔円板（2点）と塊が検出されている。



土層凡例

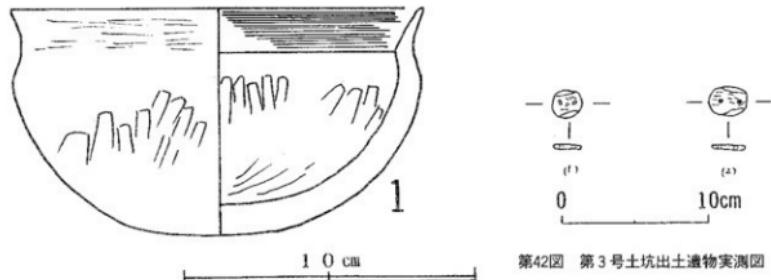
- 1 褐色 (ローム小ブロックとローム粒を少量含み、ローム粒を少量、黒色粒も若干含む。しまりは普通。)
- 2 暗褐色 (ローム中ブロックと焼土粒を若干、ローム粒・ローム粒子も少量含む。しまりは普通。)
- 3 黒褐色 (ローム小ブロックを若干含み、ローム粒を少量含む。しまりは普通。)
- 4 暗褐色 (ローム小ブロックと焼土粒・ローム粒・ローム粒子を若干含む。しまりは普通。)
- 5 暗褐色 (ローム小ブロックとローム粒を少量含み、黒色粒も若干含む。しまりは良い。)
- 6 黑褐色 (ローム粒とローム粒子を少量含む。しまりは良い。)
- 7 黒色 (ローム大ブロックを若干含む。しまりは良い。)

第41図 第3号土坑実測図

第3号土坑出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形・成形等の特徴				色調	胎土	焼成	備考
			孔径	重量(g)	現存率(%)	出土地点				
1	土箇 壺	高さ 7.8 口径 13.9	丸底気味。体部上位から口縁部の一部にかけての破片。 口縁部は内側として立ち上がり、口縁部との境に棱を持つ。 口縁部は外側傾する。口縁部内・外側横模ナナ。体部内・外 面へラ削り。				黒褐色	砂粒	良好	外面全体に煤付 北面部中央底面

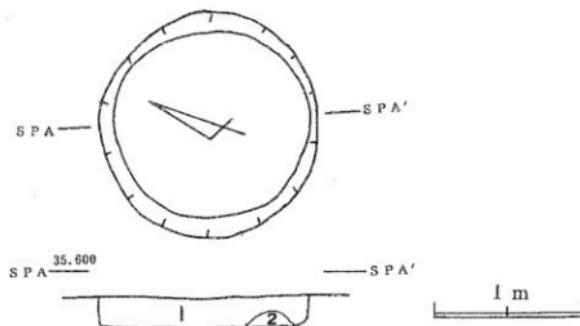
番号	器種	法量(cm)	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考	
							(%)	
2	有孔円板	1.8	2.1	0.3	1.5	100	中央部覆土上層	青石
3	有孔円板	2.0	2.5	0.3	2.0	100	中央部覆土中層	×



第42図 第3号土坑出土遺物実測図

(23) 第4号土坑 (第43図)

7号住居北壁の中央から北西方向に1.50m程離れた位置に所在する。形態は概ね円形を呈し、東西径1.54m、南北径1.53m、深さ0.21mを測る。底部は平坦であり、遺物は皆無である。



土層例

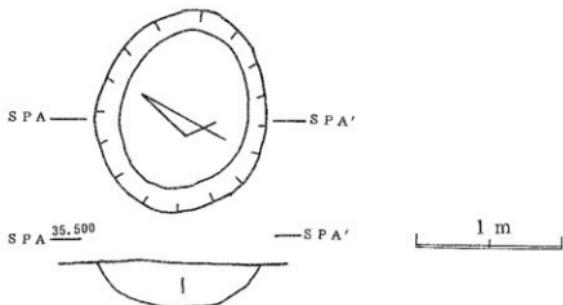
1 黒褐色 (ローム粒・ローム粒子・黒色粒子を少量含む。しまりは普通。)

2 墓褐色 (ローム小プロック・ローム粒・ローム粒子を少量含み、黒色粒も若干含む。しまりは普通。)

第43図 第4号土坑実測図

(24) 第5号土坑 (第44図)

8号住北壁の中央から北西方向に0.35m程離れた位置に所在する。形態は概ね橢円形を呈し、東西径1.39m、南北径1.18m、深さ0.30mを測る。底部は壁上に向かって彎曲しており、遺物は皆無である。



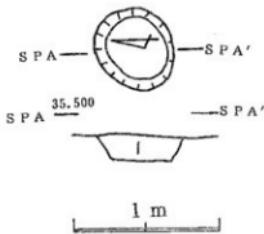
土層凡例

1 黒 色 (ローム紋とローム粒子を若干含む。しまりは良い。)

第44図 第5号土坑実測図

(25) 第6号土坑 (第45図)

8号住北西隅から北西方向に2.00m程離れた位置に所在する小規模造構である。形態はほぼ円形を呈し、東西径0.50m、南北径0.55m、深さ0.16mを測る。遺物無し。



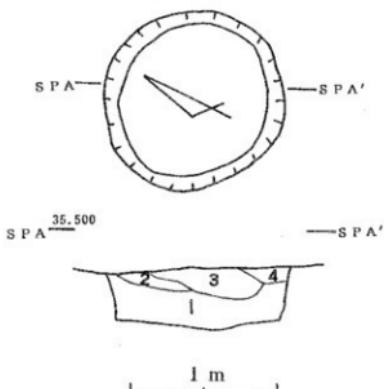
土層凡例

1 黒 色 (ローム紋を若干含む。しまりは普通。)

第45図 第6号土坑実測図

(26) 第7号土坑 (第46・47図)

10号住北壁から北に0.45m程離れた位置に所在する。形態はほぼ円形を呈し、東西径1.28m、南北径1.26m、深さ0.39mを測る。底部はほぼ平坦で、中央部の東側において白色粘土塊が認められ、その西からは白玉（1点）が検出されている。



土層凡例

- 1 喀褐色（ローム粒・ローム粒子・炭粒を少量含む。しまりはやや良い。）
- 2 喀褐色（ローム粒を若干含む。しまりは普通。）
- 3 黒色（ローム粒子を少量含む。しまりは普通。）
- 4 喀褐色（ローム粒子と黒色粒を若干含む。しまりは普通。）

第46図 第7号土坑実測図

第7号土坑出土遺物観察表

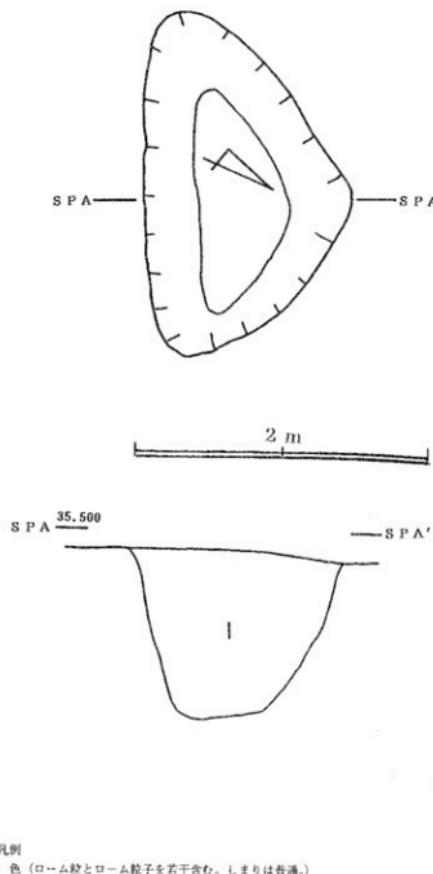
番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚 (mm)					
1	白玉	0.6	0.6	0.2	2.0	0.1	100	中央部覆土中層	滑石



第47図 第7号土坑跡出土遺物実測図

(27) 第8号土坑 (第48図)

6号住の西側及び3号土坑の南側の位置に所在する。形態は不整隅丸三角形状を呈しており、東西径2.30m、南北径1.44m、深さ1.14mを測る。底部はほぼ平坦で、遺物は皆無である。



土器凡例

I 黒色 (ローム粒とローム粒子を若干含む。しまりは普通。)

第48図 第8号土坑実測図

(28) その他 (第49回)

今回の調査において、遺構の確認作業のために取り出した土砂の主たる放棄場所として、搬出の利便と効率を考慮のうえ、調査区外に隣接する東・西の両地区を設定した。とくに16号住の周辺部に集中的に多量の土砂を搬出した。ここに収録した表採及び土捨て場からの採集遺物のうち、ほぼ90%は東地区から得たものである。

種別及び数量は次のとおりである(計43点)。

滑石製品 有孔円板(2点) 白玉(39点)

石製品 砥石(1点)

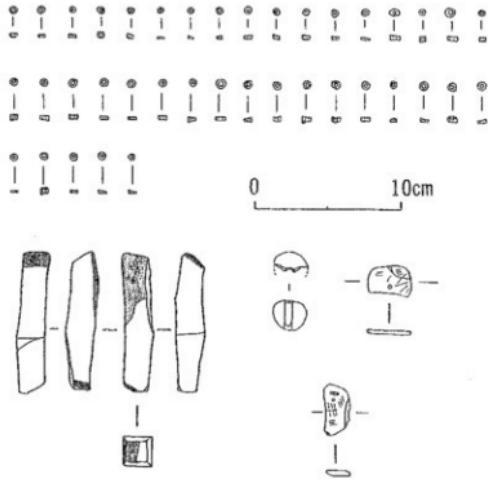
土製品 土玉(1点)

表採及び土捨て場から得た遺物の観察表(1)

番号	器種	法量(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
1	有孔円板	2.1	3.0	0.3	2.0	3.0	60	C-5地区	滑石
2	"	3.5	1.8	0.4	1.5	4.5	40	D-3地区	"
3	白玉	0.5	0.4	0.3	2.0	0.1	100	土捨て場	"
4	"	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
5	"	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	"	"
6	"	0.5	0.5	0.4	2.0	0.1	100	"	"
7	"	0.5	0.4	0.3	2.0	0.1	100	"	"
8	"	0.4	0.4	0.1	2.0	0.1	100	"	"
9	"	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	"	"
10	"	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
11	"	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
12	"	0.4	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
13	"	0.5	0.4	0.3	2.0	0.1	100	"	"
14	"	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
15	"	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
16	"	0.7	0.5	0.4	2.0	0.2	100	"	"
17	"	0.4	0.4	0.5	2.0	0.1	100	"	"
18	"	0.7	0.6	0.4	2.0	0.2	100	"	"
19	"	0.4	0.4	0.4	2.0	0.1	100	"	"
20	"	0.5	0.5	0.4	2.0	0.1	100	"	"
21	"	0.5	0.5	0.4	2.0	0.1	100	"	"
22	"	0.6	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
23	"	0.6	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
24	"	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
25	"	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
26	"	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
27	"	0.6	0.6	0.2	2.0	0.1	100	"	"
28	"	0.6	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
29	"	0.5	0.5	0.4	2.0	0.1	100	"	"
30	"	0.5	0.5	0.5	2.0	0.1	100	"	"
31	"	0.6	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
32	"	0.5	0.5	0.3	2.0	0.1	100	"	"
33	"	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	"	"
34	"	0.6	0.6	0.3	2.0	0.1	100	"	"

表探及び土捨場から得た遺物の観察表(2)

番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
35	白玉	0.5	0.6	0.3	2.0	0.1	100	土捨場	滑石
36	"	0.6	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
37	"	0.5	0.5	0.1	2.0	0.1	100	"	"
38	"	0.5	0.5	0.4	2.0	0.1	100	"	"
39	"	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
40	"	0.5	0.5	0.2	2.0	0.1	100	"	"
41	"	0.4	0.4	0.2	2.0	0.1	100	"	"
42	瑪瑙	9.5	2.0	1.9	...	53.0	...	C-3地区	4面使用
43	土玉	2.0	2.4	...	(5.0)	3.5	40	B-4地区	"



第49図 表探及び土捨場から得た遺物実測図

4 おわりに

今回の野殿深作遺跡の発掘調査で確認した遺構としては、いわゆる和泉期の範疇に属する土器を主体にする堅穴住居跡19棟と土坑8基である。

遺跡は、小貝川の右岸に大きく展開する沖積低地の西寄りに南北の方向で延びる標高30mほどを示す段丘上と、その縁辺部に広がる平坦地を構成区画として、5世紀中葉のころに機能していたと考えられる小規模集落跡である。

発掘調査も後半を迎えたころからである。いくつかの住居跡の貯蔵穴底部から、人為的と判断できる破砕状態の壺や壺類などの検出例をはじめ、4号住居跡では貯蔵穴に小型壺（ミニチュア）が、白色粘土塊で意図的に被覆されたと思われる出土例。大部分の高坏の出土状況が、その坏部と脚部との接合部分から人為的に破砕されていることが明らかに認め得られること。また6号住居跡の如くは、床面から側壁上部までの覆土の堆積層序の中に含まれる出土遺物の検出位置の状況把握をととして、覆土の堆積が明瞭に作為的である事実を確認でき得たことに加え、その堆積の過程で層別に各種の遺物が遺棄されていたことが窺えること。さらには多くの祭祀関連遺物（有孔円板・無孔円板・勾玉・管玉・臼玉・劍・小型壺など）は（別表参照）、本集落跡において、実際に祭祀儀式が執行されていたことを示唆する遺物なのであろうか。など、調査をとうして得られたいくつかの疑問に留意するとともに、出土資料の相互関係を検討しつつ、本遺跡の性格や特徴などを考えるに至ったのである。

遺跡をめぐる生活環境は極めて恵まれている。たとえば生活用水に関する点に触ると、遺跡が立地する台地の縁辺部からは、緩傾斜をもって鬼怒川（綱川）から小貝川（養養川）へ通じる流水路として開削された大谷川（大井口用水）の岸辺へと達し、傾斜地の下部からはいまなお枯渇することのない豊かな地下水が湧き出て大谷川に注いでいる。この湧水は、遺跡が機能していたころも集落の経営に欠かせない資源であったことが窺われる所以である。

集落構成の必須条件には地理的環境をはじめとして、風・水害や食料対策などに加え飲料用水の確保もあげられようが、当該地一帯はこれらの諸条件をある程度満たしていたと思われる。しかし、今回の調査結果からは、和泉期の100年にも満たない短期間の生活文化をとどめる集落であったことは明瞭であり、いわゆる短期廃絶型集落跡とも呼ばれる様相を示す典型例と言える遺跡であろう。

遺跡の東北方に接して大谷川左岸の沖積地に鎌田集落が存在する。先年、鎌田地区の水田を対象に大規模な基盤整備事業が実施された際、工事に伴っておびただしい量の土器が発見されている。たまたま蒐集されていた出土品を実見する機会を得たが、ほとんど壺や壺類の破片で占められており、その具体的な出土状況や遺跡の範囲などはまったく把握できなかった。しかし、地元民の談話などを整理してみると、明らかに微高地に営まれていた五領期の範疇に含まれる集落跡であった可能性が想定できるのである。だとすれば、本跡に先行する時期に短期間機能していたと推測される鎌田集落跡も短期廃絶型集落の範疇に属すると言える。鎌田遺跡の立地条件は本跡と基本的に異なっている。いま小貝川の流路に沿う微高地は本低地一帯によく発達し、低地の地形を特徴づけているが、かかる微高地に生活基盤をおくる人々の最大の悩みは小貝川の氾濫による堤防の決壊と水害であった。『統日本紀』神護景云2年（768）8月庚申條の記録によると、班田農民が国司の命で口分田の荒廃を防ぐために毛野川（鬼怒川）の改修工事を行っている。この記録は日本最古の本格的な土木工事として知られるが、東国における河川管理の実態は、この資料からも窺えるように、奈良時代から遙かに遡る古墳時代においても無策に等しい状態におかれていたことが想像できる。鎌田遺跡が短期間で廃絶に至る最大の

理由は、低地帯での農耕生活を維持することの厳しさから逃避せざるを得なかつた苦渋の選択があげられよう。治水対策がなおどりであった当時、たびたびの水害の影響による耕地の荒廃に、新たな安住の地を求めていた住民の心情が十分に理解できるのである。

昭和61年8月の台風10号の影響（下館地方の降雨量381ミリメートル）による大洪水のあと、小貝川流域の低地帯の住民に対する建設者の「河川激甚災害特別緊急事業」の施策によって5集落が集団移転し、109戸から構成される素晴らしい「旭ヶ丘団地」が誕生している。それは千年余に及ぶ地域住民の悲願が結実したものと言えるのである。その後、この事業はさらに発展し、河川空間を水害防止と自然環境の保護などを前提とする活用が計画的に推進され、川の一里塚・サイクリングロード・桜づつみ・フラワーベルトなど、小貝川流域の各所にその成果を見る能够である。人間存在の根本的な意味が20世紀の後半に至ってようやく開花したと言えそうである。

以下、調査結果をふまながら、野殿深作東遺跡の性格や特徴などを求めていきたい。

今回の調査による平面発掘面積は3,000m² (60m×50m) であり、確認し得た住居跡や土坑跡など各遺構の配置状況は、特定の場所に偏ることもなく調査区の全域で平均的に確認されている。複合する遺構は調査区の北西端の近くで検出された13号及び14号住居跡の1ヶ所のみで、その他の遺構は単独で確認されている。

住居跡の平面プラン・規模及び方向性について概観すると、表示したように18棟（完掘を果たせなかつた19号を除く）のプランは方形と長方形にはほぼ2分されている。方形を呈するのは1号・4号・5号・6号・7号・9号・10号・14号及び17号の9住居跡であり、長方形は2号・3号・8号・11号・12号・13号・15号・16号及び18号の各住居跡である。規模については、床面積が100m² (約30坪) を超える際立って大型に属する遺構は認められなかつたが、本跡では65m² (約20坪) を超す4号と7号住居跡の2棟が最大規模に属し、以下50m² (約15坪) クラスは10号住居跡。次いで33m² (約10坪) クラスでは3号・13号及び16号住居跡であり、25m² (約8坪) クラスになると1号・5号・6号及び11号住居跡があげられ、2号・8号及び9号はかなり縮小さ

住居跡別のプラン及び規模

住居No.	プラン	面積 (m ²)	坪数	備考
1	方形	28.08	8.5	⑦
2	長方形	23.32	7.1	⑩
3	長方形	40.15	12.2	④
4	方形	68.88	20.9	⑨
5	方形	25.00	7.1	⑩
6	方形	25.00	7.1	⑨
7	方形	73.92	22.4	①
8	長方形	22.40	6.8	⑫
9	方形	21.20	6.4	⑬
10	方形	57.76	17.5	⑪
11	長方形	25.76	7.8	⑥
12	長方形	7.54	2.3	
13	長方形	35.75	10.8	⑩
14	方形	11.56	3.5	
15	長方形	9.80	3.0	
16	長方形	37.26	11.3	⑤
17	方形	10.88	3.3	
18	長方形	12.90	3.9	
19	方形?	31.92	9.7	東西辺を5.65mとして推計

備考の丸付け数字は床面積換算 (3.3m² = 1坪)

遺構別の滑石製品等出土数

遺構	円板	劍	勾玉	管子	臼玉	計	ミニチュア土器
1住					11	11	
2住							
3住	3					3	
4住	5	2			1	8	1
5住	4	2				6	
6住	6	2				8	
7住	1				3	4	
8住	2		1			3	
9住							1
10住	1	1			36	38	3
11住					11	11	
12住							
13住		2		9	3	14	
14住							
15住							
16住			1		20	21	
17住							
18住							
19住	1					1	
3土	2					2	
7土					1	1	
土器場等					39	39	
計	25	9	2	9	125	170	5

れて20m²（約6～7坪）クラスの住居跡となる。14号・17号及び18号住居跡にあっては10m²（約3坪）ほどの床面積を維持しているが、12号・15号に加えて17号住居跡などは、その所在が確認された時点から住居造構として扱っていたものの、小規模であり、柱穴の痕跡もなく、かつ立上りの浅い側壁など、極めて粗雑な構造からは一般的な住居の機能を果たし得ていたとは言い難い。むしろ小屋組的な構造の屋外作業施設として供用されていた可能性が高い（面積を実感的に捉るために、あえて坪を併記した）。一方、方向性については8号・13号・15号及び16号住居跡を除く15棟の長軸は概ね北西方向に偏し、除かれる4棟は東方及び北東の方向を指し、総じて一定の方向性を示していると言える。これらの住居跡にあっては規模や構造面、あるいは方向性に多少の相違があるとしても、基本的な面においては類似点も多く、かつ遺存状態も比較的良好であり、いずれもこの時期に一般的に見られる堅穴住居跡に共通する様相を示していると言える。室内施設にあっても貯蔵穴を設備した例も比較的多く、また7号住居跡の如くは北壁に幅1mほどの入口設備が付設され、本跡における唯一の入口設備の例と言える。総じて規模や構造面からは特記すべき点は見あたらないが、理解に苦慮した点は、6号住居跡の側壁立ち上がりの平均値が70cmを測るため、その高さから一般的な常識をもって、入口施設が付設するものと期待したものとの痕跡はまったく認められなかった。したがって、当該造構は當時使用する必要性のなかった構築物だったのか、あるいは梯子的な工作物を充てて出入りの便を図ったものか、それとも必要時にのみ仮設していたのか、などが推測されたが、いずれにしろいくつかの疑問点を投げかけられ、検討課題として残されている。

ここで、住居跡の配置をめぐる特徴などをあげておきたい。

発掘調査の完了後、今後に予定される開発計画の参考資料を得る目的のもとに本遺跡の範囲確認調査を実施した。すでに公有化が図られている調査区外の東部から南部にかけて、広範な面積を対象にローム上層面まで表土の削平作業を行い、遺構の有無の確認に努めた。北部では東西に延びる農道と、その北側に広がる耕作地は用途外にある関係から除外された。その結果、南部では遺構と判断できる土壙の変化はなく、東部には3か所ほど住居跡と断定するのにやや明瞭を欠く点もあったが、概ね方形形状を呈し黒色土が露呈する区画を確認した。

いま調査区東部での3か所にはそれぞれ住居跡が存在するものと一応仮定し、また調査区の西部で所在が明らかな野殿深作遺跡は、すでに平成5年夏に茨城県教育財団が発掘調査を実施し、和泉期に比定できる4棟の堅穴住居跡が検出されているので、これらの確認例を加えて集落跡の拡がりと遺構の配置状況などを考えていくと、野殿字深作地内の一带で和泉期において形成された集落の中心域は、今回の発掘調査区に求められるとても大きな誤りはないようと思われる。さらに調査区内で検出された19棟の住居跡には、多分に意図的な配置であることが推測できるのである。それは、調査区の南端近くで検出されている7号住居跡を概ね集落の南端として位置付け、調査区の東部と西部に配する住居跡から北端に所在する19号住居跡に達なる配置状況を観察する限り、あたかも、環状を呈することが理解されると同時にバランスを考慮した意図的な配置であることが指摘できる。このような配置状況からは、少なくとも事前に集落地の選定をはじめ、集落の全体的構成計画が緻密に立てられ、それに基づく集落形成が図られていた可能性が考えられるのである。ただこの場合、13号住居跡は14号住居跡と複合関係にあり、また1号・3号・5号及び16号住居跡に囲まれる状況で遺存する2号住居跡は、4棟との位置関係に隔たりがなく接近しすぎる向きが指摘できるために、この13号及び2号住居跡の2棟は他の住居跡よりも多少遅れて構築されたものと想像できる。

ところで発掘調査区で検出された石製模造品131点のすべては12棟（1号・3号・4号・5号・6号・7号・8号・10号・11号・13号・16号・19号）の住居跡と、2基（3号・7号）の土坑跡から伴出したものであり、土製模造品（ミニチュア土器）5点も3棟（4号・9号・10号）の住居跡から検出されたものであって、遺構

外からの発見はまったくなかった。

これらの石製模造品や土製模造品については、すでに弥生時代のころから信仰に伴う祭器類として用いられるようになり、それが4世紀の末ごろに至り、祭祀儀式の斎場として機能していたことを示唆する遺跡の特徴的な伴出遺物となるが、これが5世紀から6世紀代にはいわゆる祭祀遺跡として全国的に分布するようになる。このような現象は、遺跡や遺物の内容までも画一的となり、短期間のうちに等質的な遺跡が各地で営まれるようになる。その歴史的背景には、前方後円墳の地方への普及にも見られるように大和朝廷の勢力伸長と切り離しては考えられないという。古代における神への認識は、現代の我々には理解しにくい点が多い。つまり、生活に密接に関係する草木・池泉湖沼から巨樹・巨石・山塊・海洋島嶼などに対する神靈の存在を強く意識し、これらの自然現象に畏敬の念を抱くとともに信仰の対象とし、そこに依る神は靈能を發揮するものとして堅く信じていたようである。神に祈願する内容は、農耕の豊穰をはじめ生活全般にわたっていたことは言うまでもない。

いま祭祀遺跡として本集落を特定するにあたって、その祭祀が屋外において行われていたことが推測できる遺構や遺物は発見されてないことから、主たる祭祀の斎場は住居内と推察せざるを得ない。それにしても住居跡内部から祭祀に関わると思考される施設も見当たらない。したがって、祭祀の対象が何であったのかを明確にし難いために、以下、遺構・遺物などの検出状況をどうして室内祭祀の根拠などをさぐっていきたい。

- ① 1号住・焼失家屋であり、焼土が床面に充満するわりには残存炭化材が極めて少量であることは、完全に焼却されたのであろうか。炭化米検出。
- ② 3号住・炉跡直上に壺を置き、その上に砥石を置くなど、あまり例のない出土状況と言える。
- ③ 4号住・南壁沿いのピット内部に埋葬された白色粘土塊の下部から小型壺（ミニチュア）が、その西側から砥石が検出される。また北東コーナーの床直上から出土している高壺は脚部を失っており、その壺部の破缺面に力を加えたと思われる痕跡が残る。
- ④ 5号住・北西コーナーの床直上から高壺2点出土。いずれも脚部が破碎され、それぞれの壺部は接近して遺存していた。ともに優美な造りの土器であるが、極めて不自然な出土例と言える。
- ⑤ 6号住・焼失家屋であり、炭化材が良好に遺存。側壁の立上がりが高く、覆土は人為的に埋め戻していたことが観察できるとともに、その過程において円板・劍などの石製模造品を遺棄していることが窺える。刀子片・焼成前底部穿孔土器片も出土する。
- ⑥ 7号住・U字型の鉄製鍬先出土。北壁に出入口を付設。床直上から鉄滓検出。東南コーナー付近の床直上から壺2点、高壺3点、壺1点が出土しているが、いずれも破碎状態。うち壺の2点はやや大型の壺の中に小型の壺が納められる特殊な出土例。また脚部を欠く高壺の壺部が2点と壺1点の3個が重ねられた状態で出土する。土玉7点、鉄滓12点は他の住居跡に比べ量的に多い。
- ⑦ 8号住・石製模造品の勾玉1点出土。床直上から完形の壺・壺とともに鉢型を呈する单孔の壺及び砥石などが出土する。
- ⑧ 9号住・脚部と壺部の切断面が磨かれた如く痕跡を残す高壺と、北西コーナーの貯蔵穴底部から破碎状態の壺1固体分が、また床直上から内・外面ともに赤彩を施す小型壺（ミニチュア）1点が出土する。
- ⑨ 10号住・北壁沿いから壺・壺・高壺などの完形品が数個出土。また東南コーナー付近からも白玉が36点出土しており、床直上からも小型壺（ミニチュア）3点が出土する。
- ⑩ 11号住・柱穴なく、側壁の立上りは浅い。とくに東南辺に沿う床面は地山と同一レベルを示し、ほとんど側壁の痕跡は認められない。床中央部に炉を設ける。北西コーナーの北と南に付設される貯蔵穴底部からそ

- それぞれ破砕状態の高坏が検出されているが、これは同一固体の高坏を意図的に二分割して貯蔵穴内に遺棄されたものである。また、南側の貯蔵穴からは白玉4点が出土する。
- ⑪ 12号住・小規模ながら床中央部に炉が設けられ、その付近から鉄滓が出土する。
- ⑫ 13号住・床直上から管玉9点が一括出土する。
- ⑬ 14号住・13号住に切られる複合住居跡で建て替えが行われている。一次住居の床レベルは13号住と同一。二次住居の床面積は一次のそれよりも若干広くなっている。床中央部から北東コーナーにかけて相当量の碎かれた土器片が集中して出土する。
- ⑭ 15号住・床中央部に炉を設ける。鎌先が出土する。
- ⑮ 16号住・覆土から高坏の脚部が2点出土。南西コーナーに付設される方形状の貯蔵穴底部に焼土塊が見られる。床中央部に長方形形状の掘方があり、その北側の2か所に炉が設けられ、炉の内部から1固体分の高坏が脚部と坏部に碎かれた状態で出土する。遺構のほぼ全域から白玉20点が検出される。
- ⑯ 17号住・側壁の立上りはほとんど認められず、床面は地山のレベルと同一。西側に貼床が顕著に残り、そのままから鉄滓が数点出土する。
- ⑰ 18号住・17号住とほぼ同じ構造で床面の輪郭を3か所のピットから想定する。ピットには白色粘土が詰められ、床は貼床を呈する。
- ⑱ 19号住・調査区の北端に位置し、農道との関係で部分調査にとどまる。鹿沼土を敷き詰めて貼床とした手法が窺える。焼失家屋で炭化材が良好に遺存する。白色粘土塊が南壁の中央から北に大きく拡がり延びる。
- ⑲ 土坑跡のうち、4号・5号・6号及び8号については用途不明である。
- ⑳ 1号及び2号土坑跡・焼土粒と炭粒が混在する堆積層が観察される。
- ㉑ 3号土坑跡・全体的に焼土粒が堆積。底部直上から有孔円板2点と碗片が出土する。
- ㉒ 7号土坑跡・底部中央部で白色粘土塊が認められ、その付近で白玉1点を検出する。
- ここに主たる遺物・遺構などの出土状況と観察結果を整理してみたが、さらに、石製及び土製模造品を除く他の遺物について検討してみると、一般の住居跡では得られないいくつかの特殊な問題点がある。とくに高坏に関しては極めて不可解な扱いが注目されるのである。たとえば2個の貯蔵穴に同一固体を分割のうえそれぞれ遺棄されているばかりか、相当数の高坏が坏部と脚部とが意図的に破砕されており、その要因は明らかに祭祀行為との関連で考えざるを得ないし、かつ高坏は祭祀を行う際に多用された主要な祭具であった可能性が容易に想像できる。また破砕状態の壺や甕などが、石製模造品の白玉など玉類を多量に収納していた出土例がすでに報じられていることから、これらの土器も祭祀儀式には不可欠の祭具であったかも知れない。さらに単純口縁で単孔の鉢形を呈する完形の瓶底部片14点が出土している。瓶の本来的な用途は壺や甕と組み合わせて炊飯具として用いられたもので、それとの関連でカマドの問題が浮上してくるが、東日本においてカマドが住居内に常置され一般化するのは6世紀以降であり、それよりも先行する時期に営まれている本跡の住居跡内には、カマドの付設はまったくなく、19号住居跡の如く多量の粘土の出土状況をもって粘土組のつくりつけカマドの遺存とは認められない。したがって、瓶もまた壺や甕と同様に祭具類として供用されていたものと思われる。
- このように、主として土器類の遺棄の実態をどうして推測されること、土器類が祭祀儀式を行う際に、つなづね使用されていたと仮定しても、その量的面と極めて粗雑な破砕遺棄の状態からは、各住居跡において、僅かな回数の祭祀儀式だった可能性が容易に想像できるのである。
- なお、鹿沼土を敷き詰めて床面を固定させている19号住居跡の如くは、鹿沼土で埋葬主体部を構築し、県域における出現期古墳のひとつにあげられる岩瀬町・狐塚古墳の例との関連から、古墳時代の前半のころは、県西

地方において鹿沼土に対する呪術的な特殊な扱いが一般化していたのかも知れない。してみれば、住居の構築前に、すでに祭祀を前提とする意図が見え隠れしていることも十分に窺うことができるのであり、当該集落跡の特殊な性格的一面を覗かせているとも言えるのである。

以上、発掘調査の結果からは、古墳時代中期前葉のころに機能していた小貝川右岸台地上の一集落が、和泉期という短期間の経営をもって廃絶されたばかりか、意外にも祭祀儀礼に携わっていた專業集団であることに加えて、遺棄された数々の祭具類の出土状況などをどうして、集落跡の性格を知り得たわけである。

最後に触れておきたいのは祭祀儀礼の対象である。遺跡の立地と生活環境から考えられることは、この地方が古くから水に関わってきたことを物語る、いわゆる精神的文化財とも言うべき「水神」を祀る小祠が小貝川流域の低地帯にいくつも建っている。治水対策もなく、かつ、水路が固定された川筋もなかったと判断できる当時にあっては、低地帯に生産基盤をおく住民はたえず洪水の危険に脅かされていたことは容易に想像できる。したがって、野殿台地から望まれる広大な低湿地のさらなる安穏を祈願して、おそらく「水神」を奉祀していたと推測しても不自然ではあるまい。集落をあげて神の靈威にすべてを託していたように思われるのではないのである。

おわりにあたり、意をつくせなかつた面も多分にあり、かつ、独断と即断で記した点も少なくないと思われる。それはすべて浅学非才のなせるところであり、お許しを願いたい。

参考文献

- 考古学資料刊行会『香清水遺跡調査概報』昭和43年
- 西宮一男『常陸孤塚』昭和44年
- 大場磐雄『祭祀遺跡（神道考古学の基礎的研究）』昭和45年
- 茨城県教育委員会『茨城県遺跡地名表』昭和45年
- 船橋市教育委員会『外原』昭和47年
- 下館市教育委員会『外塚遺跡』昭和60年
- 筑波大学歴史・人類学系『古墳測量調査報告書1（茨城県南部古代地域史研究）』平成3年
- 建設省『鬼怒川・小貝川（自然文化歴史）』平成5年
- 茨城県教育財團『野殿深作遺跡』平成6年

写 真 図 版



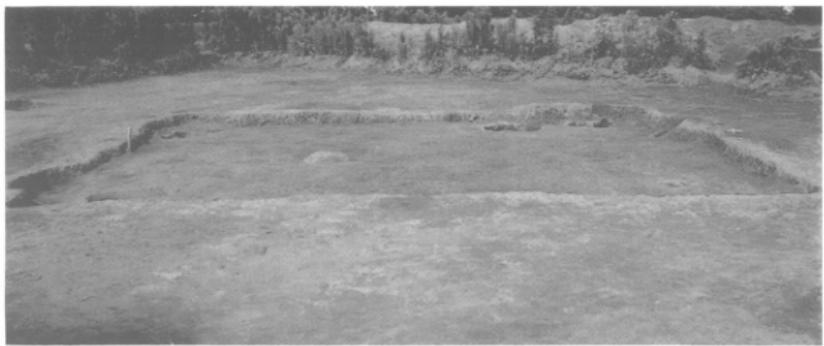
遺跡から筑波・足尾・加波の山並みを望む



遺跡全 景



現場テントの下で団棟のひととき



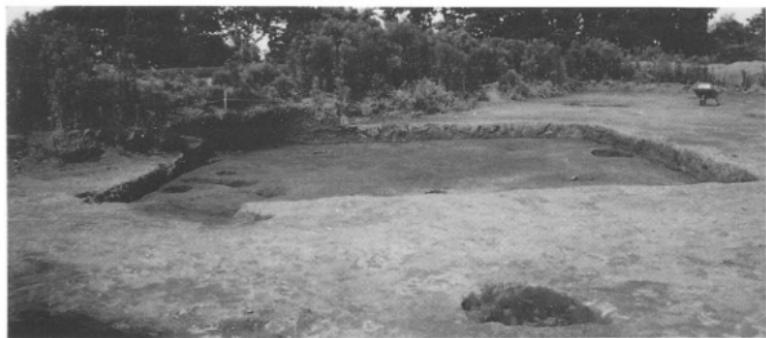
第 1 号 住 居 跡



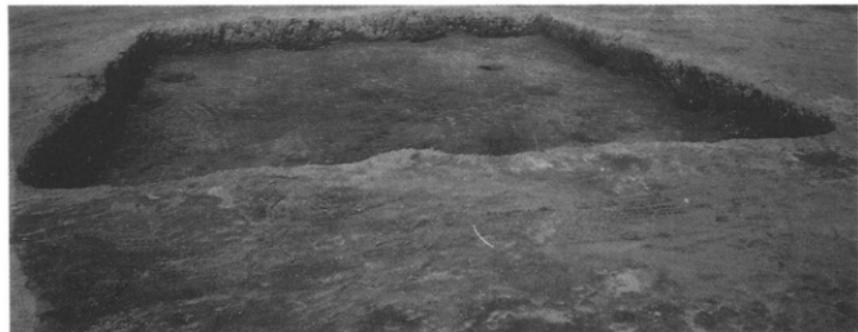
第 2 号 住 居 跡



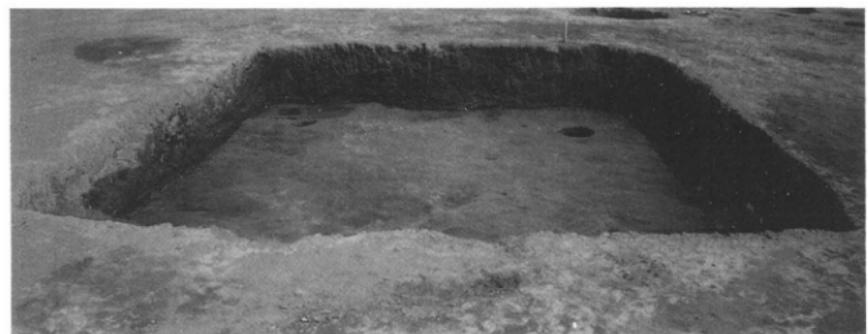
第 3 号 住 居 跡



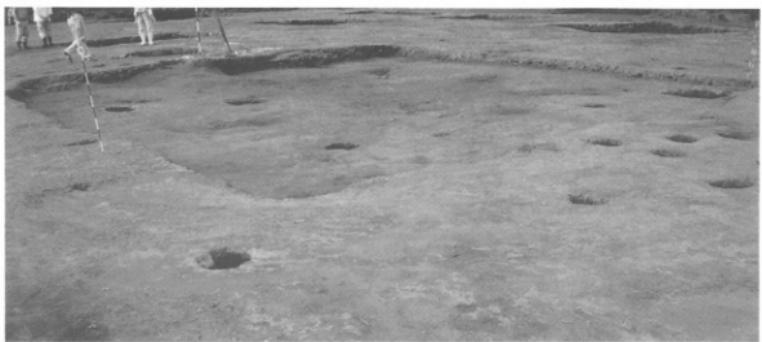
第4号住居跡



第5号住居跡



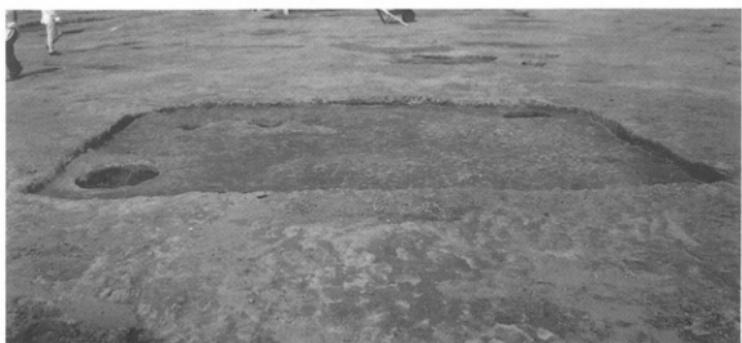
第6号住居跡



第 7 号 住居跡



第 8 号 住居跡



第 9 号 住居跡



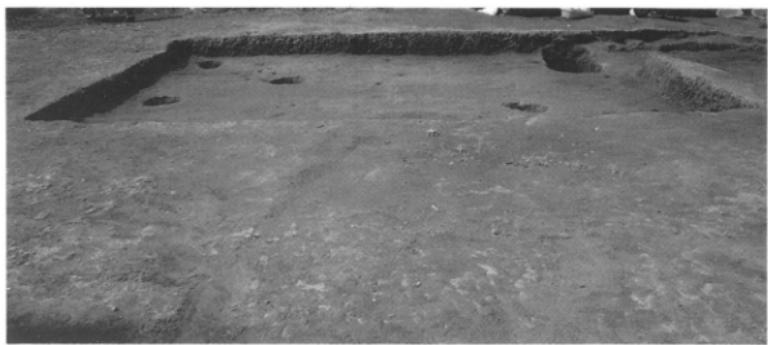
第 10 号 住居跡



第 11 号 住居跡



第 12 号 住居跡



第 13 号 住居跡



第 14 号 住居跡



第 15 号 住居跡



第 16 号 住居跡



第 17 号 住居跡



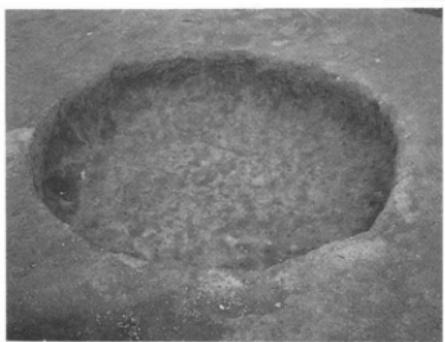
第 18 号 住居跡



第 19 号 住 居 跡



第 1 号 土 坑



第 2 号 土 坑



第3号土坑



第8号土坑



第3号住居跡・砥石・壺の出土状況



第4号住居跡・貯蔵穴内白色粘土下部の小型壺出土状況



第4号住居跡・有孔円板の出土状況



第5号住居跡・陶片の出土状況



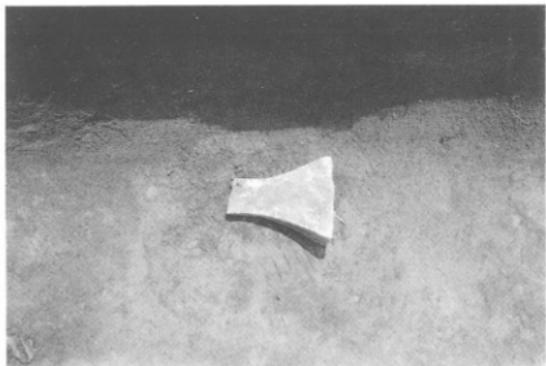
第7号住居跡・土器の出土状況



第7号住居跡・瓶の出土状況



第7号住居跡・鋤先の出土状況



第8号住居跡・砾石の出土状況



第9号住居跡・貯蔵穴内土器の出土状況



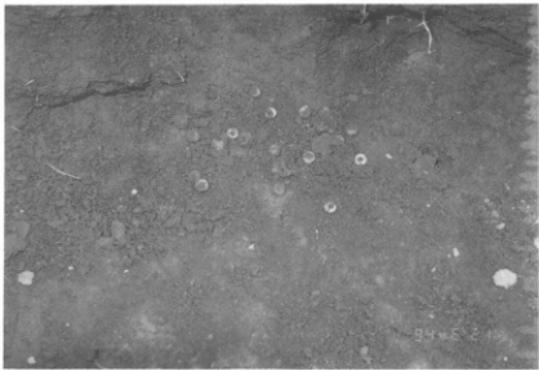
第10号住居跡・須恵器(口辺部)の出土状況



第10号住居跡・貯蔵穴内土器の出土状況



第10号住居跡・小型壺の出土状況



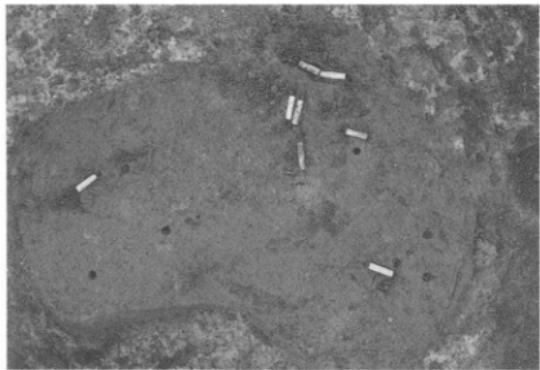
第10号住居跡・臼玉の出土状況



第10号住居跡・坏の出土状況



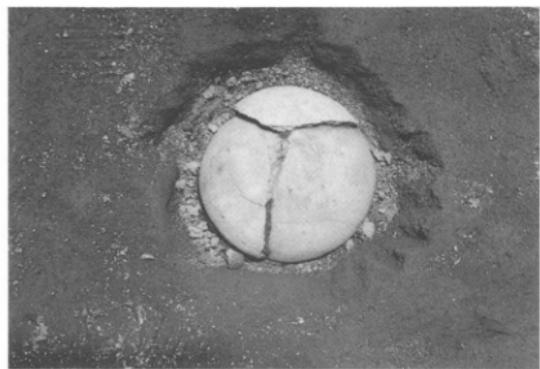
第12号住居跡・堅く焼きしまる床面の状況



第13号住居跡・管玉の出土状況



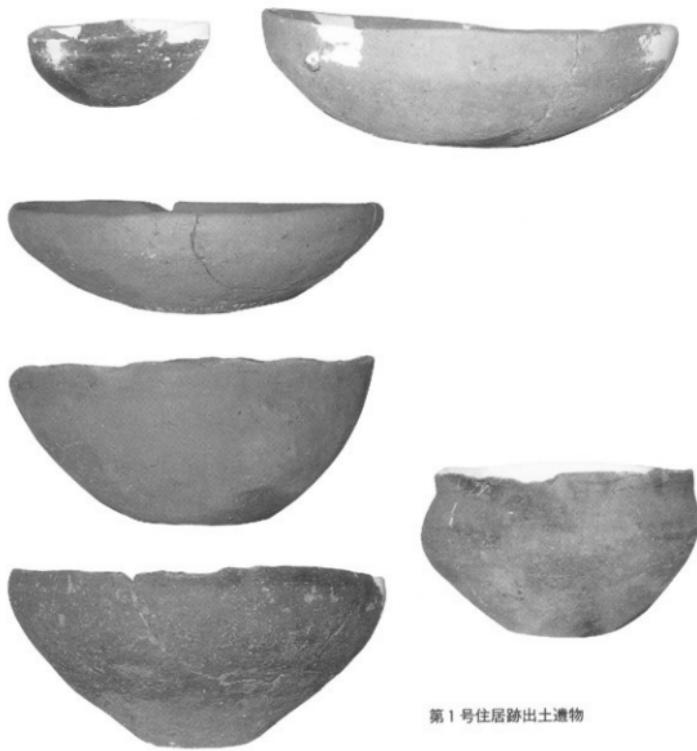
第15号住居跡・鎌先の出土状況



第16号住居跡・壺の出土状況



第16号住居跡・勾玉の出土状況

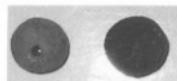
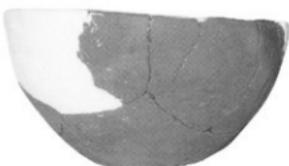


第1号住居跡出土遺物



第3号住居跡出土遺物

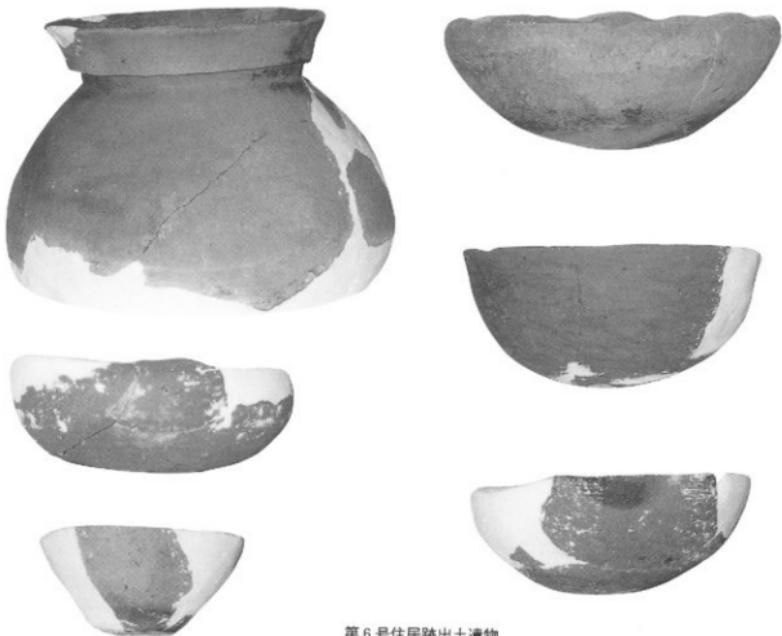
第2号住居跡出土遺物



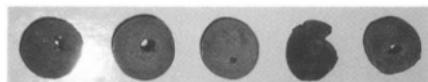
第4号住居跡出土遺物



第5号住居跡出土遺物



第6号住居跡出土遺物



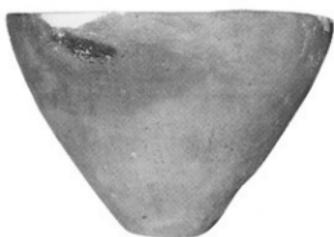
第7号住居跡出土遺物（1）



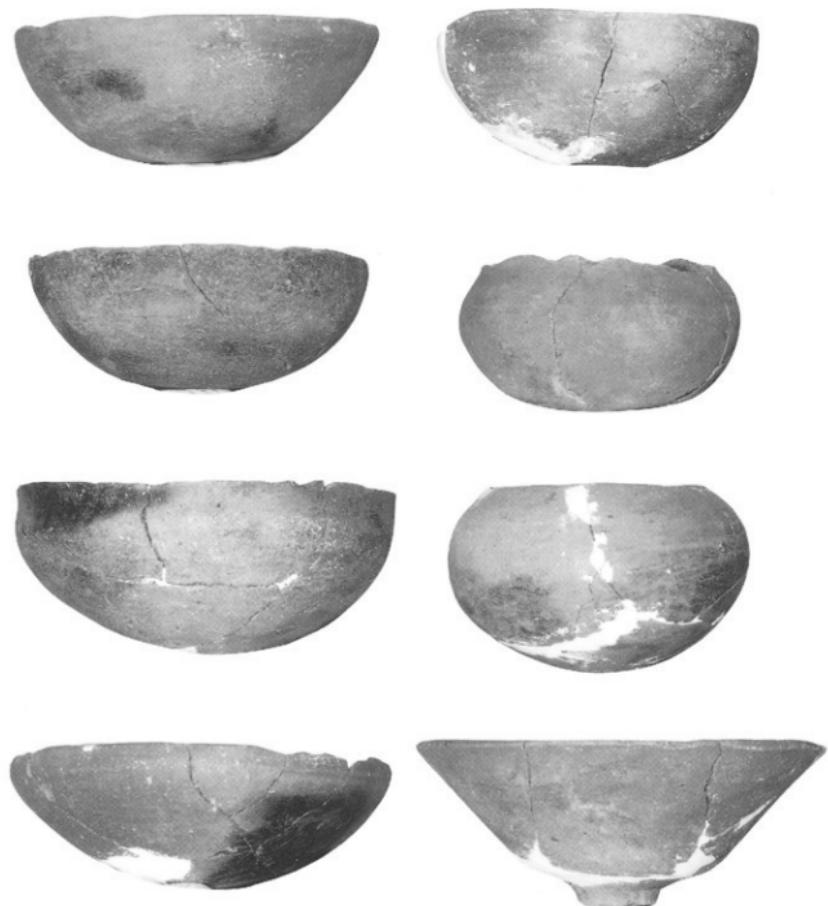
第7号住居跡出土遺物（2）



第7号住居跡出土遺物（3）



第8号住居跡出土遺物（1）



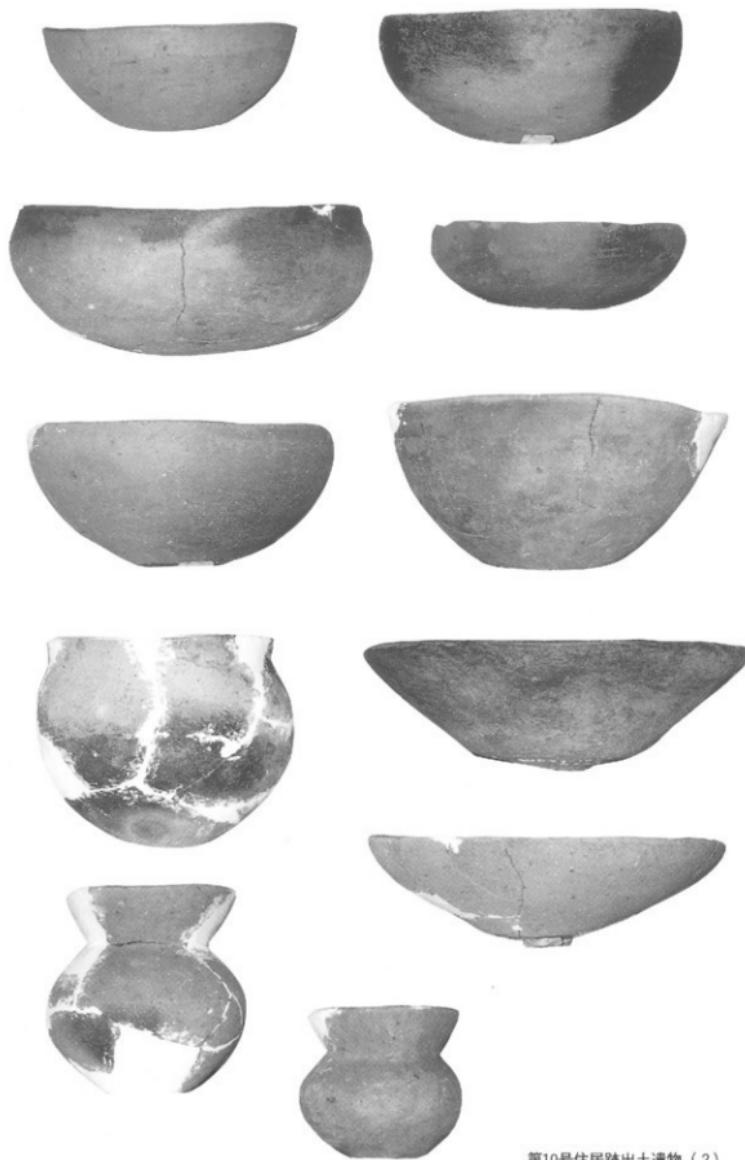
第8号住居跡出土遺物（2）



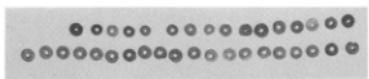
第9号住居跡出土遺物



第10号住居跡出土遺物（1）



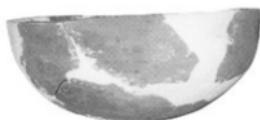
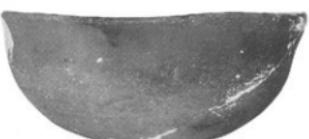
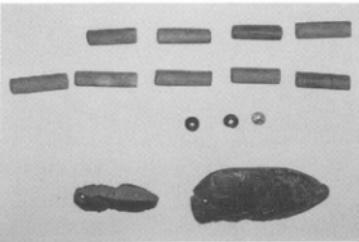
第10号住居跡出土遺物（2）



第10号住居跡出土遺物（3）



第11号住居跡出土遺物



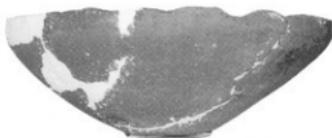
第13号住居跡出土遺物



第14号住居跡出土遺物



第15号住居跡出土遺物



第16号住居跡出土遺物（1）



第16号住居跡出土遺物（2）



第3号土坑出土遺物

野殿深作東遺跡
(集落跡発掘調査報告書)

平成8年3月31日

発行 下館市教育委員会
下館市下中山732の1

編者 西宮一男

印刷中野印刷
TEL 0296(25)4737代